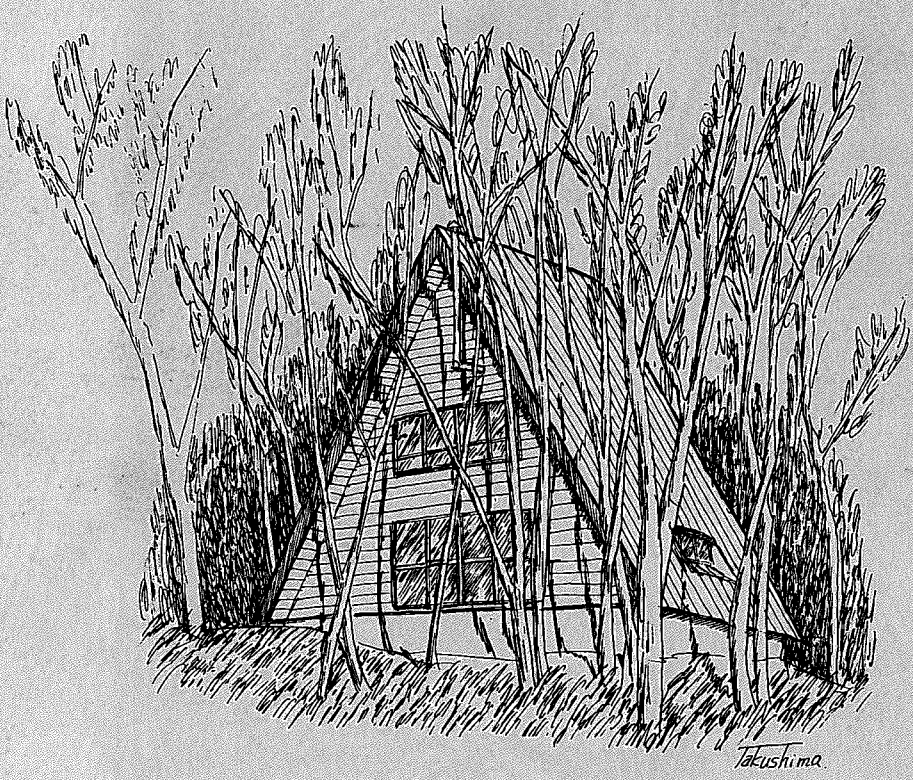
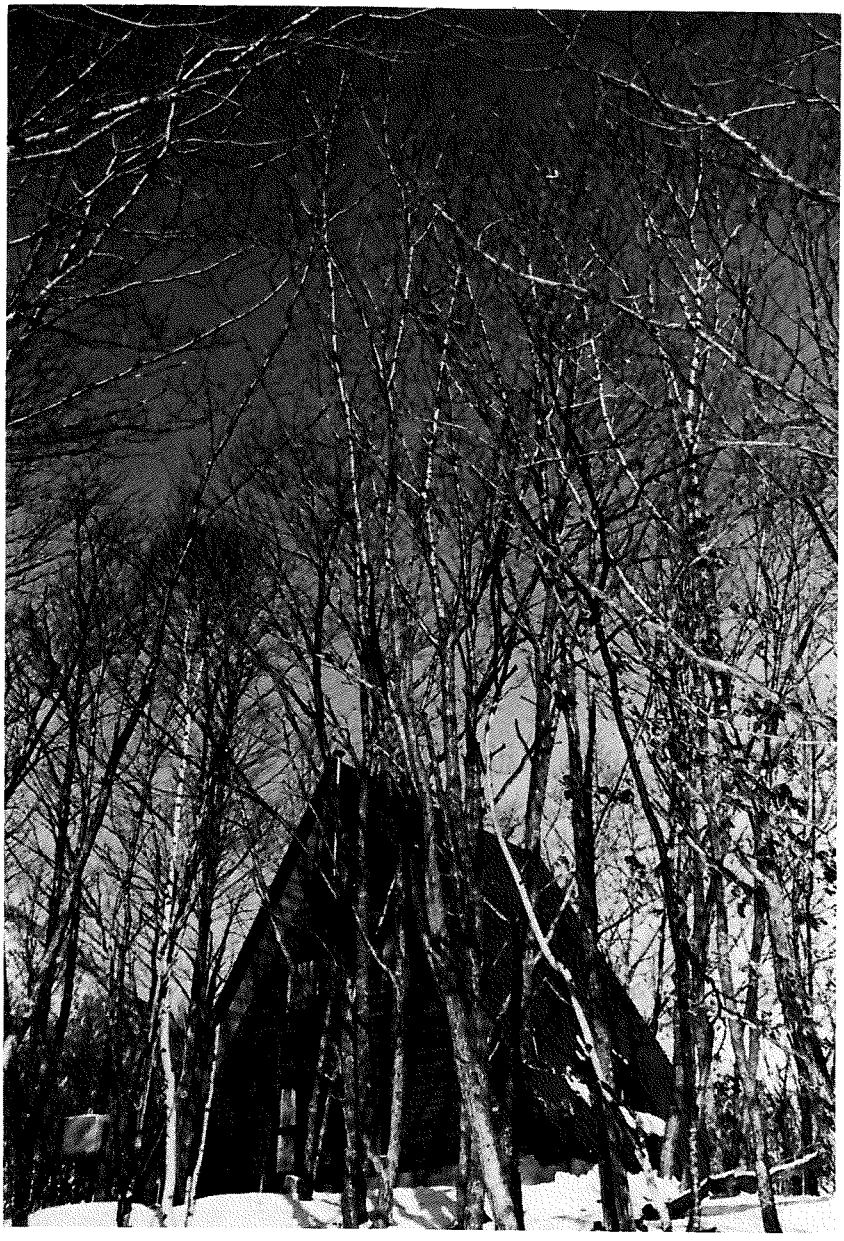
北大恵迪寮

士幌小屋活動の記録

——チセ・フレップよ永遠に——





正月を迎えたチセフレップ

鶴の首
(水源地)
東雲湖
(しののめ)
山望天
然別湖
クッシャロ湖
白雲山
(ウサギ生息)
牧場
田
畑
道々士幌然別湖線
ウォーブル
東京ロッジ
いのしし
日高山脈
北国倉庫
士幌市街
十勝平野

"屋小"
周辺図

はじめに

士幌小屋「チセ・フレップ」は北大恵迪寮の寮生と十勝の士幌町が協力し、それに北大OB、教官、士幌町民、その他大勢の方々による物心両面にわたる援助をえて78年の秋にできた小屋です。

そもそもの始まりはと言えば、75年秋の恵迪寮祭に溯ることになります。それから完成まで3年、そして完成してからすでに4年半が経ってしまいました。この間多くの人達が小屋に携わる活動に取り組んできました。

この活動の母体となった恵迪寮は83年4月、新寮の完成と共に閉寮となります。そこで、これまでの活動をひとまずとりまとめておこうということになりました。それがこの本をつくる目的の一つです。

ただ、ここで書いておきたいことが一つあります。それは、この本を単なる懐古文集に終らせたくないということです。これから小屋を利用する人、或いは何度も利用しているけれど、どんないきさつで建ったかよく知らない人、そんな人達にはどういう経緯でできた小屋なのか知って貰いたいと思います。逆に設立当時に関わっていたのに今は小屋のこと少し忘れかけてしまった人達には小屋がその後どんな風に使われているかをお知らせしたいと思います。

前述の様に北大恵迪寮は83年春に閉寮となります。これは単にバンカラ気風のオンボロ寮がなくなるということだけを意味するものではありません。難しい議論は抜きにしても、大学内において学生をより強力に管理していこうという動きは誰の目にも明らかです。恵迪の閉寮もそのような動きの一つとして捉えることができると思います。眼を地方に転じれば、財政支出の切り詰めなど世知辛いことが多くなって一見無駄と思われるようなことには中々支出できにくいような情況があります。

そんな折ですから、この活動は大きな意味を持つと考えられます。ここにその記録を残すと同時に、小屋の設立趣意がよりよく理解され、その基本となる精神が末長く伝わることを願ってやみません。

1983年3月31日

小屋史編集委員会

チセ・フレップよ永遠に

―士幌小屋活動の記録―

≪目　　次≫

設立に至るまで …… 1

1．「士幌小屋」初期の頃…… 2
2．小屋の概要が決まるまで…… 8
3．一次趣意書…… 13
4．二次趣意書…… 17
5．小屋設立の現実化に向けて…… 20

建設日誌から…… 45
どんな小屋が建ったのか…… 53

小屋は建った。そして・・・…… 61

1．小屋設立以後の活動概説…… 62
2．チセ・フレップがより広く使われるためには？ …… 64
3．小屋の管理・運営…… 70
4．趣意の実践…… 73
5．今後に向けて…… 82

補　遺…… 83

あとがき…… 102

◆特別寄稿ほか◆

士幌小屋設立の思い出 ―――― 佐藤　創…… 34
設立当時のあるエピソード ―――― 多久島　実…… 35
結城先生と山小屋 ―――― 浪内　一洋…… 37
「チセ・フレップ」よ栄光あれ ―――― 結城　清吾…… 40
士幌小屋建設の頃 ―――― 山元　周行…… 42
チセ・フレップの思い出 ―――― 小木　聡…… 44
士幌文化の新しい息吹きを ―――― 宮部　功…… 69
チセ・フレップに想う ―――― 神戸　昇…… 72

設立に至るまで

小屋をめぐる活動が興ったのが1975年、そして今年が1983年。短かいようだが学生にとっては長い年月である。この9年間多くの寮生が関わってきた。恵迪寮が、大学1～2年教養生のための寮ということもあって、設立委員会は、年々新しい人間を迎えると同時に、毎年幾人かが抜けていった。各年度、各個人で、小屋に関わる思い入れも様々であったし、長い間にいろいろ変化があったのも事実である。にもかかわらず我々が一つの考えのもとで、活動を展開しつづけることが出来たその源泉は何だったのであろうか……。

この章では、事の発端から起工式の前夜までの足どりを、各年代の様々な語り口のまま語ってもらうことにする。

1. 「士幌小屋」初期の頃

困ったことに、「チセ・フレップ」と言われても、いまだにピンと来ない。たしかにこの手で6つの枝文字を玄関のドアに打ちつけたのに、僕にとってはやっぱりまだ「士幌小屋」なのだ。

僕らが初めて道東の小さな町、士幌の駅に降り立ったのは、'75年、大学1年の秋のことだった。勿論その時は、まさかこの土地に小屋を建てることになろうとは思ってもみなかったし、北海道という新しい土地を感覚的に受けとめることに夢中になっている時期だった。

そもそも、僕らの多くが、用も無いのに(!?)津軽海峡を渡って来たこと自体が因縁の始まりなのかもしれない。誤解を恐れずに言えば、海峡を渡って来る人間は、その前にもうひとつの海を渡っているのではないか——現実と観念の間の海を、牛肉と馬鈴薯の間の海を——「内地」の、「家」の、因循さ、欝陶しさ、どうしようもなさ、そんなものに自分の方から見切りをつけて、白紙の上にフリーハンドで自分の絵を描ける土地へ……。上野駅のホームを列車が出発して、黒ずみちぢこまり重なり合った視野の一切合財が、後ろへと飛び去ってゆくのを見ていたときの、あのしびれるような快感を僕は今でも忘れない。が、当然ながら、それらの認識と期待の大部分は幻想と誤解だった。(し、それを重々承知でなおも感じざるを得ないのがそれらの本質でもあるだろうが。)馬鈴薯だけの国は存在しない。——東京以上に都会(?)的な札幌の街、贅沢な服に濃い化粧の女たち、無口でおとなしい男たち、ブレザーを着た学生たち、予備校のような教室、判で押したような講義——「クラークがああ言ったのは、ボーイズがアンビシャスではなかったから、ただそれだけの理由ではないか?」そんな奇妙な疑惑さえ、ふと頭の中に湧き起こったりした。

そのような僕らを、寮は、少しばかり手荒く、少しばかり怠慢な空気の中に包み込んだ。

入寮してから約3ケ月後の部屋替えの時に、僕ら1年生の一部は、「朝5時に起きる会」という殆ど狂気のような部屋を創った。

「5時に起きる会創設にあたって」

斉藤　祐一(現在、九州の製薬会社勤務)

当初私が今回の部屋替えに期待していたもの、それは単純なことながら、恵迪入寮以来の「ダレた生活」からバイバイしたい、というそれだけであった。(中略)現在、少なくとも部屋替え以前は、伝統ある部屋サークル制というものは、皆の

認めるところ有名無実である。これに対し、これまでの私は、現在の学生気質、恵迪気質を鑑みてかなり悲観的であったが、自分からどうにかしようとする積極的意欲は持ちあわせていなかった。ところがところがである、今回同室の兄弟となった連中が言うことには、なんとまあ「朝5時に起きて時間を有意義に使い、北の地札幌の自然を愛し、そのうえ自ら知的生産者となり、北方恵迪文化のメッカとならん」と。私はギャギーンと一発くらわされ、「やはり世の中にはガンバルやつもおるもんだ。オレも何とかせにゃいかんばい。」と思い、この度31号の住人となったのであった…。(後略)

小木　　聡（現在、ホクサン勤務）

主体的な知的行動を通じて知識を獲得し、自らを教育し、旧来の教育によっては開発することのできない創造性発揮をめざそうではないか！（後略）

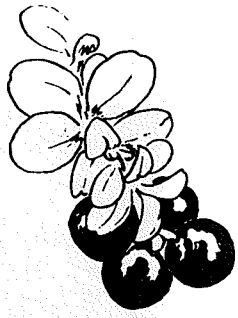
「私のやりたい事」

布野　洋一（現在琴似八軒中勤務）

今の大学の現状を考えてみよ。なんと講義のつまらぬ事。教授から教育の情熱が感ぜられるか？　皆無である。こんな講義に出る気がするか――。天気のいい日に、あの憂鬱な教室に行けるだろうか。(後略)

こんな「主体性」に飢えた連中が集まって、毎朝五時に起きて「カッコーストーム」「畑仕事」「散歩」「サイクリング」「晩餐会」「読書会」などなど…初めて体験する北海道の初夏の季節感の中で、それらは実に新鮮だった。夏休みにはなんと5人中3人が「昆布干し」のバイトに出掛け、それぞれが地獄の労働の中から「学問」や「大学」や「寮生活」の意味を問い直したのだった。

そうこうしている間に、きっかけはもう忘れてしまったが、僕は寮史編纂（S上）に出入りするようになり、ひょんなことから、かつて寮には「開識社」という名の文化行事が存在したことを知った。簡単に言えば、寮生自身による講演会なのだが、調べれば調べる程、その歴史的意味、文化意味の特異さが明らかになってくるのだった。――明治9年の札幌農学校創設当時に寮生の英語弁論会として始められて以来、何度もの中断を経ながらも、戦後しばらくまで実に70数年間、二百数十回（と記憶している）にわたって寮生の意思発表の場として、催され続け



フレップ

てきた――そして今、完全に忘れ去られてしまっている――同じ「意思発表」でも、その頃の代議員会は、借り物の言葉の不実なやりとりに終始していた――そんな寮内の状況にうんざりし始めていた僕らの眼には、開識社の精神（To open knowledge）がまたとなく新鮮なものに見えたのだった。学生という受動態の生活の中で自閉的な世界に浸るのではなく、考える主体、感情する主体、行動する主体として、現在の閉塞的状況を打ち破ってゆく――これは「5時起きの会」の中だけは意味が無い――寮内への呼び掛けに対して、確か10人そこそこの人間が集まったと記憶している。恵迪編集の深津さん（現在、北海道フィルムアート勤務）、寮史編纂の山本牧氏（現在、道新記者）etc…とりあえず、寮内の文化活動を志す人間の集まりを仮りに「開識社」と名付けて、部屋サークル活動とタイアップして広汎に活動してゆこう、ということになった。確か50年の夏頃だったと思う。その頃考えていた具体的な活動は、中庭の清掃、廊下の修理、寮史の輪読会、自主講座、講演会、映画の上映、劇の上演…等々、今ではうろ覚えだが、たしか図書室でやったその寄り合いが異様な熱気を放っていたことは記憶に生々しい。そこには明らかに、不実な次元に安定してしまっていた寮内政治（!?）闘争へのアンチテーゼが存在した。

当面の活動の焦点が秋の寮祭だった。深津さんは一座を結成して（何という一座だったか、それが「恵迪座」だったか!?）「金色夜叉」の公演を目指し、僕は僕で記念講演会を成功させようと講演者選びに躍起になっていた。学内は物理の堀淳一教授と医学部公衆衛生の渡辺先生に内定し、演題はそれぞれ「地図から見た北海道」、渡辺先生は、題は忘れたが、白ロウ病をはじめとする労務災害についてのお話をしていただくことになった。

学外の講演者は、まず、当時十勝の池田町の丸谷町長を考えていた。あの北海道

ならではのユニークな町づくりにかける情熱は、きっと寮生を刺激してくれるだろう、と考えたからだった。

そんな時、寮務事務室でふと手にした新聞に、僕の興味をそそる手記が載っていた。（たしか、「毎日新聞」だったと思う）それは、池田町のすぐ隣りの士幌という町に東京から早稲田大学の助教授の椅子を捨てて町づくりのスタッフとしてやって来た人が、十勝に半年（だったと思う）住んでみて感じたことを東京の知人に宛てて書いた書簡体の手記だった。それが結城さんだった。肩書きは、士幌町立幼稚園長だった。

僕らは「善は急げ」とばかりに徹夜で前期のレポートを仕上げ、それを教養部に出したその足で、道東へ講演者依頼の旅へ出発した。9月の末、寮祭の3週間前だった。メンバーは「5時起き」の4人と教養の同級生1人（松木博、現在、文学部国文助手）だった。初めて見る北海道の秋、初めて見る道東。山ブドウの葉の鮮やかな狩勝峠の風景は、僕らに北海道の新しい顔を見せた。

池田に着くと、生憎、丸谷町長はちょうど渡米中で不在だった。これは先幸が悪い、と一寸落胆しかけたが、次の日2両編成の汽車で訪れた士幌では、十勝晴れと園児たちの黄色い声の中で、結成さんは快く歓迎してくれた。そして見ず知らずの僕らに、町づくりのプランを熱っぽく語って、講演の依頼を快諾してくれたのだった。

こうして10月20日、窓の外もとっぷりと暮れた寮の大食堂で、第68回恵迪寮祭記念講演会が催された。講演者は結城清吾氏、演題は「21世紀の日本と北海道」だった。（その時の講演はテープで現存している。）

講演後、開識社の面々と結城さんは札幌会館でラーメンを啜りながら互いの夢と不満を語り合った。そして、その共鳴はそれだけでは終りにならなかった。

結城さんよりの手紙

前略、札幌北大へ行った時にはごやっかいになりました。お元気ですか！　さて、この間北大をお訪ねした際、話が出たように恵迪寮生の自主講座と、私が考える自由大学をドッキングしたいと考えますがどうですか。寮生の諸君たちが士幌へ来、冬季の間でしたら、2～3日士幌の農家の青年たちと交流するため農家にとまり、士幌の農業技術研修所に2～3日とまって、お互いの交流を深めるような企画はどうですか。例えば冬季、寮生諸君の都合もあり、入学試験期の2月下旬頃士幌へきてと考えるのですが。

農業技術研修所の宿泊費はこちらでもちます。食費としての実費をいただきます。私としては、学生諸君は農業・農村の青年と接し、こちらの青年たちも大きな刺激をうけ、お互いにプラスできるのではないかと思いますが、いかが

ですか。若し実行するとしたなら打合わせをしなければなりませんので、お手紙を下さい。私としては、農閑期の冬季にやりたいと存じますので、恵迪寮学生諸君の都合をお聞きしたいと存じます。

(1)日時、(2)人数、(3)テーマおよび運営についてなど、意見を交換しなければならぬと存じます。

具体的に一例として書けば、

2月下旬　1日目　農業技術研修所宿泊
　　2日目　農家へ宿泊（農村青年の家）
　　3日目　農家へ宿泊（農村青年の家）
　　4日目　テーマ　北海道の農業を考える（技術研修所宿泊）
　　5日目　テーマ　今後の北海道はいかにあるべきか

テーマは便宜上、書いたまでですが、寮生の方と相談によって講師の問題、またもし士幌へ寮生がこられるようでしたら人数の問題など話し合わなければならぬと存じます。

私の都合で、1月には相談のため札幌へ出向いてもよいと思っています。寮生諸君のご一考を願いたいと思います。寒さに向う折柄、皆様のご健康を祈ります。はなはだ勝手な小生の願いですが、可能性があるものでしたら、是非実現させたく思います。私も役場を始め各種便宜をはからうよう努力したく思います。お返事いただければ幸いです。

鹿田様

結　城

こうして「自由大学」が開講された。その様子を結城さんが新聞に書いた感想からひろってみよう。

『ヤチ坊主』より

昨年私は、北大恵迪寮祭に、寮生から講演に招かれた。話しが終わったあと、寮生の諸君たちと、語らった。寮生たちは、口ぐちに云った。

「先生と同じに、僕達も、北海道にあこがれてきたけれど、札幌はつまらないですよ」

「札幌はリトル東京だから当然だろうね。北海道を知りたかったら、十勝にくるんだね」

私は、そう答えた。恵迪寮の諸君たちは、北大開学百年を記念して、クラーク以来の伝統のある「開識社」を復活せしめたいという願いをもっていた。私にしてみれば、求め合う者が集い、ともに学ぶ「自由大学」開設の願望をもっていたことか

ら、両者の共催で、農業青年と学生諸君との交流を主とした「士幌自由大学」の開設を提案した。この提案が実を結び、3月1日より5日まで〝北海道の将来〟をテーマに、農業青年と北大生との交流がおこなわれた。

学生は、それぞれ農業青年の家に3日間とまり、ともに語らい、労働の汗を流した。そのあと研修所にともに集まり2日間「北海道の将来」に関する意見交換が始まった。農業経営、離農、過疎、北方精神や北方文化、町づくりの問題など、多面的な話題が提出された。帯広から青年をはげますために木呂子敏彦先生、畜大の田島重雄先生もご参加くださり、私たちの地域政策研究会のメンバーも加わって、真剣な、しかし楽しい討議が続けられた。

労働に汗して、青年たちがともに語りあう機会をもつことは、必ず大きな意義をもつにちがいない。それぞれちがった立場にある青年たちがお互いに胸を開き、自分たちの将来をいかに築くかを論議しあうことは、素晴らしいことだ。その交流の

士幌町自由大学開催日程表

月日(曜)	(時間)	午前	(時間)	午後	備考
3月1日(月)	7：30 10：00 11：00 12：00	北大恵迪寮学生士幌駅到着 士幌町の概況説明 農業青年と面接 昼食会	13：00	農業青年宅(農家)へ	農家宿泊
3月2日(火)		農業手伝い		農家で家族と交流	同上
3月3日(水)	9：30 10：00 ～ 12：00	町農業技術研修所へ集合 士幌自由大学開催 「北海道の将来」をテーマとし提言　提言者(4名) 北大・恵迪寮学生(2名) 町・農業青年・勤労青年	13：30 ～ 16：00 16：30	昼食 自由大学開催 デスカッション 交流会 (屋外でバーベキュー)	研修所宿泊
3月4日(木)	10：00 ～ 12：00	自由大学　デスカッション 昼食	13：30 ～ 16：00	自由大学まとめ	同上
3月5日(金)		北大学生帰町			

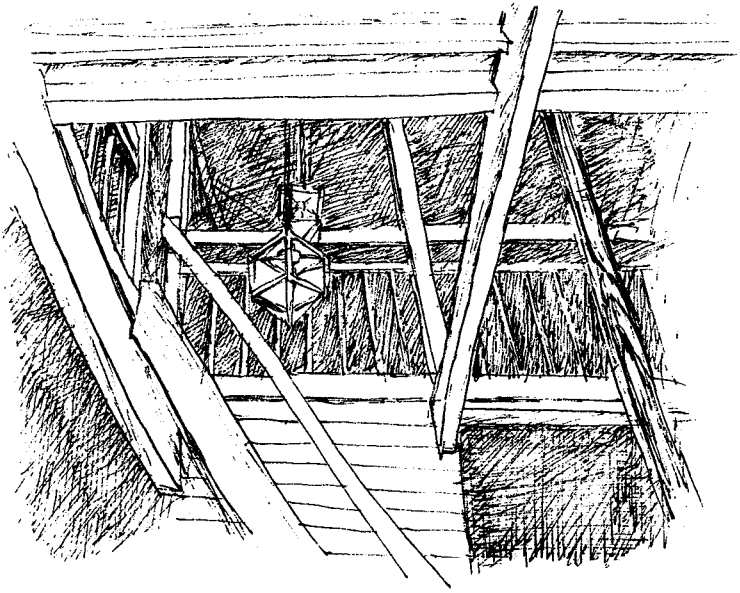
研修所食事時時刻

朝食～8：00、昼食～12：00、夕食18：00

中から〝何か〟が生まれて欲しい。私はわずか2日間の、しかも、大都会ではなく大自然の中での青年たちとの合宿を通じて、その論議を聞き〝これこそ本当の大学なんだ〟と充実した気持ちを味わった。施設はなくとも、学ぶ精神があるところ、そこに大学がある。(士幌保育園長)

この自由大学では、様々な資料やシビアな討議や面白いエピソードがあるのだが、ここでは割愛して、ただ、その場で「これからもこんな交流を続けられたら素晴しい。だが、いつも農家に分宿したり研修所に宿泊するのでは大変だからなにか、恵迪寮の宿泊所(ベースキャンプ)のような所が出来たらいいね。」という話が、半ば冗談まじりで交わされた事実を記すだけにしよう。今考えれば、それが「芽」だったのだ。

(鹿田　幸年)



2. 小屋の概要が決まるまで

◎つぶやき

小屋ができてから、冬の間に二、三度行ったことがある。新田牧場の、除雪の終わる所で車を降り、ツボ足か山スキーで1キロかそこらの道をエンヤコラと歩き始める。空が冷たく澄み切ったブルーで、ヌプカウシの稜線がくっきり見える日でも，大雪おろしの風は強くてひざから下は雪の粉で心もとなく白くかすみ，茶色く丸まったカシワの葉が生きもののように足もとを駆け抜けてゆく。赤い屋根がじき、林の中に見えてくる。小屋に着いて雪を払い、二、三度足踏みをして上がりこむ。ストーブのスイッチを入れ、油の燃え出す音を聞きながら、ぐるりと見回して、フム、またモノが増えたかーなどとつぶやく。

夏に行く時は車で小屋の前まで乗りつけてしまう。「イヤイヤ、便利になったもんだ」などと照れかくしにつぶやきながら。こんなはずではなかったと思う。町から20キロ、町営バスの終点からも1時間は歩いてやって来るはずではなかったか。小屋を建てた時のいきさつだとか、思い出などは自分に都合のいいことしか覚えちゃいない。確かなのは赤い屋根が今もそこにあるということだけ。

◎手づくり

「小屋を建てるべ」というのはいつのことだったか。酒の席だったのは間違いない。1976年の初春、自由大学と称して恵迪寮生＋αが士幌に行き、3日ほど1人ずつ農家に泊まり込んだあと、再び研修センターに集まった時のあたりだろう。結城清吾先生も交じえた酒飲み話で「いつもお客さんじゃ面白くない。ワシらの根城を作るべし」と町内のどこかに丸太小屋が掘建小屋をこさえることになった。ワシらが士幌という町、十勝という土地にちーとでもささりこむための基地だったわけだ。

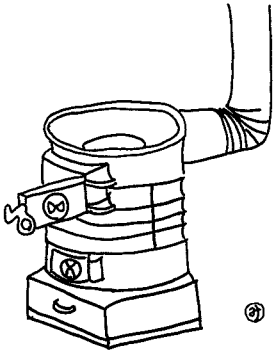
小屋のイメージというと実は2つばかりお手本があった。1つは支笏寮。その2～3年後にとり壊された支笏湖畔の北大の合宿所みたいな建物だ。口うるさいじさま，ばさま夫婦がいて、民家をちょっと大きくしたくらいのもの。屋根とタタミとフトンとそれにタキギを燃やすカマドのあるうす暗い台所があった。夕暮れて湖に散歩に出れば、寮歌「湖に星の散るなり」そのもの。ここでは合宿といってもカタいものではなく、サークルなどがたまには場所を変えて一緒に寝起きして話をしてみよう ―― なんてところ。レジャー目的の方が多かったが、中には寮史編纂みたいに資料を持ちこんだマジメなのもあった。コゲメシを食いながらの議論は、何となく集中力が発揮できて、ミのある話になった。

もう1つのお手本は恵迪とは全く関係ないが、私が山関係の友人とよく行った小樽・朝里峠近い左股沢小屋。払い下げの古電柱をかつぎ上げ、古材、古ト

タンで改築をした。長い釘の打ち方なんかもここで教わった。小屋の使い方に関して支笏寮、作り方については左股沢小屋がイメージのもとにあった。

◎場所選び

士幌小屋構想はまず手づくりの自分たち専用の別荘みたいな話から始まった。場所は3つほど候補があった。Ⓐは士幌町の東はじ、本別町との境の下居辺の森の中。Ⓑは市街から西へ音更川を渡ってすぐ北、共益の畑の中の小さな林。これは地主さんが貸してやると言ってくれた。Ⓒは現在地。新田牧場の上手。この中でⒷは私有地で話は簡単だったが長期的には土地確保に不安がある、それに市街地に近すぎるとしてボツ。Ⓐ、Ⓒは市街との距離はほぼ同じだが、高原でながめがよく明るい、大雪国立公園にも近い――などでⒸに決まった。もちろん、町が考えていた士幌高原開発構想の一環――つまり最初から場所は決まっていたという見方もできる。いずれにせよ、北海道のまん中で大雪と十勝の接点、草地と二次林、天然林と豊富な自然など環境的、地理的に恵まれている場所だ。



◎方向転換

場所は決まった。子供が新しく手に入れたおもちゃをなで回すように、オレたちは76年の初夏から秋、ヒッチハイクやキセルで、時にはマイカー学生を口説いて「予定地」に足しげく通った。ハンモックをつる木はこれ、バーベキューはそこで、水はあそこから引いて――と言っているうちに、各メンバーが小屋に持つイメージがかけ離れているのが明らかになり出した。ベッドと研究室のあるセミナーハウス風から、別荘風、純山小屋派まで。でき上がるのはただ一つ、半パな妥協は意味がないから、頑固者ぞろいの議論は果てしなかった。結論は、先の支笏寮的な使い道の広い根拠地を作ろうとなった。スペース有効利用のため、だだっ広い空間を基本に、ある程度生活の利便をはかる。山小屋風質実剛健を生かし、旅行の通過点となる。「旅の宿」ではなく、あくまで十勝の風土に近づくベースキャンプにという考えで。

冬眠中のシマリス

小屋構造の基本線は固まり、76年10月に設立準備委は発足したが、ここで基本構想そのもの、つまりどれくらいの規模で、どの範囲の人間が利用するか――

が大転換をとげる。早い話が「寮生が自分たちの金で建てる」から「ＯＢカンパや公の資金を入れてちゃんとしたものを建てる」への変更だ。その要因は学生内部というより、農協所有の土地を町が一旦借りてそれを学生にまた貸しするという状況にあった。農協や町のからむ土地を全く私的な学生グループには貸しにくいというわけだ。設立委そのものが単なる恵迪寮の内部機関から、ある程度社会的に通用するものになる必要があり、それが小屋構想自体をもふくらませることになった。利用者は「寮生プラス地元」から「北大生、北大ＯＢプラス趣旨賛同者プラス地元」に広がり、廃校の古材を自分らで組みたてる計画が、予算500万円、20坪余りの広さのチセフレップの原型ができた。

「ワシラの小屋を作るべ」当時のメンバーにすれば意外な展開であり、そうした施設が広く利用されるのは好ましいにせよ、「なぜオレたちが人のためのものを作るのか」という議論は当然あった。ただあくまで「オレたちの」にこだわれば計画を白紙にするしかなく、大金ながら資金的には一応のメドが立ち、地元ＯＢや町当局から当初から受けた厚情、何より寮運営にさえ管理が強まる状況の中で自主運営のできる場を確保したい――などの点から、76年の暮れ、現在みるような小屋の基本設計に着手した。

個人的感想をつけ加えれば、私たち70年安保のシッポを引きずったような「こだわり世代」を，必要なものはどんどんとり込んでゆく「しなやか世代」が乗り越え、その敬服すべきエネルギーの結晶がチセ・フレップではないかと思う。

◎議論百出

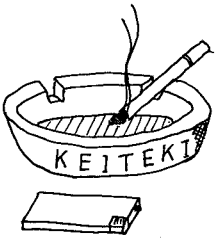
さて、基本設計に入ってからも、面倒くさいながら楽しい議論が続いた。内装設備が主な論点で、ストーブはマキか石炭、煮たきはその上、明りはランプという〝原始派〟と合宿所的性格を考えれば、ある程度の文化設備は必要という〝近代派〟。結局のところ、夜でも調べものくらいはできるように明りを二階に重点的につける――ということで電気のある暮らしとなり、ストーブは安全性や燃料補給を考えて灯油ポット式。台所はガスと流しを備える一方で、屋外炊事場をつける（これは実現していない）。水は上流に放牧地があるため生水を避け何と上水道。トイレはくみとり不要の水洗。ベッドや机などかさばるものはなし――などなど。この上、テレビや電話、冷蔵庫などどこまでモノが必要なのか、その時代によるのだろうが、コンセントの数にまで議論が及んだということがわかってもらえればそれでいい。

小屋を使う人に関してはタテ糸とヨコ糸という考え方をしていた。ヨコ糸とは同時点の平面的な広がりのことで、同じ日に小屋に来た者は初対面でも一期一会のチギリを結び、周囲の自然ともまた契ること。そして学生なら十勝、士幌の風景だけでなく人びとの暮らしに目を向け、地元の人間ならわざわざ小屋を建ててまでやって来る学生の言い分を聞いてみる――など。タテ糸とは時間や

世代をつなぐ核に小屋の役割を期待したもので、小屋に来たすべての人間が同じ場所でそれぞれ充実した時を過ごしたという共通体験を持ちうること、また恵迪廃寮後も小屋活動を通じて恵迪的なる精神文化の足場となること―など。何とまあ大それたことを考えていたものよ。

◎つけたり

ともあれ、チセ・フレップが完成して5年目。OB連も口だけ出して手は出さぬ社会人が増えた。誤算と言えば、学生諸君にマイカーが大普及をして、車を使えば小屋はあまりに近く、国鉄運賃の高騰にあって貧乏学生にとっては小屋は余りに遠くなったことだろうか。町の士幌高原開発構想がどうかなり、小屋の前を通る道々がナキウサギのすみかを越えて然別につながって一大観光ルートになる可能性もある。しかしチセ・フレップは確かにそこにある。この種を芽ぶかせ、根を張らせるにはまだまだやれることはあるはずだ。小屋のお守りは年寄りでもできる。次に来る者への一つまみの思いやりを残して、好きなだけ暴れておくれ。



（山本　　牧）

3. 一次趣意書

～教官回り～一年延期

1976年4月、停滞と、それに対するアンチテーゼが生まれ、そして育ちつつある中で、我々は入学、そして入寮した。

当時の情況を詳しく述べる事はここではその必要もなく、また発端の項においてある程度は触れてあるので省略する。

ただ、我々76年入学組の委員にとっては、寮の沈滞に対する不満、そしてそれに対する一つの消極的な対極としての「士幌小屋」は、確かに大きな希望であったように思う。もちろん、小屋自体の建設、そのことへの純粋な興味の方が、我々にとっては、はるかに大きかったのは事実であるが。

76年秋、数々の可能性を内在し、且つ分裂という過程を経て、我々は、恵迪寮において、一部屋サークル「士幌小屋設立委員会」として活動を具体化する。

新寮（恵迪寮において北端に存在する棟であり、1983年に発足する公営アパートとは何ら無関係である）51号を拠点とし、趣意書なるものを創造（つく）りつつあった。

これが後に言うところの「第一次趣意書」であり、我々の当時の姿をそのまま象徴していた。

「理念」―― 今は二文字で表現される、それが確立され、そしてそれ以外何も確立されなかったのである。

但し、理念なるものについて若干述べておくならば、それは、たとえ急場凌ぎに創造ったものではあれ、我々の当時の理想を、そして今もって失うことのないように祈ってさえいる野心を、完全に包含したものであった。

趣意書に言う、「地に足のついた生き方と学問のあり方」、これを、クラーク先生の言われた「野心」、また「ロフティ＝アンビション」に置き換え、そしてその真の理想を追うべく、誰しもがそう願っていた。

我々は、自らのワゴンを、自らの星へ近づけようとしていた。

「理念」の確立、そしてそれより発生した楽観主義は、その後我々を極めて苦しい立場へと導びいた。

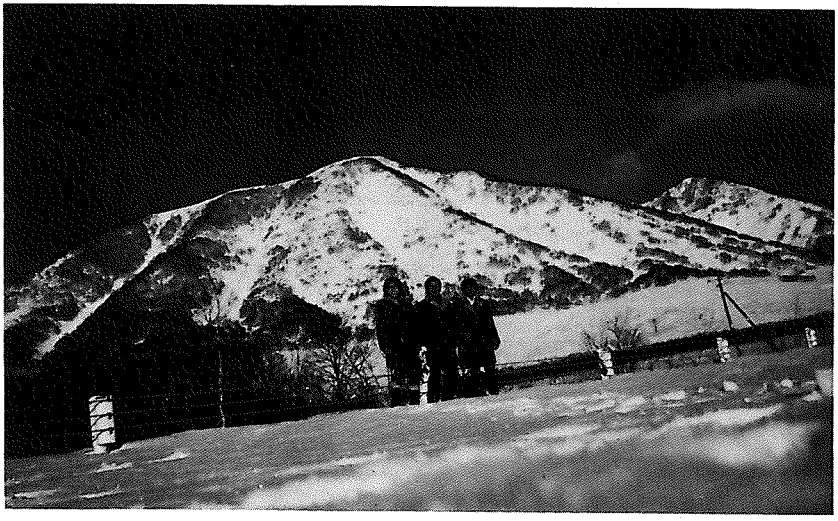
しかし我々は、全てが、理念の正しさによって乗り切れると考え、摩擦は何時か解消されると信じていた。

そして、現実は我々の思わぬ方向へと進んでいく。

「北海道大学」当局より、「非協力」の通告を受けていた。
当然我々は、理念のみを掲げて突っ走ることで納得する。
77年3月10日の会議に於いて、6月発注、9～11月工期を確認している。

77年2月26日、受難の運命を背負った第一次趣意書は生まれた。そして一部はOBのもとへと発送されていった。

同年3月31日、旧委員会を送り出し、そして今後の活動の主体となるであろう新委員の入学を心待ちにしている頃、我々がある程度予想し、且つわい小化して考えていた、対「北海道大学」当局との関係が、表面立って悪化する。
「北海道大学」当局は、以下の如くに宣告する、曰く、名目的、金銭的に一切力を貸さぬと、曰く、北海道大学恵迪寮士幌小屋設立委員会、それ自体認められぬと、曰く、「北海道大学」当局が関与せぬ以上、北海道大学、更には恵迪寮の名すら使用出来ぬと ―― 我々の恵迪寮の名前すらも。
一公共機関が、その責任の範囲内で色々な行事に関与していくことは、或いは難かしい事であるかも知れない。
我々は、その無表情とも言える対応に、一時愕然とせざるを得なかった。
しかし、ただ黙って従う訳もない。
我々は、恵迪寮の名はいかなる事があっても使うことを確認し、寄付集めを敢行することを確認し、「北海道大学」の名には拘わらないことを確認している。
そして、しかし我々は、この長く、煙草の紫煙の澱んだ連日の会議の中で、次第



に沈滞して行った。

この頃の楽しみと言えば、そしてそれにより沈滞を自己の中で処理できる唯一の手段は、現地 —— 士幌高原へ行く事であったような気がする。

純白の雪とコバルトブルーの空、黒々とした岩のコントラスト、遙かに輝く日高の山々、眼下に広がる、太平洋まで一気に続く十勝平野、何よりの励ましは、この士幌高原の姿ではなかっただろうか。

4月18日、77年入寮組としては初めての委員、大堀尚己君が、混乱の中加わった。

5月6日午後4時、我々にとって大きな転機がやって来た。

当時学生部長であられた工学部教授菅原照雄氏等と会談する。

そもそもこの会議に対し、我等の言うことに若干の反論と、自らの主張を展開すれば、決裂という形に落ちつこうとも問題の具体化は回避できると考えていた。

まして、建設の延期などは……。

会議は静かに進み、しかし時間の経過とともに優劣ははっきりとした。

我々は一方的に質問を受け、返答すら満足に出来ず、まして反論などは不可能であった。それは、まさに大人と子供の会談であった。

「北海道大学」当局は、会談の「結論」として、我々に以下の事を、強制とも受けとれる態度で要求し通告する。

一切、恵迪寮の名を使ってはならない。
一切、公認しない。助言のみ行なう。
恵迪寮を、全て恵迪寮生と直すよう。
母体をはっきりさせるよう。
全て文章でとり決めるよう。
寄付に関し管理をはっきりするよう。
資金不足の場合、着工しないよう。
法律的に解決するように。

そして、一年遅れる覚悟で、基礎作りをするようにと。

思えばこれらの内容は全て、嘗て我々自身の会議に議題としてのぼった事のあるものばかりであった。そして、我々にはわからぬと切り棄てたものばかりであった。

当然の結果として、我々は何ら答えられなかった。

「北海道大学」当局は、この時期、大滝研修センターを建設すべく、多くの問題に対処しており、それと比べ、我々の計画が余りに拙く思えただろうし、また我々と、一地方自治体である士幌町との関係に、深入りを嫌ったのも事実であろう。

為に、公的には最後まで無関係であり続ける結果となった。

ただし、条件が整うならば、それはこの会議で問題となった事項がすべて解決されたならば、という意味で、個人的に、学長、学生部長が寄付してくださる、という約束をいただく。

無残な敗北に終るこの会談の、我々にとってはせめてもの救いであったかも知れない。

同日夜、重苦しい空気につつまれ、会議がもたれた。

我々の、我々自身への追及が行なわれた。

当然答えられるべき質問に対し、何ら満足に返答出来なかった我々への、当然解決しておかなければならない事項を、知りつつそのまま投げ出した我々への追及であった。

我々は一年延期を決定する。

基礎を固め、多くの問題を解決し、我々自身を立て直して行くために、そして少なくとも他から質問された際、十分答え得るまでに組織を高めようと。

それが、趣意に賛同していただき、御寄付していただいた方々への、我々の当然の義務であると。

我々にとって、本来口を挟むべき立場にないであろう。「北海道大学」当局よりのこのような要求は、当時の我々にとって屈辱以外の何ものでもなかっただろう。

しかしこの会談によって、我々は自らの欠陥、自らの無知、自らの無責任、自らの甘さを知る。

そして、この自らの弱さに根ざす重圧感より解放され、心のどこかにある種の安堵感を覚えたのも事実であった。

出来るかどうかわからぬ中で、自信すらなく活動していた我々は、一年という時間を与えられたのである。

我々は、何かしらの余裕を得る事が出来た。

5月16日、新らたな活動に向けて再出発する。

新しい趣意書を文章化する仕事が始った。

委員14名であった。

4. 二次趣意書

～カンパ集め～

1年延期決定という情況は、幸い、我々を良い方向へと導いてくれたような気がする。これ以後山積みされた問題は一つ一つ解決されてゆく。

寄付金の建設費のみへの使用、小屋管理についての体系化、実際の工事についての詳細、小屋の所有権をはじめとする法的問題などなど。

そして、我々はこうした問題解決の中で、次々と新らたな問題に直面していった。

恵迪寮への廃寮攻撃と、万一廃寮された場合の小屋運営の母体はいかにすべきか。

趣意書の理念は、どういう形で残せばよいのだろうか。

小屋運営が事務的活動に終りはしないだろうか。

そして、小屋が完成したら何を一番最初にやってやろうか。

委員会内部での討議と決定、士幌町とその他関係者との意見調整のうちに、77年の短い夏は終る。

札幌にも秋の気配が感じられるようになった9月中旬、新しい趣意書の構想が出来上がった。

9月、第二次趣意書が完成する。

第一次趣意書完成から半年、やっと『本物』が姿を現わした。

何度読んでも、素晴らしい趣意書であった。

11月2日、それまでも何度か通った学生部への道、この日は、ただ少しばかり違っていた。つまりは、菅原氏より御寄付をいただく日である。

我々は、少なくとも御寄付いただくのであるから、趣意に賛同されたと考えた。

たとえ、公的に認められなくとも、学長も、学生部長も、個人的に趣意に御賛同くださったと考える。

それで十分であった。

最早や、我々の行動は、止めようにも、誰も止める事は出来なかったのである。

恐らく、資金が不足しても、初期の目的通り、掘っ建て小屋を建設(たて)たであろう。

我々は小屋の形式や、規模などよりも、その理念、そしてこの趣意に賛同していただくことにこそ、活動の目標を再確認していた。

とは言っても、やはり設計図通りの立派なものを望むのは当然であろう。

11月29日、我々は学長、学生部長の御芳名が最初に書かれた『奉加帳』を手に、再び学内回りへと出発した。

学内回りについては、詳しく述べるとこれだけで一冊の本が出来るのではないかと思う程多くのエピソードが残されている。
外人講師の研究室の前で、どうしてもノックできない事もあった。
我々で作成した学内地図を頼りに、学部へ行き、道に迷うこともあった。
寄付はさて置き、と長話しに夢中になり、結局は一人の先生を回ったのみ、などということもある。
しかし、どの先生方も熱心に話を聞いてくださり、御助言をいただき、また直接小屋とは関係のない話の中から有意義な、興味深い事を知り、我々にとって実に充実した生活であった、今となればそう感ぜられる。
あらゆる面で、貴重な体験であった。

学内回りと平行し、ＯＢへの趣意書発送も再開された。
振り込み用紙が着くたびに、そしてその裏の通信欄に書かれた激励文を読む度に、本当に有難い事であると思った。
御寄付をいただいた方々は全てカードに記入し、案内書の発送等に備えた。
また御礼状発送の準備も急がれた。

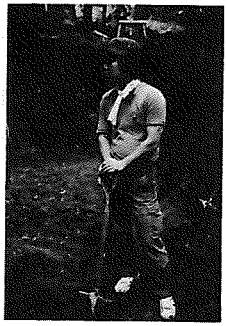
この頃、久しぶりのヌプカウシヌプリ（我々、委員会の会誌）も発行される。
全てが軌道に乗りつつあった。
決して問題がなかった訳ではない。
しかし確実に現実へと近づきつつあるという実感が、何にもまして我々を支えてくれた。
小屋は、来年こそ建設出来るのだと。

設立趣意

現在、都市と大学の巨大化の中で学生の無力化や学問の空洞化が進みつつありますが、私たちはこのような学生生活をもう一度見直して、視座を十勝という北海道本来の風土を持つ地に移し、札幌農学校以来の伝統である地に足のついて生き方と学問のあり方を模索する場を主体的に創造してゆこうと思います。そしてこの施設が広く有効に使われることによって、士幌、十勝、ひいては北海道全体の糧になることを切望するものです。

78年1月27日、「北海道大学」当局、士幌町、寮生による三者会談がもたれる。結論的に言えば、これまでの各々の立場を確認し合っただけであった。

しかし、各々が各々の立場で走るのを、他はどうすることも出来ないという事も、共に確認される。



78年、小屋建設の年、必要事項は全てにわたって再認識され、資金のメドも着いた。

細かな点も詰められていく。

第二次趣意書完成、学内回りと続いた我々の活動は、今回は裏付けのある自信を我々に与えてくれた。

5月9日、我々は次のような予定を立てる。

5月～6月上旬　設計図確定、見積り

6月中～下旬　　運営草案、契約草案

7月上～下旬　　各草案作り、工事について詰める。

7月下旬～8月上旬　工事の契約、着工

北海道大学恵迪寮士幌小屋設立委員会、顧問2名、学内OB 10名、委員13名。

趣意書発送2,425通であった。

第一次、そして第二次趣意書についての項を終るにあたり、もう一度当時の設立趣意を見る時、我々の活動は本当に、札幌農学校以来の伝統である、地に足のついて生き方と学問のあり方を模索してきただろうか、という、我々の最初のそして終生消えることのない疑問にぶつかる。

答えを出すことは未だ不可能である。

否、この活動の中で、計画し、行動し、破綻し、再び足元を固め、そしてまた行動してゆく、その中で、我々はやっと趣意書の意味を理解しかけたのかもしれない。

地に足のついた生き方、それは決して順調に全てを旨く完成させる、その事ではなく、何度も何度も試行錯誤をくりかえし、その中で、自らを取り巻く実に多くの人の和、英知、勇気、反省、それらをもって、一歩一歩事を進めて行くことではあるまいか。

我々は趣意を創造り、そして賛同し、護り、育てようとした。その過程の中で、初めて趣意が自らのものとなったような気がする。

「五月空の急降下爆撃機」
オオジシギ

士幌小屋というものの設立、その中でたった一つの趣意書を創造る事が、しかしこれこそは真の趣意の理念を持ち合わせねば、とうてい成し立たない事であると、今こうして再確認している。

人は歴史を創造り、そしてその歴史は、後世の人々により評価を受ける運命をもつ。

我々の創造った歴史、理念、趣意、そしてそれらに関与した我々自身こそは、はたしてどのような評価を受けるのであろうか。

（矢野　洋明・芹沢　利文）

5.　小屋設立の現実化に向けて

～起工式前夜まで～

1．寄付集めの再開

フキノトウ

52年11月、新しい設立趣意書が刷り上がってきた。大学や町との関係を整理し、完成後の管理運営の方法を明らかにしたほか、前の趣意書では「資金が不足した場合は計画繰り延べがありうる」と書かれていた所を「計画縮少もありうる」と直してある。すでに当初予定した工期を一年延期してしまった。何がなんでも来年中にやりとげなければ……。私達は決意を新たに動き始めた。

寮史編纂委員会の資料や各学部の同窓会名簿から作成したＯＢ名簿はカードに整理して約1万名に達していた。暇さえあれば封筒のあて名書きをすることが私達の日課になった。毎日ノルマと称して20枚、30枚のあて名書き、夢に描いた小屋建設の仕事とはずいぶんなちがい、それでも寮内のあちらこちらから多くの人が手伝いに来てくれ、Ｓ下Ｓは社交場のような雰囲気すらあった。11月22日に862通の趣意書を発送、以後翌年3月までに合計7千通を発送した。多いときにはみかん箱に4、5箱もぎっしりとつまった封筒を、雪道をリヤカーを引いて郵便局まで運んだのである。

封筒には郵便振込み用紙を同封した。12月12日の会議では、11月22日発送の862名のＯＢのうち、50名から30万の寄付があったと記録されている。全活動期間

を通してＯＢからの寄付は、100 通発送して寄付してくれるのは 10 人弱といったペースだったように思う。北大のＯＢなのに協力してくれる人が意外に少ないと見るか、何やらわけのわからない学生のくわだてによく寄付してくれるものだと見るか、感じ方は様々で新聞の取材でもさまざまに書かれたが、私達はむしろ非情にも思える程「これくらいの額でこの率なら、目標金額まであと何通出せばいいか」などと計算していたものである。

しかし振込用紙の通信欄に書かれた先輩からのメッセージは私達にとって大きなはげましだった。そしてまた、先輩たちがどれほど恵迪寮を愛し、在寮の思い出を大切にしているか、ということを知って深く感動した。そのいくつかを紹介してみたい。

・設立趣意書を拝見しました。地元十勝に住んでいる人間として非常な共鳴を覚えました。（帯広市在住）

・美しい大自然の中に立派な山小屋を建て、「コハクの酒をくみ交わしアイヌの昔しのぶ」よすがともなればかしと祈る。
（東京都在住、元寮生）

・士幌小屋設立委員会趣意書拝見しました。住昔を想い寮生活時代を懐しんでいます。寮の発展と寮生諸君の御活躍を祈ります。（岐阜県在住、寮移転当時在寮）

・小屋設立寄付を貧者の一燈まで表記の通り送金いたします。（大阪府在住）

・小額で申し訳けないが寄付いたします。小生には仲々そちらへゆかせてもらう折りがありませんが、ガンバッて下さい。
（京都市在住）

・有効にお使い下さい。子供ともども山小屋の完成を楽しみにしております。
（函館市在住）

・恵迪寮、開識社、なつかしい若い時を思い出す。帯広に 13 年勤めていたので士幌の地もなつかしい。貴君らの働きの上に神の祝福をいのる。多数の賛同者を得て、是非予定通りのものが出来ることを望みたい。
（静岡県在住）

先輩にとっては、恵迪寮からの便りなど何年ぶり、何十年ぶりだったのかもしれない。一面識もないＯＢと私達とを、時を越えて確かに結ぶ恵迪寮という存在に、改めてすばらしさを感じたのである。

さて、郵送によるＯＢへのお願いと併行して、学内教官の研究室を訪問し、寄付

と助言をお願いすることを行なった。学内回りという。こちらは教官に直接会って寄付をお願いしなければならないので大変である。そこで私達は「学内回りのための理論武装」と称して、口上の内容を検討する会議を開いた。みんな少なからず不安だったのである。一年前、一部で学内回りを行なったときの経験者である芹沢君や内田君の話を聞きながら、それぞれ自分なりのシナリオを組み立てていった。しかし、実際には予想もしていなかったような質問をされて、しどろもどろになるなどというのはしょっちゅうであった。

学内回りはたいてい2人1組で行なった。授業のあき時間を利用して、必修2単位、選択無制限など1週間の時間割が組まれている。休講の時などもフルに利用した。さて、時間になると七ツ道具（趣意書、カンパ袋、奉加帳、記録帳など）をとり揃え、そそくさと出陣する。標的は学部ごとに各階をしらみつぶし。教官室の前へ行くと、ドアにはたいてい行先を示す丸い表示器がついている。「不在」とか「講義中」とか「出張」と表示されていれば、未訪問である旨ノートに記入して次へ回る。このときはすこしホッとする。次の部屋へ行くと「在室」とある。深呼吸をしてからおもむろにノックをして部屋の中へ……。私達は沢山の教官室を見てきたが、色々個性があっておもしろい。専門書、外国文献がズラッとならべてあったり、中に趣味の本がまじっていたり。ほとんどの部屋はドアの所についたてが立っている事も知った。

さて趣意書を差し出して「少しお話を聞いてもらいたいのですが……」と切り出すと反応は様々である。「私は寄付、署名の類は一切しない主義」とまっこうから相手にされないもの、詳しい話をしないうちに「寄付!?　いくらだ、3千円!?　ホレッ」てな調子でお金だけくれて追い出されるもの、この先生はお金があまって困ってい

るのだろうか？

3人に2人くらいの割合で「まあ座れ」とイスをすすめてくれ、二言、三言質問される。「どうして小屋をつくることになったのか？」「完成後の管理運営はどうするのか？」これらの質問は私達の得意とするところである。なにしろガッチリ理論武装しているからこわいものなし。ところが落し穴はあるもの、「なんのためにつくるのか？」これにはまいってしまった。つまり「研修施設として使うなら、あれだけ多くある北大の小屋を使えばいいじゃないか。私的別荘的に建てるのならもちろん賛同はできない。士幌の景観がよいので建てるのなら、小屋がいくらあっても足りない。」というわけである。考えてみると私達は「小屋を建てるのは当然のこと」という前提に立って活動してきた。「何のため」ということはあまり考えなかった、設立趣意は名文だが具体的には何も答えていない。私達はしどろもどろになりながらも、自分たちがこの小屋にどんな夢を持っているか語ったが、あまり感心する答にはならなかったようだ。それでも寄付をしてくれた先生は理屈より情熱を感じてくれたのだろう。私達は情熱だけはあり余っていたから……。このやりとりは結果的には多分にナニワ節的であった。しかしこの問題提起は私達にとってショックであっただけに、真剣な討論を呼び起こした。十勝地方研究会とか自由大学という構想が生まれるひとつのきっかけであった。

もちろん手放しで賛成してくれる先生もたくさんいた。中には小屋周辺の環境について興味を持ち、学生を連れてぜひ行ってみたいという先生や小屋の管理運営や設計について細部まで相談にのってくれる先生もいて、こんなときは私達も口がほぐれて楽しい教官回りとなった。薬学部の大賀先生からは、北大山岳部ＯＢなどの寄付で建てたという岩内の幌似山荘を紹介された。さっそく設計図や建設費、運営費の見積り、運営規約などのコピーを手に入れていただき、大いに参考となった。工学部の長谷川先生には、風力による自家発電についてアドバイスをいただいた。大村君が中心となって技術上の問題、法規上の問題などについて研究し、20万円くらいの風力発電機が売られているという情報も得た。ユニークな構想ではあったが、結局、私達の力量がともなわず、実現せずに終わったのは今もって残念である。

〝氷河の忘れ形見〟
ナキウサギ
ochotona hyperborea
yesoensis

教官回りでは小屋の話以外にもいろいろな話が出た。多かったのは恵迪寮について。農学部の女性の教官には「食費をケチッてはいけない。すこし前に食生活調査

をしたらひどいものだった。体をすぐこわしてしまう。」とまるで母親が子供に言うように叱られてしまった。新寮問題についても多くの意見があった。「水光熱費を払わないというのはおかしい」「大学が管理運営権を持つのは当然ではないか」という意見もあって、学内世論の傾向もよくつかめ、有意義であったと思う。教養化学の教官からは「時々石を投げられてガラスを割られる、もし寮生だったら注意しておいてくれ。」とシビアに言われたり、「昔寮にいたことがある。」となつかしがる先生も多かった。その他大学のこと、学生のこと、学問というものについて等々、様々な話を聞くことができた。今の北大は、特に教養部は、学生と教官が直接話し合う機会が非常に少ない。しかし本当はそういう交流こそが大学という組織の中で一番大切なことなのではないか、と私達は思った。学ぶことの多い活動であったと思う。

以上のように喜んだり、落ち込んだり、悩んだり、学んだりしながら教官回りは地道に続けられた。12月5日の会議ノートには、『本日教官にボーナスが出たので、明日大攻勢にでる。』などと、大いに我々らしい記録も見られる。

さて寄付集めの今ひとつの対象は他ならぬ恵迪寮生である。設立委員やそのOBなどからは1人数万円という金額が、また多くの寮生からも自主的なカンパが寄せられていた。数日分、ときには数週間分のバイトのかせぎである。しかし中には寄付の約束だけして、まだお金を出していないものもあった。こういうのは「予約」と呼ばれ、分割払で入金させたが、中には予約を残したまま卒寮してしまった先輩もいて、私達の活動には借金取りみたいな部分もあった。

一方、寮内の各部屋を回って小口のカンパを集める活動も時々行なわれた。恵迪寮では部屋回りがよく行なわれていた。催し物への誘いや部屋で出した雑誌の配布、あるいは寮委員会の政策宣伝などなど。中でも監査懲罰委員会の寮規違反チェックの部屋回りは、違反が見つかると食停という罰則が待っているので恐れられていたが、私達のカンパ回りも貧しい財布の紐を開けなければならないということで、それと並んで恐れられていたかもしれない。

2月18日から連日行なわれた部屋回りは資金不足にあえぐ建設計画をみんなの力で救済しようということで「救済シリーズ」と呼ばれ、前日からビラを発行したりして大がかりに行なわれた。その時のビラの1枚はこんな調子である。

『青春の夢は救済に依り現実となる弱きもの。共に歩もうと欲する者よ、一寸の温情は百の力を人達にもたらす。我らに与え給え。』

この時、10円、100円と皆から寄付された浄財は一晩で3万8千円にものぼった。

昭和53年4月末で寄付金は北大ＯＢ150万円、教官30万円、学生60万円、計240万円で、着工を3カ月後にひかえて目標の458万円に遠くおよばなかった。

2．体力の活動から頭の活動へ

5月7日、私達は夜行鈍行「からまつ」に乗って札幌を発った。約4カ月ぶりの士幌行である。今回は小屋の建設用地、工事、完成後の管理運営などについて検討するのが目的である。これまでの活動は資金集めに最重点がおかれていたが、これからは具体的な建設に関する問題にとりくむようになり、計画はいよいよ大詰めを迎えることとなった。

士幌町役場では町民企画課の浪内課長と林係長が応対してくれた。まず建設用地については以前からの合意のとおり、町が農協から借り受け、その土地を無償で提供していただくこととし、着工直前に契約を結ぶこと。借用年数は一応20年とし、小屋が利用可能であれば契約更新ができること、とした。私達に異存はない。

建設資金については町から100～150万円援助してもらえる見込みだと言う。これは資金不足に悩む私達にとって大きなはげましとなった。

また管理運営に関しては、完成後小屋の所有権を町へ委譲するのにともない、町では条例の制定が必要なこと、水光熱費等の維持管理費は町が負担すること、小屋の運営についてはあくまで学生側の主体性にまかせること、以上の内容を盛り込んで、町と士幌小屋設立委員会との間に協定を結ぶことなどが確認され、今後双方で早急に条例案と協定内容の立案を行なうこととなった。

次に私達は工事を請負ってもらうことになっている北斗産業を訪れた。専務の飯尾さんは恵迪寮のＯＢでこの計画のよき理解者である。ここでは建設関係の話をした。工期は8月から2カ月半くらい、私達が自ら工事にたずさわって、その分建設費を安くしてもらうことも検討してもらうことになった。おどろいたのは、見積り金額458万円は2年前の数字なので現在では20～30％ほど値上りしているのではないか、と言うのである。ある程度は予想していたことではあるが、一同ビビッてしまった。これは寄付の集まりいかんでは計画縮少もあり得るかもしれない。

そこで早急に小屋の構想を取りまとめ、正式の図面をひいてもらうことにした。2年前に帯広の小野建築設計事務所で作ってもらった図面はひとつのモデルであって、変更は十分可能だそうだ。

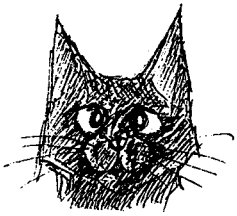
図面をひくには土地の選定が必要ということで、私たちはすぐ農協へおもむき、町と飯尾さんにも同行してもらって現地へタクシーをとばした。(タクシー代は町が出してくれたのだ。)

東ヌプカウシヌプリの山麓、士幌の平原を一望にし、晴れていれば遠く日高の山なみも見えようという士幌高原。私達はいろいろと逡巡したあげく、農協と町の同

意も得て、建設用地を牧草地と道路からそう遠くない、せせらぎの音を間近に聞き、ヌプカウシヌプリを正面にあおぐ、小じんまりした林の中に決定した。林はまだ緑づいていなかったが、私達の胸は緑につつまれた小屋を思い描き、希望にふくらむのだった。

寮に帰った私達は、鮮明になった新たな課題についてただちに検討を開始した。これまでは情熱と根性を武器にひたすら寄付集めに奔走してきた私達であったが、今後は多くの企画立案、すなわち思考活動が必要となった。週1回の定例会議は口角泡を飛ばし、あるいはいい知恵がなくて沈黙し、ひたすら長く深夜まで続くようになった。薄暗い寮の1室でイライラしっぱなし、晩メシとフロ、それに11時のスペシャルと1時のエッセン解放を気にしながらの落ちつかない会議。あまりに能率が悪いので課題ごとにプロジェクトチームをつくって、会議に出す原案を考えることにしたが、今度は会議でつまると「ではプロジェクトで検討して下さい。」とみんな回されてしまうので、チームのメンバーは大変な苦労をすることになった。

「条例プロジェクトチーム」は、大村君、多久島君らが中心となり、町の条例、町との協定、小屋の利用細則などの検討を担当した。最大の問題は小屋を町へ譲渡



するにあたって、小屋の設立趣意と運営についての学生の主体性をどのように確保するか、という点であった。町には建物の維持管理や費用負担などに責任を負ってもらうが、運営とくに利用許可権については趣意に沿う形で学生側が行ないたい、というのが私達の考えであった。ちょうど学内では新寮問題が活発に論議されていた。新寮建設にあたって、大学当局は寮運営と入寮選考に関して寮自治会の主体性を認めないという態度をとり、私達寮生は強くこれに反対していた。そんな背景があったから、私達は小屋運営についても必要以上に神経質になっていたのかもしれない。ともかく建物の管理者が利用者を管理するような正しくない形になることをさけるという点で、共通の目的意識はあった。

町も私達の考え方を基本的には理解してくれたので、新寮問題のような対立はなかった。私達は条例、協定の原案を作って再び町役場を訪れた。が、私達の原案は「条例の如きもの」いった体であったようだ。浪内さんと林さんが条例らしく書き整えた案を示してくれたが、細部で私達の気に入らない所があったり、考えていることは同じなのに文章が出来上がるまでが大変であった。

協定では小屋の管理運営は、町と学生側双方からの代表で構成される管理運営委員会が行なうこととなった。学生側というのはむろん私達のことだが、ここに「十勝地方研究会（十勝研）」という名称が登場する。これは小屋完成後、設立委員会が発展的に改組して、設立趣旨に沿って小屋を利用するサークル、と考えていた。協定の上ではこれで十分であったのだが、いざこのサークルの活動について考えてみると大変だった。やりたいことは一人ひとりバラバラ、共通点は小屋を利用するということだけ。いわば手段のみあって目的のないサークルである。十勝研はその後「自由大学」などと名前を変えたり、サークル化について深夜まで討論をくり返して、小屋完成後に問題を残すことになる。

設計プロジェクトチームは太田君らが担当した。以前にモデルとして作ってもらった三角屋根の小屋をみんな気に入っていたから、外観にはあまり問題はなかった。もめたのは風呂についてである。当初は設計に入っていたのであるが、「山小屋に風呂なんて！」と言う感情もあった。賛成派は「夏は汗をかくから、冬は寒いから、風呂は必要だ。」と主張し、反対派は「冬は汗をかかないから、夏は水浴びができるから、いらない。」と反論した。プロジェクトチームは結論が出ず、二度三度と

全体会議にかけられたが、結局無人小屋で管理上問題があるため風呂はつけない、ということで結着した。

ストーブは石炭、灯油、重油の三案が出ていた。私達はカロリーと雰囲気の点で石炭にしたかったのだが、町から管理上の問題を指摘されて灯油にすることとなった。

6月2日、帯広の小野さんの所へ行き、設計上の私達の希望を話し、なるべく安くできるように、とつけ加えて予算を概算してもらった。この時点で集合煙突、テラスなど金のかかるものを切り捨てた。さらに士幌の北斗産業を訪れ、飯尾さんと話したところで、650万円という線が出た。私達の資金はまだ300万円に満たない。飯尾さんは「町から300万くらい出させろ。」と強気だった。

町役場では一応議会には300万円で提案するという。また浪内さんは道（十勝支庁）への100万円の補助金を申請してみると言うので、これはすべてまかせて、浪内さん達の手腕に期待することにした。

さて、私達の寄付集めはどうだったか。

ＯＢあてに発送した１万通の趣意書も、もう返信が絶えていた。しかしまだ寄付してくれていない人はかなり多い。ここで私達はそういう人から３千名を選んで、なんとハガキで督促状を出すということをやってのけた。思えばずいぶん失礼なことをしたものである。受け取った方もさぞかし驚いただろうが、それでまた寄付をしてくれた人もいたのだから、ＯＢもかなり寛大なものだと感心してしまう。ともあれ前代未聞の寄付集めではあった。

学内回りについては、６月16日に再びボーナス狩り大作戦が行なわれた。

３．士幌ツアーとジンギスカン

「山小屋建設予定地を見に行こう！」というキャッチフレーズで士幌小屋設立委員会が企画した士幌ツアーが６月16日から18日に行なわれた。参加者は寮生４名、寮外生４名、そして同行の委員３名の計11名。

私達は「からまつ」で士幌に向かった。余談になるが、この「からまつ」は小樽発釧路行の全国でも数少ない寝台車付のドン行で、札幌22時20分、帯広５時30分、士幌線の始発にちょうどよく接続した。この季節は金山湖の朝焼け、狩勝峠の日の出と、車窓の景色も美しく劇的であった。

さらに余談になるが、この列車に乗る時の私達の夜食は白飯をアルミホイルで包んだだけの弁当で、白く不定形であることから「オバＱ飯」と呼ばれた。これだけではあんまりだということで、後にフリカケやらウメボシを入れたり、おかずをつけたりしたオバＱが考案され、これらは「スペシャルオバＱ」という。いずれにしろ簡素な弁当であった。

後年、「からまつ」は石勝線の開通にともなって廃止となり、それとともに「オバ

Q飯」も姿を消してしまった。

さて私達は士幌から町のスクールバスに便乗させてもらって士幌高原へ向かった。建設予定地はここから1時間ほど歩いたところ。春の遅い士幌高原にも新緑が萌して美しい。出来たばかりの設計図に従って、地面の上に木の枝を置いて原寸の間取りを描いてみた。思っていたよりかなり大きく感じる。「ここが玄関」「ここが便所だ。」などと小屋の中(?)を見て回ったり、付近の小川や草地で遊んだりして、のんびりとしたひと時をすごした。

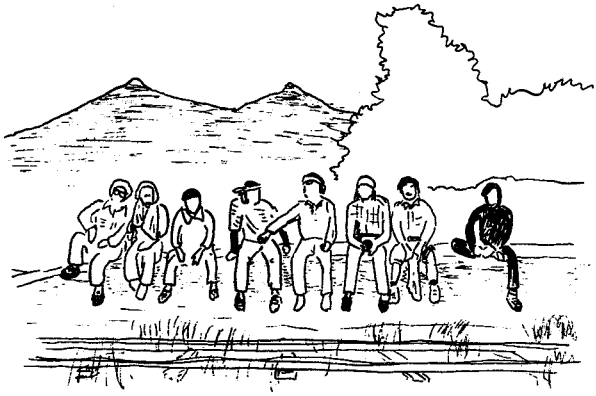
次に私達は峠を越えて東雲湖へ抜け、天望山に登った。初めて立った1,174 mの頂上は十勝平野と然別湖のすばらしい展望台で、丸く見える地平線に一同感激の声をあげた。

その夜は然別湖畔でキャンプ。晩飯はバーベキューという豪華さだった。

次の日は然別湖と糠平湖でボートに乗ったりして遊び、今年中に廃線になるという糠平―十勝三股の列車に乗って三股で解散した。参加者はそれぞれに小屋完成後の期待に胸をふくらませ、建設の手伝いを約束してくれた。有意義なツアーであった。

ツアーに同行した委員三名はそのまま士幌で下車、別行動の九名と合流して、役場を訪れた。今回は協定書の草案を仕上げるなど、大切な仕事がたくさんあり、3日間泊まる予定である。町では勤労青少年アパートに私達の宿泊室を用意してくれた。

19日、まず役場へ。林さんが出てきて、浪内さんは急用で出張していると言った。明日には帰ってくるらしい。協定書案の検討には浪内さんがいた方がいいと言うの



士幌ツァーにて

で、工事のことなどについて打合せをした。

北斗産業では飯尾さんが見積書を用意していた。総工費613万円、北斗の儲けはなしということであった。

その夜のミーティングで私達は資金調達について論議した。現在の資金が317万円、町から200万円出してもらえるとして、あと100万円の不足。学内回り、予約の取り立てなどで60万円はなんとかなりそうだ。40万くらいならなんとかなるだろうということで、613万で発注することに決まった。

次の日、飯尾さんがアパートへやってきた。建設工事を寮生が自分たちでやる分については、613万円の中からバイト料として還元してくれるという。設計については、照明器具は自作したいのでコンセントのみつけてもらうなど細部まで打合せをした。話のあと、飯尾さんは私達にジンギスカンをおごってくれた。「1人1キロは食べなきゃダメだ。」などと言われ、いやと言うほどごちそうになった。

午後から林さんがやってきて、浪内さんの帰りが夕方になるので、明日役場で会議をしたいと言う。私達はトレーニングセンターでバドミントンをやったり、下居辺の町営温泉へ行ったりしてヒマをつぶした。それにしても町の施設の立派なことには驚いてしまう。

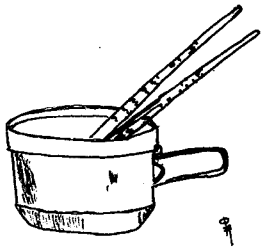
21日、やっと役場での会議となる。飯尾さんも交えて工事の発注について話し合った。北斗としては発注主は町かそれに準ずる組織にしてほしいと言う。一方浪内さんも、道から補助金をもらうためにも期成会のようなものを作った方がいいと言う。私達としては発注は自分たちでしたかったが、ここまで来たら名目より実の方が大切だということで納得し、町の有志で期成会を作ってもらうことにした。林さんから青年団の役員をメンバーに入れるという提案があった。

次は協定書について、飯尾さんは、町に「できるだけ学生の自主性を尊重してやってくれヨ。」、学生に「じゃ、カンバレよ。」と言い残して退場した。

小屋の管理運営委員会は町と学生側から同数の代表を出して組織し、小屋運営の主体となる。浪内さんと林さんは、期成会のメンバーをそのまま当てるつもりでいるようだ。利用許可については学生側の十勝研が行なうことで合意した。モメたのは管理運営委の議決が可否同数のときどうするか、という点だった。浪内さんは「最終的な裁量は町長に委ねてほしい。」と言う。これは実質より条例の表現上の問題らしい。私達としてはあまり賛成したくない条項だが、条例化の必要条件とあればしかたがない。結局、管理運営委で町側と学生側が対立するようなことになったら設立趣意どころではないし、そんなことにならないようにすることが大切なんだ、ということでこの件については妥協する形になった。なるほど条例よりも協定よりも大事なのは相互理解と協力であるというのは真理だろう。

「ところで小屋の名前はどうする？」と林さんが聞いた。

「？。士幌小屋じゃいけないんですか？」
と我々。
「町民にはピンと来ないなぁ。」
なるほど言われてみれば私達に「札幌小屋」と言うのと同じことだ。着工までに名前を考えておくことを約束した。
こうして私達は3日間の日程を終えた。機関紙「ヌプカウシヌプリ5号」には、『今回の士幌行は抽象的な話だけでなく協定の文章化や設計細部の変更などすごく現実的でいよいよ建つの感があった。』と報告されている。
資金は目標まであと100万円。私達は最後の追込みにかかった。
7月3日から5日まで毎晩寮内回り。応援団ＯＢの蝦名さんが全国旧制高校の寮歌集を作り、5百部すべてを私達に寄付してくれた。1部200円で販売して歩く。またまた督促状も出した。学内回りも精力的に行なう。
それでも不足が出そうなので、私達は全体会議で「2万円の誓い」を断行した。委員は多い者はすでに10万円を超える出資をしているが、これまでの出資額にかかわらず、全員が7月末日までに2万円を出すことにしたのである。悲壮なる決意であった。
7月5日、町より200万円の援助が議会を通過したと連絡があった。7月21日、再び林さんより電話があり、道の補助金80万円がついたという。これで資金は足りた！起工式は8月20日ごろと決定した！



4．小屋命名

8月からの建設工事はたくさんの寮生におおいに参加してもらう予定である。工事の参加は「士幌土方ツアー」と命名され、寮内にビラが配られた。

『昭和50年秋、第67回恵迪寮祭をきっかけとして、寮生たちの胸にともった山小屋建設の夢は、3年の歳月をかけて、ついに現実の事業として我々の目前にせまってきた。この夏、ついに士幌小屋は建設工事に着工する。ひとつの夢を大切に育ててきた我々にとってこのセンテンスは実に感無量の響きをもっているではないか。
手作りの掘建小屋から始まって以来話はふくれにふくれ、実に総工費613万円の大事業となり、建設工事も士幌の北斗産業に発注することになった。しかしそれでも士幌小屋は俺達の小屋である。俺達が建てずして誰がこの小屋を建てようか!?さあ、諸君！　小屋を建てに行こうではないか！　かねてよりヌプカウシヌプリ等

でアピールしたとおり、以下の要領で士幌土方ツアーを募集する。』

7月下旬、寮の一室では連日オールナイト会議が開かれた。協定案の最後のツメ、夏休みの日程、起工式のプログラム、土方ツアーの計画、小屋の備品のことなどが話し合われた。手作りの備品としては、イス、机、本棚、食器棚、シャンデリア、果ては庭園や百葉箱まで提案された。工具や炊事用具は建設キャンプの備品として事前にそろえることになった。

小屋の名前についても話し合われた。7月21日の会議では実に36もの案が出されている。全部書き出してみよう。

東雲小屋、アンビシャスヒュッテ、エルドラド、黎明舎、火の鳥小屋、湖陵舎、風陵舎、チセクンネワン、ペンケ寮パンケ小屋、ヘッペヒュッテ、ドッペリヒュッテ、無欠小屋、寮子庵、エールガイツヒュッテ、ヌプカウシヌプリヒュッテ、チセヌプカウシヌプリ、野心舎、開拓舎、晩成舎、木精小屋、醒迷舎、マカロニほうれん荘、アルケー舎、新燈舎、チセフレップ、チセヘリ、チセタラップ、カムイ舎、復活小屋、スーエン舎、スーユウ舎、風響舎、大志の家、チセシホロ、光のさす家、朝日のあたる家。

とても収拾がつかない。小屋命名は一時延期された。

8月10日、私達は現金370万円を持って士幌へ向かった。いつもと変わらぬからまつの旅だが、苦労のにじんだ大金をかかえての夜汽車はみんな興奮していた。

8月11日、役場では協定書の最終案を決定した。工事のこと、起工式のことについても打合せた。また今回はたくさんの新しい人を紹介された。期成会長の神戸さん、連合青年団の山口さん、農協青年部の三島さん、商工会青年部の大口さん、金森さん。浪内さんと林さんが選んだ期成会のメンバーである。神戸さんは士幌幼稚園の園長さん、つまりこの計画の発端となった結城先生の後任で、しかも北大OBである。私達ととても楽しそうに話をしてくれる先輩だった。

飯尾さんからは工事の下請をしてくれる寺田さんを紹介された。士幌で一番腕のいい大工さん、と飯尾さんが折紙をつけた。

起工式は8月21日と決まった。前夜が士幌町の仮装盆踊り大会なので、ぜひ学生も参加してほしいと言われ、喜んで提案を受けることにした。

8月15日、建設キャンプ設営班が士幌へ向かう。16日にテントを張り、小屋建設日誌の第1ページが記された。カマ、ナベ、食器、ガスコンロなどもそろい、いよいよ準備OKだ。

8月19日、委員は全員が一旦帰札し、小屋命名のための全体会議を開く。この前のような事態をさけるため、1人が一つづつの名前を責任を持って提案することにした。熟考の後8つの名前が提案された。全員で第1回目の投票を行なう。小寺君

提案の自由舎が3票、芹沢君の恵迪小屋、太田君のチセシホロ、私のチセフレップが各二票。そこでこの4つで第2回目の投票。チセフレップと恵迪小屋が各5票で決戦投票に残った。自由舎は4票で惜しくも選にもれた。最終投票では自由舎の4人がチセ・フレップに回ったため、チセ・フレップ9票、恵迪小屋5票。かくして小屋の名はチセ・フレップと決まった。アイヌ語で「赤い小屋」の意味である。実はこれは文法的にまちがっていることが指摘されたが、響きがよいのでこの名前で通すことにした。

8月19日夜、委員、寮生合わせて24名と顧問の山元先生、計25名は「からまつ」で士幌へ向かった。狩勝峠の朝日を初めて見る者も多く、思わず歓声がわきおこった。

20日、寮生たちはトレーニングセンターなどで遊び、委員は町と起工式について最後の打合せをする。酒とワイン、牛肉、それを焼く金網の用意、式次第などなど。起工式主任は上谷君、オノ入れは芹沢君。私はあいさつの内容を整理して暗記するのに四苦八苦していた。

その夜は目抜き通りを通行止にしての仮装盆踊り大会。町中の人たちが集まった。「きくや」ののぼりを立てた武者姿の一団、白鳥のような衣装をまとったグループ、花笠をかぶったおばあさんたち。どれもこれも実に凝った仮装で、長いことかけて準備したらしい。実に盛大な祭りとなった。その中にあって私達はあるいはジャージ、あるいは作業服、足にはホオ歯のゲタもいれば長ぐつもいる。踊りなど知らないから、金づちやスコップをふるうまねをしながらねり歩く。自称「建設踊り」私は先頭に立って「恵迪寮」ののぼりを掲げた。マチマチの服装と奇妙な踊りはいっそう目を引く。そしてみんな知ってる「ああ、山小屋の北大生だ。」町の人たちは盛大な拍手と声援を送ってくれた。女の子からジュースの差し入れももらった。私達はこの計画に大きな援助をしてくれた士幌町への感謝と、今後の交流に対する期待をこめて、汗びっしょりになりながらひたすら踊った。起工式前夜、この時私達と士幌町の人々の心はひとつになっていた。

（大堀　尚己）

調　印　式

士幌小屋設立の思い出

佐藤　創

私が恵迪に入寮した時、仮宿はルネッサンスという部屋にぶち込まれた。その夜はいきなり酒をあおられて同時に入った奴などは先輩となぐり合ったりしてわけのわからないうちに次の朝になった。何となくその雰囲気が肌に合わなく、要するに恐れをなしてすぐに士幌小屋という部屋に入ったのだ。それから結局1年と6ヶ月ほどその部屋で暮らすことになった。その間が自分の士幌小屋活動の期間であったので今では思い出という形で話しをするしかない。初めて士幌の地に行ったのは6月初めであった。その直前まで大雪山へ登っていた私は、それまでの黒々とした針葉樹林の光景とはうって変った十勝士幌高原の広大な牧草地を見て、北海道の自然は多様な顔があることを思い知ったのだ。

それ以来、小屋完成まで何度かこの地に足を運んだのだがやはり最初の士幌歩きが思い出深い。小屋建設予定地を後に北に立ち向かう尾根を深い笹やぶこぎを終えると、そこには心を安らげてくれるかのように東雲湖があった。林床は暗い木の陰となり苔むした小道を行くと然別湖に出た。そこが今晩のテン場だ。皆慣れない手つきでテントを張り、たき火をし、飯を作り、国立公園内でこんなことをしていいんだろうかなどと現在では想像もつかないような謙虚さで作業をしていたものだか

ら、湖岸に一そうのボートでも近づこうものなら、巡視艇じゃないかなどと誰かが言うのだった。その時は札幌までヒッチハイクで帰ったのだが、それ以後も士幌行きはヒッチハイクを多用するようになった。金の無い身であるからしかたなくヒッチハイクをするのだが、運転手のにいちゃんから買ってもらったミスタードーナツを食うと紙袋の底に札たばが入っていたり、他の多くの方から小屋設立への激励を頂戴したことは汽車旅では味えなかった嬉しさであろう。

私の小屋活動のうちでやはり大きな出来事は寄付が集まりいよいよ起工式を迎えてからの建設キャンプである。多くの人が入れ換り立ち換りして、テントの中で大酒を食らい、昼は労働に精を出し、うまい飯を腹いっぱい突っ込む、とう超健康的な生活を送った。振り返ってみてこの活動を支えてきたのは、多くの人と友達になることができ、楽しい暮しが出来た、起工までの諸活動、建設キャンプがあったからだと今、自分は思っている。士幌の部屋を出てからは実際の活動面でも、精神面でもチセ・フレップとは、離れてしまった私であるが、これからは何かの機会があれば、また小屋へ行って、小屋を愛する人々と、もう1度触れ合ってみたい。

設立委員会当時のあるエピソード

多久島　実

これは1978年当時のお話です。あの頃は、帯広まで行くのに『からまつ』という、夜行列車をよく利用しました。これがたいそう便利で、たとえば、日曜の夜札幌を発ち、月曜の早朝帯広に着き、そこから士幌線で士幌まで行き、午前中に町役場で会議を行い、早ければその日の夜に、遅くとも火曜の早朝に札幌へ帰ることができたのです。そのため大切（？）な講義も月曜の分だけ休めばよかったのです。

ところで、この方法では、士幌に着くのが午前6時40分ごろでありまして、どんなにゆっくり歩いても7時には（当時の）町役場に到着してしまいます。会議が始まるのが、9時ごろですから、それまでの時間を、どこかで過ごさなければなりません。なにしろパチンコ屋も夕方にならなければ開店しないというまことに健全な町です。24時間営業の『ミスター○○○○○』などさがす気にもなりません。もっとも、冬の間、会議のある日はあらかじめ役場の人が部屋を準備してくれましたので、そのような苦労はなかったのです。ところが、これからお話しするのは初夏のできごとなのです。

当時の町役場の前には道路を隔てて小学校がありました。そして道路と学校を仕切るために草のはえた土手があったのです。この土手がいいあんばいにクッションのかわりになりまして、寝袋をそこに敷き、ゴロリと横になると、それはそれは良

い心地がしたものです。

また、眠くない者は学校の水道で歯を磨いたり、ガラス窓に自分の顔を映しては髪型を直したり、コンタクトレンズを装着したりしていました。

そのうち、児童がぞくぞくと登校して来ます。変な男たちがイモ虫のようなかっこうで道や土手にゴロゴロしているのですから驚いたのも当然のことでしょう。

しかし、無神経な男や無表情な男たちばかりです。子供達がのぞき込んでも委細構わずスヤスヤ寝ていました。

その時、私とSは土手に腰をかけ、小学生にからかわれている仲間をながめながら、談笑しておりました。

と、ちょうどそこへ3年生ぐらいの少女が、やって来て立ちどまり、じっと我々を見つめているではありませんか。そう、ちょうど動物園のゴリラとその飼育係でも見つめているかのように……

私はこれはまずい、誤解を解かなければ、と思いました。「このおじさんはゴリラなんかじゃなくて、人間なんだよ。それに僕も飼育係ではなく、ただの学生なんだよ。」と私は訴えたかったのです。

ところが、私の意に反して私の口から発せられた言葉はこうでした。

「このおじさんね、僕より何歳年上に見える？」

私はこの時、なぜこんなくだらない質問をしてしまったのか、自分でもよくわかりません。ただ、気まずい沈黙を破ろうとしただけなのです。

少女は、困ったな、という表情で私とSを交互にながめていました。そして、こう答えたのです。

「4つぐらい」

私とSは、同じ年に入学し、どちらも現役だったのです……。

結城先生と山小屋

浪内　一洋

「結城先生は、また、えらいことブッてくれたもんだ……。」北大の恵迪寮生と名のる数人が、企画課を尋ねて来られたとき、正直いってそう思いました。

〝愛と緑の町づくり〟をうたった第2期町づくり計画の答申を終えると、結城先生は、ひとまず使命は果した、として〝勇気ある撤退〟をされ、東京へ帰られました。その直後のことです。

「あとのことは、呉々もよろしく…」と計画の実現を心にかけながら離町された先生から、確かに〝士幌小屋の件〟も引き受けはしたものの、こんなに早く、現実の話になるとは思ってもいなかっただけに、少なからずあわてました。聞けば、寮内では、先生の講演に共鳴して「士幌小屋」建設の気運が高まり、推進体制ができつつある。それで、町側と具体的な話を煮つめたい。というのです。

熱っぽく語る若い人たちに、何と答えてあげたらよいのでしょう。実は、小屋の建設場所はおろか、土地を借りる話の交渉すらまだない状況だったのです。

士幌小屋の建設適地は、自然環境、水利、交通の便、将来見とおし等々、あらゆる角度から検討しなければなりませんが、町内では、東ヌプカウシの山裾（すそ）、士幌農協が所有する牧場の中にしかない、と見られていました。

所有者の士幌農協は、レッキとした法人です。組織の決定機関である理事会にもかけなければなりません。広い土地の、ほんの一部だけ、といっても生産をあげるために造成し、管理している〝牧場〟であってみれば、よほどの筋が通らなければ、使用を認めてくれるはずがありません。

土地を借り、山小屋を建てたいとしているのは、北大の学生の一部であり、法人格をもたない、寮内の一申し合せ団体に過ぎないのです。

せめて、大学が当事者になってもらえたら……。学生部の事務当局に出向いて話し合いました。また、飯尾さんの紹介状を携さえ、学生部長の教授にも直接お会いして、経過と今後についてお話しました。しかし、大学（文部省も）は、公的な立場は不可能というご返事です。無理もありません。せめて、大学は無関係というのでなしに、これからの学生さんたちの行動を見守っていてほしいとお願いをして辞しました。

小屋づくりの第一段階、用地の借入れで、早くも行きづまり、といった状態でしたが、間もなく、思わぬ進展を見ました。後藤町長と太田組合長とのトップ会談で、町が土地借り受けの全責任を負うことで合意が得られたのです。自治体や経済団体の行為として、並みの常識では考えられないような、貸す側も借りる側も、まさに

大英断だったと思います。

用地が決まらないうちは、小屋の計画も〝机上の空論〟の感があって、お互い半信半疑でしたが、これで一挙にはずみがつき、それまで「電柱の古材でも安く買って来て…」程度の〝丸太小屋〟だったのが、本格的な〝山小屋〟へと計画が飛躍しました。

候補地の現地立会い、起工の段取り、町との協定書等文の協議等々、学生の皆さんの往来もはげしくなって行きます。一方、肝心の資金づくりも、先輩の名簿をたよって精力的な人海作戦を展開したり、自分たちのアルバイト代を出資したりと、まずは順調な様子。そこは、伝統を誇る北海道大学だけあって、ＯＢの皆さんの数も多く、道内のあらゆる分野で、それぞれ然るべき地位にもあって多彩です。「ボーナス作戦」では、教官を中心にかなりの募金成果を収めたようでしたが、あとで、学生部長さんに抗議や照会が集中した、との話も耳にしました。

地元の受け入れ態勢は、士幌高校長（現在、士幌幼稚園長）の神戸昇氏、小屋の建設請負いは、北斗産業専務の飯尾賢二氏、設計は、帯広在住の小野東機男氏が、後輩たちの夢実現に一役買って下さることになりました。

このほか、帯広エルム会には、十勝支庁長の永澤悟氏（現在、副知事）、商社重役の戸倉辰朗、加藤正昭氏らも居られ、医師、教師、記者、実業家など、政、財、官の各界に錚々たる人たちが名簿にあって、学生の皆さんの大きな支えになっていたのも見逃せません。

いよいよ、昭和53年8月21日。古い役場庁舎の二階で「山小屋に関する協定書」の調印式が行なわれました。大勢の見守るなか、後藤町長と大堀代表がサイン。つづいて学生側顧問の山元助教授、地元側から神戸、飯尾両先生の立会人としてのサインを載きました。

12条からなる協定書には「甲」（士幌小屋設立委員会）が建設した小屋を「乙」（士幌町）が寄附を受けたあと、設立の趣旨にそって、甲と乙の代表で組織する管理運営委員会が主体となって小屋を維持運営する。といった内容がもられました。切角、学生さんたちが苦労して建てた小屋を、町が、いただく。という格好になってしまうのは、抵抗なしとはしませんが、建物の物権、公課、火災保険、見まわりなど、維持管理の上では、この策が最善、との結論に達したのです。

調印式が済んだあとは、直ちに起工式です。あらかじめ選定してあった敷地内の小高いミズナラ林にナタを入れて終了。「チセ・フレップよ永遠なれ」と大書した、のぼりのもと学生さんたちの「都ぞ弥生の…」寮歌の大合唱。爆竹の強烈な響き。野趣にとんだ大バーベキュー・パーティ。ジャガイモの塩煮と飲み放題の牛乳。と持寄ったり、差入れがあったりの大宴会がくりひろげられました。

長かった、苦労がこうして実るところまでこぎつけた学生さんたちの感激が、わ

が身にも伝わって、感慨ひとしおでした。

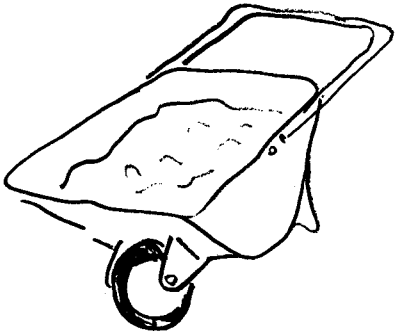
こうした、学生の皆さんの情熱と、まわりの支援で、空想が現実になったのでしたが、さらに、道から十勝支庁を通じて、小屋の建設資金に80万円の補助がつくことになり町からの補助金200万円も決まり613万円の工事費は、これで完全に調達のメドが立ち、喜びにわきました。

11月18日。晴れの落成式は、新装なった「チセ・フレップ」で挙行。

来賓の末席を汚させていただいた私にも、発言の機会が与えられたので、用地を借りるにあたって「学生運動の過激派に小屋を占拠されるようなことになったら…」「農村青年との交流の中でエリートである彼等に、女性たちが引かれてしまい、花嫁不足に拍車をかけるのでは…」「自然保護を主張し、いま建設中の然別道路に反対されはせぬか」など、内部に、慎重論というよりむしろ反対の意見があった。それなのに、〝若者の交流の場〟としての山小屋に理解を示し、所有地内の使用を認めて下さった農協理事者にまずお礼を申し上げたい。とのべさせていただきました。農協を代表して出席された佐藤一美常務（故人）は、パイプをくわえ、ただ、ニコニコ、笑って聞いているだけでした。

卒論に、士幌の農業の歴史、とりわけ士幌農協の歩んだ途をテーマにしたというK君。

自分の希望する新聞社に採用が内定したO君は、社会人になるにあたって、改めて農協や町が大きな心をもって対応してくれたことを認識した。S君は海外協力青年隊員となって近く出発する。Y君はこんどチセ・フレップで林間学校を開くことになった等々、企画課から離れた今も、私の職場（町立病院）へ尋ねて来て下さる人たちがいて、筆舌に尽せぬ喜びをかみしめています。



去る8月7日、結城先生が久しぶり士幌へ帰って来られました。早速、士幌高原、チセ・フレップへ、ご案内して、小屋と対面していただきました。感激にひたる先生に、私は心の中でお詫びをしたのです。「えらいことブッてくれたもんだ…」と、先生を恨んだりして、本当にゴメンなさい！

（現在　町立病院事務長）

「チセ・フレップ」よ、栄光あれ！

結城　清吾

すべてそうだが、何かをやろうと言うことはたやすいことだが、それを実現することはきわめてむずかしい。北大の恵迪寮の学生諸君たちの意欲が主体となり、それを助けて実現にまで運んだ士幌町や多くの善意の人びとの協力なくしては士幌高原の「チセ・フレップ」は完成できなかったであろう。私は57年8月初めて士幌高原の「チセ・フレップ」を訪れた。小さな山小屋であるけれどその完成のため苦労した北大恵迪寮生の面々、また学生の意欲に報いた士幌町の人びとを思い浮かべ、「チセ・フレップ」に向かって熱い感謝の祈りを捧げた。

思いおこせば50年10月、北大恵迪寮の寮祭ということで、鹿田君が士幌に私を尋ねてきた。寮祭におこなう講演会の講師依頼の件ということである。私は喜んで承諾し、私の講演のテーマをすぐさま「21世紀と北海道」とした。当日、北大恵迪寮のオンボロ寮で――しかし異様な活気がみなぎっていた――恵迪寮生と相対面した。北海道に憬小をもって渡道した私であってみれば多少興奮気味に、21世紀をになう北海道の役割を強調した。トインビーの〝海渡文明論〟を軸に、北方文化論？の風呂敷を拡げた。夜は念願のクラーク会館に寮生の御好意で宿泊させていただいた。その時に私は「士幌自由大学」の願いを述べたものかどうかの記憶はさだかではない。

しかし多分51年8月（7月であったか？）夏休みを利用して恵迪寮生が十勝、士幌にやって来た。農家に分宿し、3日間（多分？）農作業に専念し、2日間は士幌の青年達と「将来の北海道」と題するシンポジウムを士幌高原で開催した。帯広の木呂子、畜大の田島、両先生が喜んで参加してくれた。このような会合を私は、長野県で生れた〝自由大学運動〟にあやかり、「士幌自由大学」と称したのであった。この「士幌自由大学」で．士幌高原に第二の〝恵迪寮〟建設の話題がのぼったものと思う。私はそう確信している。

プライベートな事を言わしていただけば、当時は、私を北海道に連れて来て下った、士幌町長飯島房芳氏の死去にあい、必みだれ、悶々とした日々であった。飯島町長との約束の一つでも果さなければならぬと思い、士幌町づくり計画に取組んでいた頃でもあったろうか。しかし私は意気地なく、絶望的な精神状況の中で、せめても〝士幌自由大学〟開催によって、一つの救いをみいだした思いであったろうか。当時の私は、信念が信仰にまで高まる以前の、まことに弱い存在でしかなかった。まことに申訳なかったことであったが、士幌にかける夢が挫折した思いの中であったと思う。

恵迪寮の若い諸君達は、大学にもどり、士幌高原に、第二の恵迪寮づくりを決意し、それに取組みだした頃、私は士幌から去ろうとする弱い心に打ち勝つことが出来なかった。後事を当時の企画課長浪内さんに託して、私は51年11月、士幌を去った。用地や資金づくりのことで、後藤町長や十勝支庁長に依頼したことをかすかに思い浮かべている。私自身、士幌在住の苦い思い出の中で――それはあとで考えてみれば、私の思想が試され、貴重な体験となったものであったが――突然、帯広の木呂子先生からHBC週刊「パック」(53年10月20日、第324号)が送られて来た。浪人生活から鶴岡へ移った時であった。

この『パック』に載せられていた〝北に生きる〟という一文の中で始めて私は、〝チセ・フレップ〟の完成を知った。〝チセ・フレップ〟の完成を知った時、私は複雑な気持であった。一つは〝よくやった、ありがとう〟という気持と、〝相済まなかった〟という感情が率直に言って交錯した。しかし、私の感慨とは別に、確実に士幌高原の一角に、〝チセ・フレップ〟が完成したのである。無責任な発言を許していただけるなら〝嬉しい〟の一語につきる。

私は、新しい土地で、私なりの仕事をおこない、再び私の人生に自信をもつようになったら、士幌を訪ねたい、チセ・フレップとも対面したいと願っていた。神の思召す人生を生きなければならぬ、との思いをもつようになって、挫折感から立直り、57年8月、ようやく〝チセ・フレップ〟と対面することが出来たのである。〝チセ・フレップ〟の建設に青春をぶつけた恵迪寮生に私は感謝しなければならない。最後に内村鑑三の言葉でしめくくろう。それは恵迪寮生にとっても、私にとっても必要だからである。〝チセ・フレップ〟の栄光を祈ろう。「人々に臨む患難は種々様々である。而して各自に臨む患難は其人に取り必要欠くべかざる患難である。彼を潔め、彼を鍛へ、彼をして神の前に立ちて完全なる者と成らしむるために是非共、臨まねばならぬ患難である。」(内村鑑三全集23巻「患難の配布」より) ありがとう。皆様の健斗を祈る。

結城先生の現在

結城先生は現在、山形県は鶴岡工業専門学校の教授をしておいでです。庄内地方の地域発展計画等、士幌町での町づくりの実践を生かして活躍中との事。

士幌小屋建設のころ

山元　周行

昭和19年の夏、北大予科三年生の時、私は初めて狩勝峠を越えた。機関車の焚く石炭の煙の充満した旧線の長いトンネルの闇をくぐりぬけた直後に、はてしない眺望が忽然として展開した。陸軍の飛行場づくりに駆りだされた北大予科生を乗せた臨時列車であったためか、駅もないのに峠の最も眺望のよい所で汽車は臨時停車をした。この粋(イキ)な計らいに喜んだ予科生は、車外に飛び出して十勝の空気と眼下に広がる自然を満喫した。

この後、帯広の近くの音更で、軍用飛行機の掩帯(えんたい)をつくる名目の土方作業の傍ら、花札などの単純な賭博、裁縫、フランス語と沢山の寮歌を覚えた。音更川の辺(ほとり)では、太鼓代りに空樽を叩いて寮歌を歌ったり、盆踊りの輪をえがいた。このようにして夏を過ごした直後の9月、学校の机に向う暇もなく、日焼けした顔で、私達はあわただしく北大予科を卒業した。文字通りの空腹感と学問に対する飢餓感とを味って北大予科を了へたことになる。

×××××××

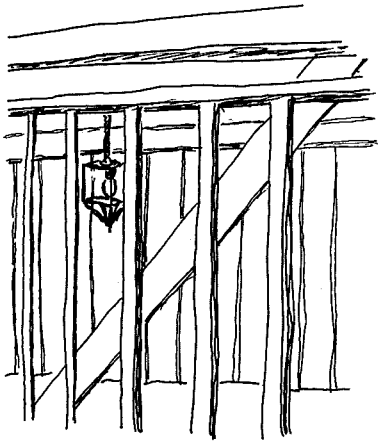
士幌小屋に私が関わりあうようになったのは、募金段階で顧問として名前を出すように頼まれたからであった。大人らしい分別や官僚的狡猾さからすれば逃げた方がよいであろう場面でも、このような学生諸君の申し出には盲判をおす性癖が私にはあるようである。そして、権力と金とがあればもっといろいろしてあげることができたのにと、いつも悔が残る。

小屋設立の理念の提供者はもっと先にいたのであるが、理念を継承し具体化するに当っての多くの学生諸君の苦労を見ると、理念を説く者は、その結末を慮るべきであると思う。とはいっても、私が寮生諸君の依頼に直ちに応じたのは、前述した予科生時代の十勝の夏の想いが私をよぎったからである。

昭和53年8月21日の起工式の前夜は、士幌町の集会所でシュラフザックに入って学生諸君といっしょに寝た。この夜は士幌の夏の盆踊りのフイナーレを飾る仮装盆踊り大会が、町の目抜通りを交通止めにして、殆んど全町あげて催された。趣向を凝らした衣裳を纏った踊り手の中に、ジーパンにシャツ姿でスコップを手にした寮生諸君のチームもとけこんだ。この全く地のままの異様なチームに対して、町は特別賞をくれる好意を示してくれた。踊りの輪がとけた後、町のド真中でストームを組むという私達の悪い癖を発揮してしまった。

翌日の起工式後の宴では、ドラムかんを横にきって網をのせたような炭火で十勝牛を焼くのであった。士幌で建設会社の社長をしている先輩や士幌高校長をやめら

れた先輩も私の寮歌に和してくれた。北大の良い先輩と共感する美わしい情感に浸った。宴の後、すぐ木を伐採する。穴を掘ってトイレをつくる。テントを張る。炊事場をつくる。……と作業がはじまる。夜は高台に立って、月光に黒々と映しだされる十勝の平原を眺め、連なる山々のシルエットを背にして、寮歌を歌った。



ところが、テントにもどるや、突如として激しい風がテントを揺さぶり、大粒の雨がテントをたたき、雷鳴が轟きつづけるのである。シュラフザックの中で、何時テントが吹き倒されるかと案じて、結局一晩中眠れなかった。翌朝学生諸君を残して私は帰札せざるをえなかったが、帰宅後も十勝地方の天気が気がかりで、気象通報で十勝地方に雷雨注意報が出たりすると、学生諸君が雷にうたれたりはしないかと、この夏は一夏心配であった。

11月の完工式では、起工式の時のような心配はなかった。完工式の宴で、寮生諸君の例の自己紹介がはじまって、「三年目二年……」などと蛮声をはりあげると、町の人達の中には、「小屋をつくるために留年したのではないか」と真顔で案じて私に問いかけてきた人がいた。実際、小屋づくりのために留年した人もいたかもしれない。その自己犠牲には私は心が傷む。机に向って勉強する暇を奪われた戦時中の予科生の十勝での生活に冒頭でふれたのは、このような人達に献げたからでもある。

この後、帯広の駅で寮生諸君と別れて汽車に乗った。彼等は汽車で帰らないのである。「なあに、適当にトラックに乗せてもらってヒッチで帰りますよ」と笑って手をふってくれた。

士幌町の人達の善意を肌で知っている私にとって、士幌小屋について案ずることがあるとすれば、その後の相いつぐ国鉄運賃の値上げや、急行なみの鈍行からまつを抹消してしまった国鉄ダイヤの改正や、さらに士幌線廃止が、士幌と札幌との間を遠いものにしないかということである。

（士幌小屋設立委員会・士幌チセフレップ運営委員会顧問）

チセ・フレップの思い出

50年入寮　小木　　聡

50年の秋、道東を放浪した時に、開識社の関係で士幌町の結城さんを訪ずれたのが、士幌小屋設立に携った最初のきっかけでした。

翌年の3月「士幌自由大学」へ参加し、木呂子敏彦氏の「連邦制・土地国有化」の講演を聞き、士幌高原で、満天の星空の下、ストームを組んだことは、今でも忘れられません。

木呂子さんは、農民運動に長年取組み、吉村元帯広市長のブレーンと言われた人で、卒業後も帯広へ立ち寄った時、何度かおじゃましました。

私は、そもそも十勝の生まれで、アイヌの人達が目標としたヌプカウシヌプリも小さい頃よく眺めた山でした。

寮に入り、それこそ内地からやってきた連中がほとんどですので、自然に恵まれ過ぎてきた自分も、目のウロコが落ちたように逆に「北海道の自然・文化」を考えるようになりました。

小屋の建設には、途中から参加し、外壁の板を張ったり、断熱材を入れるのに、身体中チクチクし、新田牧場まで、風呂につかわせてもらいに行ったりもしました。夜には、キタキツネが現われ、休養日は、白雲岳へ登るなど、建設中の思い出はつきないものがあります。

その後、アフリカ行きの資金稼ぎのため、恐怖のイモ運びのバイトをやり、恐龍の背骨のような日高山脈を見ながら、身体のあちこちの痛みをこらえたものでした。

寮生のすばらしいエネルギーと町の人達の協力で、チセ・フレップが完成し、当初のＯＢの怠慢にもかかわらず、毎年、農業実習や林間学校が継続しているのは、現役の人達の活躍によるものだと思っています。

然別湖には、冬になって結氷するとコタンの村ができます。恵迪寮も来年なくなりますが、「恵迪の村」としてますますにぎやかになってほしいと思います。

今年（'82年）の秋には、二世が誕生し、もう少し大きくなったら、チセ・フレップへ連れて行くのを楽しみにしています。みんなで士幌高原から、ぼけっと十勝の大平原を眺めに行きましょうや！

建設日誌から

「3年余の準備期間を経て、やっと我らが士幌小屋を建てるところにこぎつけたのだ。この緑の台地に山小屋が建つと思うと胸が躍る。」(建設日誌冒頭)

1978年8月21日、ついに3ケ月にわたる山小屋の建設が始まった。これには多くの寮生が参加した。パワーショベルの力に驚きつつ、穴を掘り、材木を運び、釘を打つ。仕事の合間には山に登り、夜はテントで酒を酌み交す。そして、彼らの心の叫びを「山小屋建設日誌」に綴った。山小屋の誕生祝いとなるようにと……。

11月18日、山小屋は完成した。

8月21日　起工式

本日11時より起工式を行なう。寮生ＯＢは山元先生を入れて23名。町の人達も多勢集まってくれて、上谷努力の会場設営によりとても立派な式をあげることができた。

「やっとここまできた！」

という実感とともに、これまでの苦労のひとつひとつが胸の中に去来する。うれしかった。

しかしこの感激も、会食に士幌町より寄付してもらった牛肉とトウモロコシとジャガイモのうまさに歓喜したことに比べると、とても及ばないのではないか。本当にうまい牛肉だった。

本日の工事。木を切り倒し、キャンプ地に仮設トイレを作る。晴れれば十勝平野の大展望が眺められるとってもすてきなお便所。(N. O.)

霧の中で、チセ・フレップの起工式は厳かに行なわれた。残念ながら、ヌプカウシ・ヌプリは顔を出してくれなかったが、多くの町の人、寮生達と共に我々は新たな一歩を踏み出した。

今、夜の9時20分。本日起工式終える。沢山の人が祝ってくれる。稚拙な起工式だったし、礼を失することも多かったと思う。にもかかわらず、我々を温かく見守ってくれる。その期待の大きさに肩の荷重し。

我々の計画は我々のみしてならず、幾多の人々の協力と、からみの中から育まれたのだ。

「学生の甘え。」

と、言われないように。そして

「嘘つき。」

と、言われぬように。(T. O.)

札幌を発ち、9時間の後この地、士幌に到着。駅は北海道なら簡単に見つけられるような、小ぢんまりとした田舎普請。町並もこれという独特のものは見当らない。しかし、役場から士幌高原に向かう途中に思わずはっとした。小径に引き裂かれた両側から果てしなく続く大地のうねり、小屋 —— チセ・フレップ建設予定地は、このうねりの頂にあった。

起工式は粗末なものながらも、感動的であった。私は、言ってみれば部外者であり、寮にいろいろと仕事を残して此処に来たのも、半分は寮長たる面目を立てるためである。敢えて、この小屋設立に何をしたかと言えば、小屋の柱にして5センチ位を寄進したに過ぎない。

この小屋設立事業の達成は、それが寮生の自己満足というだけではなく、自然を愛し、自然と人間の正しい在り方、関係を学ぼうとする全ての人々に開かれた場を創り出そうとした事、そして、そのアンビシャスな試みが多くの人々の理解、協力、信頼関係を通じて実現に至った事、その点で恵迪寮文化活動として至高のものである。いや、日本の何処の寮でも未だ成し遂げたことのない立派な偉業であると確信する。(H. K.)

8月23日

高校時代以来、山登りをして悪天候には慣れているつもりの僕だが、士幌の地はそう甘くはなかったようだ。

全く今日の天気には参った。今夜もまた雨が降りそうだが、どうなることやら。でも、さっき本部テントの補強をしたので、僕等のテント（赤十字テント）がぶっつぶれでもしたら、そこへ逃げればよかろう。

夕食後、町が用意してくれているバスには乗らず、全員残留することに決定。

明日は数人帰るらしいが、僕はどうしよう。帰りたい気もするが、ここの飯のウマさは捨て難い、牛肉、野菜炒め、ワイン*etc*、どれをとっても寮飯とは比べものにならぬ。まあ、明日の天気と気分しだいで決定しよう。

また少し風が出てきた。ロウソクの火が今にも消えそう。明日こそ雲一つない快晴になることを祈ってペンを置きます。(T. N.)

今日で現地入りして3日目だが、実に充実した日々である。来て本当に良かったと思う。小生は明日下界に降りてしまうが、皆頑張っている旨、寮生に伝え、暇、金、意志のある人には是非士幌行きを勧めようと思う。

最近の学生はダメになったと世間では思われているが、そうではないということを士幌小屋設立委員会の諸氏を中心とする面々は、一つの例をもって示した。このバイタリティーは大いに評価されていいと思う。

ただ、この計画は一般北大生と遊離したところで進められているように思う。欲を言えば彼等の参加も望みたい。(T. T.)

8月25日

珍らしく風の無い夜。何人か外へ出てテーブルのあたりでギターを弾きながら、中島みゆき、などを歌っている。昨夜のアルコール入り大合唱に比べれば実に静か。テントの中の乱雑ささえ見えなければ、ロマンチックなキャンプムードで建築工事の飯場とは思えない程。

考えてみると、僅か5日間のうちいろんな夜があった。

ネコ押しに疲れきってマグロのように寝た22日の夜、嵐と戦って耐え抜いた23日の夜。そしてウイスキーに酔って大荒れになった昨夜の本部テント。

考えようによっては実に浮世離れした楽しい生活だと言える。何せ社会と我々を結ぶ連絡は、オッサン達が毎朝持ってきてくれる1日遅れの新聞と、めったに鳴らさないラジオだけ。毎日一生懸命働いてうまい飯を食って（寮飯よりだんぜんうまいともっぱらの評判）地平線を見ながらクソをして、そして沢の水音と風しか聞こえない静かな夜を眠る。まるで仙人になったようだ!? (N. O.)

前に書いてある日誌を読んだ。そして何か一つの真理もどきが発見、否、再発見できた。

我々は、少なくとも僕は、誰の為でもなく何の為でもなく、自分の夢の為にネコを押しトンカチを振いスコップをすくうのだと。(H. Y.)

9月9日

棟上げがこんなに早くできるとは思わなかった。

2階の天井のハリの上にアユミ板を並べてその上に脚立を立てるとさすがに高い。回りの木の梢が目の前に見えるのだ。その上に乗って3階の柱とハリをカケヤで打つのは、スリル満点、気分壮快。棟木の北側の最後の1本を打ったのは僕である。エヘン！

かくして棟上げは本日の午前中で終わり、午後には屋根タル木をつけて、アッという間に3角屋根の小屋の形ができ上がった。実に美しい。1番上の棟木が光っている。感激、感激！

記念に2階のハリの上側、つまり下からは直接見えない所に皆で落書きをした。チセ・フレップの元祖落書き。小屋がある限り永久に残るだろう。下から見えないというのがいい。将来小屋に泊ったら自分だけの想い出に耽ろう。誰にも見えない僕の落書き！ (N. O.)

9月10日

今日は朝から雨。天気予報によると午後から風雨とも強くなるという。恐ろしや…。

しかし仮設トイレから眺める士幌高原の風景は美しかった。雨のそぼ降る牧草地。紅葉を始めた丘陵の起伏の谷間から立ち昇る霧。目の前には名も知らぬ秋の花が雨に打たれてユラユラ揺れて、クソもよく出て気分壮快。

今日は当然作業中止。雨は小降り、沢の音も静か、美しい3角屋根も静けさの中に調和して倦怠の時を過ごす建設キャンプ。(N. O.)

9月14日

昨日、Oが札幌の女に電話をかけたついでに寮に電話をかけた。けどまだ誰1人来ない。はよ来てくれ〜。帰りたいよう。

キツネが昨日やってきた。3メートルまで近づいてきた。名前はフレップ。(H. Y.)

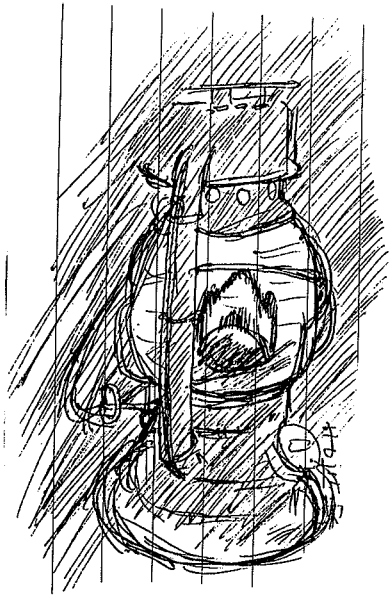
9月21日

今日で現地滞在、満1カ月。思えば1カ月前の今日、起工式前夜の盆踊りに出て狂った日、感激の起工式、ブルのパワーの驚き。委員、寮生の活気。援軍待ちどうしい苛立ちの日々。棟上げの快さ。無念の腰痛に泣いた野地板張り。釘の手応え。そして雨あがりの日、首をかしげるキツネ、フレップ。

張りつめていた日々の感触忘れ難し。しかし仕事は一段落ついた。帳場、現場監督の座を譲り、僕は帰札する。

本を読んでたら急に、僕には他にもっとしなければならない事があるような気がした。「生をつかむ。」ということかな？焦りが走る。

後をお願いします。去り難く思うが、もう一人の僕が出発を乞うている。(T. O.)



石油ランプ

9月24日

今日は日曜日。大工さんは休みだと

いうので、朝早くから白雲山に登り、然別湖の美しい姿と十勝の展望、山々の紅葉の美しさを書きたかったがそれよりも強烈に印象に残ることがあった。

それは大工さんに暇ならやれと言われていたことなのだが、断熱材を屋根裏に張る作業。この断熱材…グラスウール…というのが、ガラス繊維で出来ていて、切ったりすると粉のような細かいトゲが舞い上がり、背中に入るは、鼻や口に入るは、手にちかちかと突き刺さるやらで痛いのかゆいの。もう滅茶苦茶。

ここは夜になると山から吹きおろしが強いですねェ。ヌプカおろしかな。冬は凍えるであろう。

グラスウールをやり残してあることを思うとウンザリする。1番嫌な仕事でありまする。誰か代わってくれ〜。(Y. N.)

9月26日

昨夜、初めて小屋に寝た。予定では壁板が張られていたはずであったが、日曜と昨日、大工さんが来られず、昨夜が俺にとって最後の夜だったのでコンパネで風を防ぎ、あの憎きグラスウールの張られた屋根の下に寝た。たぶん小屋に寝た初めての人間ではなかろうか。数多い委員の中で俺がその栄光を得た訳だ。まさに処女地！

いつものように風が強いのを心配したが、以外に弱く、不思議に朝方も寒くなく安眠することができた。

16日から9日間、たいした仕事（グラスウールは別）もせずに帰るのは残念ですが、のんびりと秋のこの地の良さを味わうことができて非常に満足した気分で帰札できます。キタキツネ、エゾイタチ、シマリス、ナキウサギ…とこの地の動物とも触れる機会が持てました。道路が開通してもこの自然を大切にしなければと痛切に感じています。

さて今日をもちまして、私、小野高秀も建設に携わるのも最後になりそうです。札幌に帰ると追いコンとかで無理やり函館に追いやられてしまいかわいそうです。小屋が建つまで居たかったのですが、どうも無理なようです。

1年生の今頃からですから、ちようど満2年。夢のような話が、今、私の前に大きな三角の屋根として実現しようとしているのです。士幌の町には何度足を運んだでしようか。ヌプカの山も脳裏に刻み込まれているようです。

山々、牧場、十勝平野、まさに北海道そのものの中で、委員の人達、これからの活動をがんばって下さい。(T. O.)

9月28日

仁平氏が1番のバスで帰ったので、今日から1人ぼっち。

朝から壁張りの手伝いをする。すき間を一定に開けなければならないし、サッシ

もありおまけにカラ松材は日に当たるとたちまち乾燥して反ってしまうので、大工さんにとっても面倒な仕事だ。

夜は1人ぼっち。発電機を回しっぱなしでライトをつけ、ラジオもボリュームを大きくする。風は相変わらず強い。酒を飲みながらラジオを聞き本を読む。

誰かいないかなあ。クマ以外ならおいでよ。一緒に酒を飲もう。　(S. O.)

11月18日　竣工開所式

何から書いていいのだろうか。本当にすばらしい日だった。士幌小屋「チセ・フレップ」竣工開所。長い長い間、たくさんの人々が夢を見て待ちこがれた記念すべき日だ。恵迪寮にとっても、士幌町にとっても、そして僕達一人一人の人生にとっても特筆すべき日だ。

9時頃、町の企画課の人達が荷物を積んでやってきた。すぐに会食の下準備を始める。

9時半、マイクロバス一便到着。約40名の寮生がこの小屋の開所を祝いに来てくれた。寮生達は、しきりに「すばらしい」「いい所だ」と言ってくれる。来賓の方々も続々と見えられて、御祝儀が次から次へと届けられる。運輸のジャガイモ、ミカン。久保田商店の酒をはじめ、数え切れない程のお祝いを頂いた。

11時、式典を始める。上谷の開式の辞の後、芹沢さんの開所宣言。北斗への感謝状贈呈。そしてくす玉が割られ、「チセ・フレップよ永遠に」という垂れ幕が現れた。拍手と喚声、まさに開所の喜びを象徴していた。その後、委員長、期成会長、町長、寮長とあいさつが続く。誰も彼もが、この小屋の活用に多大なる期待を寄せていることが言葉のはしばしに表われていた。伊藤の前口上で第70回寮祭記念寮歌「草は萌え出で」を斉唱。

こうして記念すべき竣工開所式典は終わった。

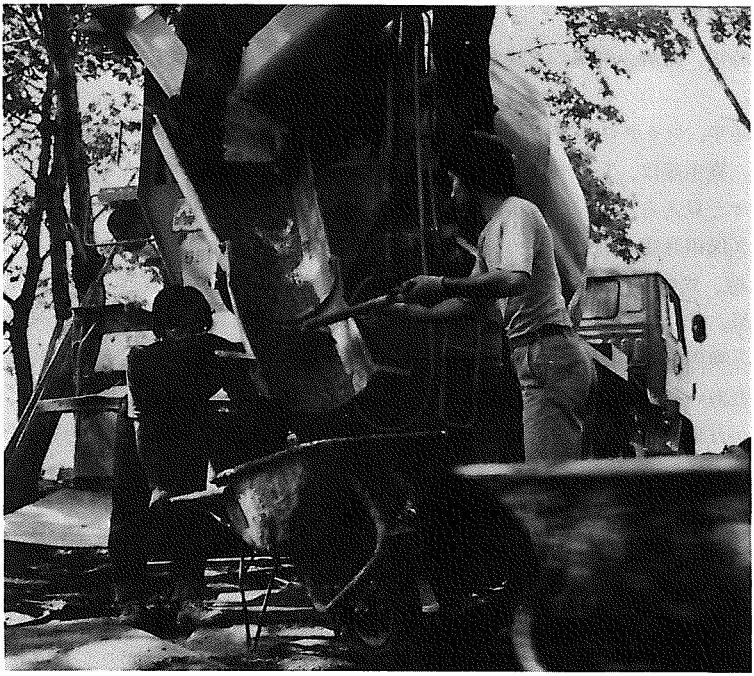
主な人々は山を降り、小屋には今夜泊まる寮生だけが残った。夜中からコンパを始める。歌も芸もなく、委員の思い出話、苦労話を皆で聞くといったふうな静かなコンパだった。僕も活動ノートの中身を紹介しながら万感胸に迫る思いだった。これだけの小屋を建てるのは生易しいものではなかったかと、寄付回りシビアな会議の様子を話す。何も無い所から考えたら、とてつもなくでっかい夢が実現したんだ。これは近来にない快挙だと賛辞が飛び出す。疲れて1人、また1人と寝ていってメンバーが少なくなると、委員の自画自賛という感じの話が少なくなかったが、まあいいや。今夜位は自己満足に酔って、幸せに眠ることにしよう。(N. O.)

―抜粋担当者後記―

そして、ついに小屋は完成した。この「小屋建設日誌」は、小屋という物理的容器を製作する過程においてそれに参加した寮生達の精神的容器であると言えよう。それも容器だけでなく彼等の声という中身が詰まっている。その中身が少しでも読者の方に伝われば幸いである。

さて、「チセ・フレップ」という小屋――物理的環境――は誕生した。次はその中で行われる活動――精神的環境――の形成が必要である。その形成過程における人々の声は、「小屋日誌」として今も綴られている。小屋に立ち寄られた方は是非、その日誌の1ページをめくって頂きたい。

(三次　啓都)



どんな小屋が建ったのか

「『チセ・フレップ』て、なんですか。」
「『士幌小屋』なんです。」
「ああ、あの『山小屋』ですか。」
「いや、『チセ・フレップ』ですよ。行ってみませんか。」
……
「いや、素晴しいですね。」「素敵な小屋だ！」
……

92%

「士幌小屋」とは「山小屋」とは「チセ・フレップ」とは、いったいどんな小屋なんだろう。誰が、何のために、どのように使うために作った小屋なんだろう。自由に、そして根本的に考えてみよう。

1．とにかく小屋は建った！

――プロローグとしてのイメージ――

私は一本のミズナラです。今年でいくつになったのかも忘れてしまいました。私がヒトという動物に初めて出会ったのは、まだ私が青年だったころです。エゾシカを追って私達のモリに侵入してきた時の事はよく覚えています。なぜなら、そのずっと後、二度目にやってきたヒト達の暴挙を思えば、初めてのヒトは私達に大変いたわり深かったからです。二度目の人達は、最初のヒトとはかなりちがった様相をしていて、大変残酷でした。辛うじて私の親戚達が集まっている、この小高い丘はなんとか難をのがれたものの、ここより坊主山寄りの仲間達は、ほとんど切り倒され、根こそぎ運び去られてしまったのです。その仲間達が立っていた跡は、土まで造り変えられ、ボクソウという初めてお目にかかる植物仲間が移植されてきました。でも彼らもかわいそうなものです。春から夏にかけての成長期に、ウシという巨大な動物に常に踏みつけられるばかりか、新しくのばした芽を次から次へとかじられてしまうからです。同情します。

ところで、三度目に私達の傍にヒトが来た時には、さすがに私の命ももう終りだと思いました。いや事実、私の父も母もそして私の多くの子供達はその時殺されてしまったのです。何とか私が生きのびたのは奇跡としか思えません。その時のヒトは、ヒトの中でも比較的若い連中でした。私から見てもヤボッタイ風体ながらも、目だけはキラキラ輝いていたのが印象的でした。彼らは、ブルドーザーとかいう恐ろしい武器を使って、私の家族をなぎ倒し、私のモリに大きな穴をあけてしまいました。そして、その年の冬も間近かというころに、ここに真赤な屋根の三角形をしたコヤなるものをうち建てたものです。

それ以来、確か四度目の冬がやって来ましたが、私のモリにヒトは絶えなくなりました。最初のうちは、いつか彼らに復しゅうをしてやろうとばかり考えていました。でも最近では、ここに来るたびに輝く彼らの目がうらやましく（いよいよ私も年なのでしょうか）、このコヤをあの坊主山が吹きおろす烈風から守ってやるのが、私の生きがいになっています。

2．士幌小屋とは一体なんだろう？

「士幌小屋とは何か？」これはそもそも答えのない問いなのかもしれない。士幌小屋に何らかの形で関わってきた人間は、何人に及ぶかわからない。そしてその一人一人の士幌小屋に対する思い入れ、あるいはそこから受けた印象は各人各様であろう。名称にしても、私は設立委員会にいたから、やはり当時の「士幌小屋」と呼ぶのが最もしっくりくる。しかし、今の正式名称は「チセ・フレップ」ということになっているし、士幌町民の人達は「山小屋」と呼ぶ人が多い。だから、一人一人にとってその人なりのチセ・フレップ、山小屋あるいは士幌小屋というものをもっているのだと思う。また私自身にとっても個人的・主観的な士幌小屋に対する思い入れが大いにある。そして、それを大切にしていきたいと思っている。

だが、ここでわれわれはあえて「士幌小屋とは何か」という問いに、できるだけ客観的な答えを出してみようと思っている。そこで以下においては考察の対象として、「小屋」という最も普遍的・抽象的な代名詞を用いて、「小屋」の存在そのものを位置づけるという試みをしてみたい。その際、言うまでもないことかもしれないが、「小屋」を単なる物理的な存在として把えるのではなく、人間のある特殊な営みによって創られたものとして把えられねばならない。換言すれば、諸々の人間関係の中から生み落とされた産物として「小屋」はあるということを確認しておきたい。さらに、ここで言う人間関係とは、紛れもなくある特定の社会状況における人間関係であることも付け加えておかねばならない。

さて、本論に入る前に、ここでのわれわれの課題と問題意識を深めるため、もう少し述べておかねばならないことがある。それは、われわれがなぜあえてこのようなことを考えようとするのかという理由である。それは、二重になって現われる。一つは、「小屋」の設立（＝建設）、存在（＝運営・利用）という一連の過程を、単に学生の成した自慰的・自己満足的行為にとどめたくないこと。つまりこれらの過程の社会的意義を確認したいということである。だが、そのことは同時に「小屋」の設立・運営・利用を主体的に担ってきたわれわれに対する反省として展開されよう。

このことと重なってくる二つめの理由とは、上の課題を明らかにすることによって、それをとりまく社会状況をも明らかにすることができると考えるからである。それは端的に言えば、都市と地域の問題と言って良い。今日、日本は世界の「経済大国」として君臨している。1960年代のいわゆる「高度成長」のおかげで、国民の大多数が「豊かになった」という実感を持つようになった。しかし、その経済成長

の過程で支払ってきた、そして未だ清算のついていない様々の代償はあまりにも大きい。それらの代償（＝矛盾）の一つに都市と地域の問題がある。すなわち、日本の経済成長の過程は、大都市中心（＝本位）の成長過程であった。地域はただなおざりにされてきたというだけではない。地域からの労働力・資源の収奪、都市生産物と地域生産物との不等価交換という地域の犠牲のもとに、都市のための経済発展が成し遂げられたのである。

このような中で、士幌という一地域に、札幌という都市に住み、都市の大学で学ぶ者が「活動の拠点」としての「小屋」を設立したということは、それだけでも意義のあることであろう。だがそれ以上に、われわれはその地域の抱える問題を考えていく使命を与えられたことになるだろう。

われわれは、以上のような問題意識にたって「小屋」の存在意義を考察していきたいと思う。

3．「小屋」の存在意義に関する一試論

(1)はじめに

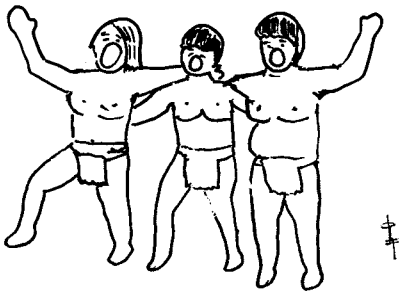
われわれは先に、「小屋」がある特定の社会における人間の営みによって生まれ、そして存在していることを述べた。その人間とはこの場合、抽象的に二種類の集団に分けることができる。そして「小屋」はそれら二種の人間集団の相互の接触・交流によって生まれたものである。そのうち一つは、言うまでもなく「恵迪寮士幌小屋設立委員会」に集った学生を中心とする集団であり、すなわち都市の中の学生である。そして、もう一方は士幌町の人達 —— 役場・農協及びその他多くの町民の人達 —— で、地域（自治体）の中の人々と言えよう。このように、「小屋」は当初より都市と地域の接点に位置していたものであり、そして今なおそれら両者の間に存在し続けていることを確認しておかねばならない。

すると以下において考察すべきことは、次のようになろう。つまり、都市の学生にとっての「小屋」の位置づけはいかなるものか、また地域（自治体）としての士幌町（民）にとっての位置づけはいかなるものかを、それぞれ分析してみる。そして、それら両者の接点をどこに、どのように求め、かついかなる発展的展望を見い出すか。これこそがわれわれが考察すべき最も重要な課題である。

(2)「都市学生」にとっての「小屋」の位置づけの分析
—— 「設立趣意書」を媒介として ——

都市の学生にとって「小屋」の設立・存在はどのような意味をもつのであろうか。

それを考えるには、やはり『士幌小屋設立趣意書』（以下『趣意書』と略す）をみるのが最も適当であろう。



『趣意書』にはこうある。「現在、都市と大学の巨大化の中で学生の無力化や学問の空洞化」が進んでいる。そしてその「見直し」として、「地に足のついた生き方と学問のあり方を模索する場を主体的に創造」するのだ、と。まず前半部分で言う「都市と大学の巨大化」と「学生の無力化や学問の空洞化」がどのような関連をもっているのか、また巨大化・無力化・空洞化という言葉がいかなる意味をもつかをはっきりさせることは重要である。だが、ここでそのことを改めて問うことは本題ではないので、このような現象があるということを前提にして議論を進めていくことにする。すると、『趣意書』のこの部分で述べられたことの趣旨は、現代社会（都市）への批判であると同時に、現代学生、学問に対して自ら投げかけた反省と読みとることができよう。しかし、さらに注目しなければならないことは、ここにおいては単なる批判や反省を述べることにとどまらず、そこから自分達が主体的・創造的にやるべきことを明示していることだ。そしてやるべきことこそ「十勝」（＝士幌）――『趣意書』では「北海道本来の風土を持つ地」として位置づけられている――において、自分達の活動の拠点とする「小屋」を創ることであった。

だが、これだけでは「私たち」都市学生からの一方通行に止まってしまう。悪く解釈すれば、都市学生が地域を利用し、自分達の活動・学習の場を得たものとされかねない。そこで『趣意書』は続けて言う。「小屋」が「広く有効に使われることによって、士幌、十勝、ひいては北海道全体の糧になることを切望する」と。ここでわれわれは考えねばならない。それは、「小屋」をいかに使い、いかなる糧にしていくかということを。少くとも『趣意書』の段階においては、それは曖昧であった。そして、「小屋」の設立過程から設立終了後四年を経た今日に至るまで、この『趣意書』をより深める具体的かつ理論的な議論はまだまだ乏しい状態ではないだろうか。設立過程においては設立それ自体が目的化していたことは否めない。また、設立後の活動においてもまず士幌に行ってみること、小屋を利用することに意義があるとする考えが年々再生産され続け、なかなかその枠を克服しきれてないことも事実であろう。（もちろん実践的には、様々なとりくみがなされてきた。それは次章において詳しく述べられている。ただ、ここで問題としなければならないのは、それらの実践にとりくむ問題意識ないしは、その理論的枠組みである。）

ただ「小屋」を利用することが、地域の「糧」になるという錯覚に陥り（あるいはそのような「糧」のことすら意識にのぼらず）、個人主義的な意味での「主体的」な利用に流れていたとすれば、大いに反省をすべきであろう。また、たとえ地域が学生にとって何かを学ぶ場として――ある程度積極的に――位置づけられていたとしても、さらにもう一歩踏み込んだ認識が必要ではあるまいか。『趣意書』が最後に示唆していたことは、極めて重要である。だからこそそこに安住することは許されないであろう。

では、われわれは今新たにいかなる視点をもちうるのか。これに結論を出す前に、士幌町（民）にとっての「小屋」の位置づけを分析する必要があろう。

(3)「地域」にとっての「小屋」の位置づけの分析

「小屋」が具体的にどのような過程を経て士幌町に建てられたのかは、前章において明らかにされている。そこには、それぞれ当事者の生の声による人間ドラマが描かれている。真実はそこに書かれたものズバリである。しかし、われわれの課題はその人間ドラマが生まれた背景、すなわち士幌町という日本の中の一地域がおかれた社会状況を明らかにすることである。

（表１）士幌町の人口、農業人口の推移

年　次	人　　口	うち農家人口
1955	10,055 (人)	(不明) (人)
1960	9,996	6,319
1965	8,658	5,108
1970	7,605	3,771
1975	7,265	2,901
1980	7,029	2,640

注）士幌町勢要覧より作成

紙数の制約と筆者の能力不足のため、極めて不充分な資料しか示せないが、まず（表１）を見ていただきたい。1960年から80年までの20年間に士幌町の人口は、約3,000人も減少している。とりわけそのうちの農家人口の減少は、実にそれを上回る3,700人もの減少になっている。かって町民の6割強を占めていた農家人口は、今日では4割に満たずその減少率は60%近くになるのである。一体これは何を意味するのであろうか。

士幌町は、明治30年代の開拓以来今日に至るまで常に純農村地域と呼ばれてきている。ところが、'60年代より始められた農業構造再編政策は、上の人口動態を見ただけでも明らかなとおり農村の中味を一変させた。大量の離農・離村は、確かに一方で残存農家の土地集積に結びつき上層農家の育成に役立った。しかし、他方では深刻な過疎問題を発生させた。「選択的拡大」を謳った'60年代の農業政策が「農工間の所得格差是正」をたてまえにして、このような農村の状況を生み出すことに直接作用をしてきたことは明らかであろう。つまり、都市における経済成長に合わせた工業労働力の確保、あるいは肥大する都市人口のための食糧確保にとられた手段は、農村＝地域における徹底した「合理化」であったのだ。

ところで、士幌町はむしろこのような「合理化」政策にある意味では成功裡に対応してきた面がある。ここで詳しく述べる余裕はないが、士幌町農協が「日本一の農協」と言われるゆえんはそこにある。確かに町は豊かになった。しかし、一方でその町自身が多大な犠牲を払いつつ。

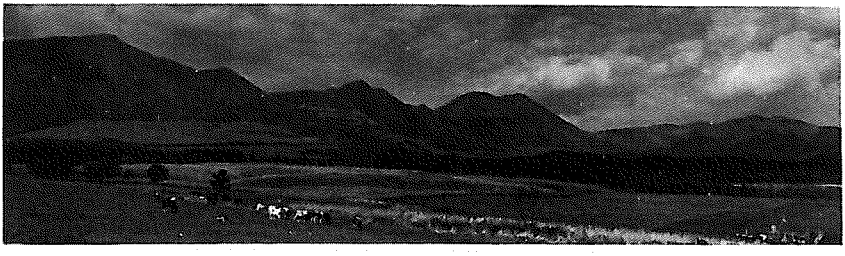
'70年代に入り過疎問題が深刻化し、士幌町は独自の「町づくり計画」にとりくむことになった。いうならば、それまでのハードな経済追究路線に対するソフト面(福祉・教育・文化など）の一層の充実を目指すことへの転換であった。生活水準は都市並みになったが、もっとその地域にあったその地域独自の町づくりがあるのではないか。それは発想の転換であると同時に原点の見直しでもあった。士幌町が「愛と緑の町づくり」を目指して再出発をしたことの意味は大きい。

4．むすびにかえて

いよいよ本格的な議論が始まろうとしている。なのに筆者のあさはかさゆえ、肝心のところで紙数がつきてしまった。まさに龍頭蛇尾の論文（？）になってしまい情けない。だが、不充分ながらも今後の議論の舞台装置は一応整えることができたのではないかと思う。むしろ、ここでは開き直って、ヘタな結論を出してしまうより今後のタタキ台にしてもらった方が正しい発展方向を見い出せるのでは、と勝手に思いこませてもらうことにする。

ところで、現在「小屋」に関しての実践活動は従来に増して活性化しつつある。筆者の拙論は、これらの実践活動に粉砕されてしまうのかもしれない。またその方が望ましいのかもしれない。ごたごた理屈を並べるよりも、その前に自ら動き出すことが、この活動の本来の趣旨であったことも確かだ。私もまた動き出さねばならない。

（小寺　　収）



チセ・フレップ見取図

備品：プロパンガス
炊事用具
毛布　20枚
枕　20ヶ
ツェルト
天体望遠鏡
大工道具
イス・机
資料・書籍

『2階』

畳間
(15畳)

吹抜

玄関

トイレ

台所

室入口

石油
ストーブ

『1階』

小屋は建った。
そして……

気高き野心の男(お)の児等(こら)が
士幌に山小屋(やま)をうち建てぬ
十勝の山と平原(の)に抱かれ
果てなく魂(こころ)翔けるなり
厳しき北の大地より
新たな夢に飛びたたん

（第70回記念祭歌より）

'78年12月5日、恵迪寮士幌小屋チセ・フレップ運営委員会が発足した。そして、'75年当時話し合われていた理想は、だんだんと忘れられていった。

しかし、チセ・フレップは存在するのだ。あの牧場(まきば)に、士幌町に、十勝に、北海道に、……

新しい学生達は、どのように設立趣意を解釈し、どのような活動を行っているのだろうか。

1. 小屋設立以後の活動概説

'79年以降に入学した人間は、共通一次世代と呼ばれ、それまでの学生と多少変わってきているといった議論を時折耳にする。小屋に関わっての活動について言えば、'78年11月18日開所以降に入学したということになり、当然小屋に対する見方も'78年以前に入学した人々と違う。新世代にとって小屋は「建てるもの」ではなく「使うもの」或いは「管理運営するもの」ということになるからである。

竣工開所式の日から「士幌小屋設立委員会」は「士幌小屋チセフレップ運営委員会」と名を変え、完成した小屋を管理、運営する団体となった。そして、前述の様に開所の翌年春、小屋設立には参加していない初の新入生を迎えたわけだが、なにしろ建てた興奮が冷めやらず、率直に言ってこれと言った活動はあまりしていなかった。その後も毎年行なわれることになる5月連休の新歓ツアー、6月初旬の教養祭参加と、企画はあったものの、もう一つ盛り上りに欠く状態だった。2年目以上はことあるごとに設立当時の想い出話をする。1年目も最初は面白がって聞いていたけれど、いい加減うんざりしてくる。週一度の定例会議もぱっとしないことが多かった。

小屋を利用しての活動については運営委員会とは別に「自由大学」が寮内に結成された。生態学部、工学部、農学部などに分かれ、それぞれ植生調査もしくはナキウサギの調査、水力或いは風力による発電実習、という具合にテーマを決めて研究しようということになった。個人的にはある程度の成果をあげたものもあったが、全体としては低調で立消えになってしまった。定常的に活動を行なうにはやはり小屋は遠すぎる。それが一番大きな理由だったと思われる。と同時に活動を小屋に限定しすぎたのか第一次「自由大学」の失敗の原因と考えることができ、これは3年ののち、第二次「自由大学」結成への貴重な教訓となる。

全体としてはもう一つ活気のない運営委員会、自由大学ではあったが、細々とではあるものの士幌町（といっても主に町役場だが）との交流は続けられ、特に本州各地から北大にやってきた学生にとって町の方々に聞かせて貰った話は新鮮な経験だった。町との間に持たれる管理運営委員会(*)では勿論議事内容も大切だが、それ以上に町側から会議に出席される方々との触れあいは楽しく、かつまた考えさせられることも多かった。設立以後低迷が続いたが、それでもなんとか活動を続けてこられたのは各人が士幌に行くこと、町の人に話を聞かせてもらうことを何よりも楽しみにしていたからだと思う。

さて、ここでもう一度設立趣意を思い出してみたい。(P 86参照)これを初めて目

にした時、誰もが少しむずがゆいような気持ちになる。あまりに名文すぎるからか、単語が少しく観念的で一見小難しいからか、異和感を持ってしまう。ところが、実際に小屋に行き、その途中で町の人と会話を持った時、その意味が少しずつ自分のものになってくるような気がするから不思議だ。我々の小屋運営、ならびに町とかかわっての活動はつきつめればその源流を設立趣意に求められる。

毎年本州から北大に入学する学生はかなりの数になる。しかし、その中の何割が北海道を、人々の住む土地としての北海道を歩き、知ろうとするだろうか。札幌までで北海道を知ったような気になってしまうのはあまりに勿体ない。もっと北海道を知りたい。そこで生活する人々と触れあいを持ちたい。そんな気持ちが言いあらわされている。我々の活動が沈滞した時でも意識の座にこの設立趣意があったと言って、決して誇張ではない気がする。小屋が単なる物理的空間を提供する場でなく、しっかりした理念に基いて作られた証しである。それゆえ小屋の設立には参加できなかった'79年以降入学の人間も小屋設立の心意気を感じとることができ、建てた人間と同じような愛着を小屋に対して持つことができる。その素朴な気持ちが、今後共士幌の人々と交わりつつ小屋を管理運営していく出発点になると思う。

以上述べてきたことを拠り所として、我々は種々の活動をしているわけだが、次にそれらを具体的に見ていきたい。わかりやすくするために、大きく3つに分けて記述することにした。

第一番目は小屋をより多くの人に知って貰う為の活動である。小屋は恵迪寮生が中心となって建てられたものではあるが、決して寮生の私物ではない。設立趣意を理解し、主体的な活動に使う人々には一人でも多く利用して欲しい。そういった考えの下に行なわれている。

第二番目は小屋の管理運営に関する活動である。先輩の残してくれた大切な財産を末長くかつより長く維持して行くことがその基本になる。事務的な作業も多くなりがちだが、町との間で持たれる管理運営委員会の会議は士幌町側と北大生側の意志疎通の場として大きな意味をもつ。

最後に小屋を利用して、或いは町と関連して行なわれる活動がある。設立趣意を心の片隅に意識して持たれている活動ということもできる。これについては今後第二次「自由大学」(後述)の中でより活発に行なわれることになろう。

以下それぞれの活動をふりかえりつつまとめてみる。　　(鹿島　哲)

(*) チセ・フレップ管理運営委員会とは、士幌町の人と北大の学生とがチセ・フレップを管理運営するために作った団体であり、士幌小屋チセ・フレップ運営委員会はその北大側の下部組織である。

2. チセ・フレップがより広く使われるためには？

ここに書いた事は、これが最上というものではない。しかし、今まで（'83年2月）の運営委員会の経緯からの一つの結果である。

◎宣伝活動の経緯と解釈

チセ・フレップ完成時から'79年の終わりぐらいまでは、種々のチセ・フレップの宣伝方法が考え出され、実行された。現在でもこの頃の方法が多く取り入れられている。教養祭、寮祭、それに機関紙「ヌプカウシヌプリ」（以下「ヌプカ」と略）による活動報告、新入生歓迎ツアー等各種ツアーによる実際のチセ・フレップの紹介、等の活動が行なわれた。この頃は、設立委員会時代の余韻で「我々の山小屋」という意識が強く、委員一人一人が意欲的に活動していた。しかし、チセ・フレップを建てた人々が卒寮して行った後、運営委員の中での「我々の山小屋」意識は変質していった。

'80年から'81年にかけて、委員には「残されたチセ・フレップ」が大きな厄介者となっていた。この時期の傾向として、活動にオリジナリティーがなく、宣伝活動ばかりでなくほとんど全ての活動が義務と化していた。宣伝活動としては「ヌプカ」やツアー等を行なっていたが、委員の中には自身でチセ・フレップというものを実感していない人間も多く、その内容はもの足りないものになりがちだった。

'81年に運営委員会は大転換期を向えた。今までは、「自分達にとってチセ・フレップとは？」という事で活動していたのだが、「自分達にとって士幌とは？」という事で活動を始めた。その頃我々はチセ・フレップという建物は知っていたが、士幌町に関しては無知であった。そもそもチセ・フレップは、恵迪寮生と士幌町の人達と

〈寮祭〉

毎年10月末に、恵迪寮では寮祭というものが催される。その最終日に寮開放という行事が行なわれ、一般の人々に寮内を見学してもらう。その際寮内各部屋でそれぞれに飾り付けをして、それらの人々を迎え入れるのである。運営委員会でも部屋を飾り付けるのだが、この機会に一般の人々にチセ・フレップの宣伝を行う。チセ・フレップに関する事を書いた紙を部屋内に張ったり、スライド上映をしたり、農場から盗んで来たジャガイモを焼いて士幌直産のジャガイモと称して配ったりもした。来た人々は、皆口々に「こんな素晴しい所なら一度行ってみたい」と言って帰って行くのだが、実際にこれでチセ・フレップを利用したという人は、ほとんどいない。しかし、委員会が（全寮的にそうなのだが）この時期、一時的に活発になるのは否定できない。この寮祭も運営委員会をこれまで支えてきた活動の一つと言えるだろう。

の話の中から生まれて来たのだ。この事に気づいてから委員会の活動内容は大きく進歩した。宣伝活動について言えば、チセ・フレップを知ってもらうチャンスとしてのツアーや情報を伝えるための教養祭・寮祭・「ヌプカ」等に加えて、活動を共にしてチセ・フレップを伝える林間学校が始まった。また、同じ観点から、以前より行っていた農業実習も見直された。ただ最近（'83年2月現在)、せっかくの自分達の活動もやりっぱなしで、その活動の反省もそこそこに次の事に移ってしまう傾向にある。もっと自分達の活動に責任を持つべきである。その影響で「ヌプカ」がまるで作られていない。

チセ・フレップは大きく重い。多分、人間なら誰でもそこから何かを感じ取るだろう。しかし我々は、そのチセ・フレップを宣伝するための旅行会社ではない。宣伝活動というものは、義務的に行なっているのでは利用者も増えず、自分達にとってもつまらないものになってしまう。自分達が広い意味でのチセ・フレップを知ろうとして活動し、そうした諸活動を周囲の人間に報告して行く事が利用者のためばかりでなく自分達のためにもなると思う。　　（山口　　彰）

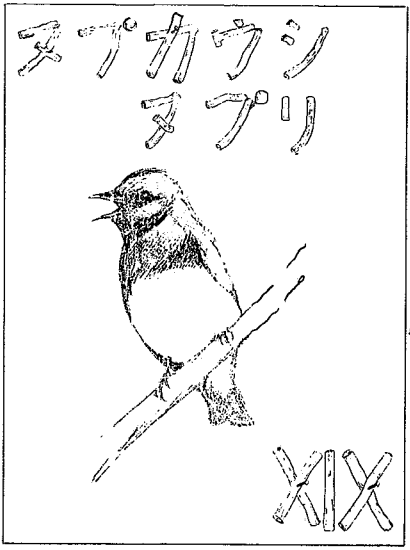
〈教養祭〉

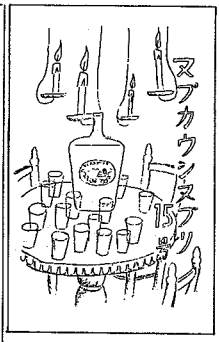
運営委員会は年中行事の一つとして、毎年6月に行なわれる北大の教養祭に参加している。寮祭と同じようにチセ・フレップの宣伝をするのだが、教養祭には寮祭よりも日頃の活動の発表の場という色彩が濃い。それぞれの活動は、大学の普段の授業と別にやっているのであって結構労力を使うのだが、白雲山のナキウサギの研究とか、チセ・フレップ周辺の紹介を兼ねた植生の研究等充実した発表を行っている。

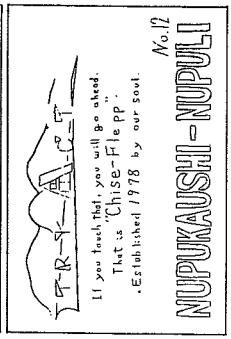
教養祭に参加した団体(教養部のクラスを含めて)を見ると、ディスコをやっていくら儲けたとか喫茶店をやっていくら損したとか言っているものが多い。しかし、大学に来ているのだから、もう少しまじめに学問（広い意味での）に取り組んでも良いのではないだろうか？

〈ツアー〉

運営委員会では、チセ・フレップを知ってもらう手段の一つとしてツアーを企画して、寮内外から広く人を募りチセ・フレップに連れて行くという活動をしている。耳でいくら説明を聞いても実際にチセ・フレップに行ってみなければ、チセ・フレップの事は理解できない。特に5月のゴールデンウィークを使って行なう新入生歓迎ツアーは効果があるようだ。まだ雪の残る白雲山に登ったり、春の山菜を料理したりするのだが、なんと言ってもその風景の雄大さに心を引かれるらしい。(何度行っても同じ事が言えるのだが)ツアーに参加した人の中から運営委員になった人もいるし、また委員にならないまでもその後数回チセ・フレップを尋ねている人も多い。

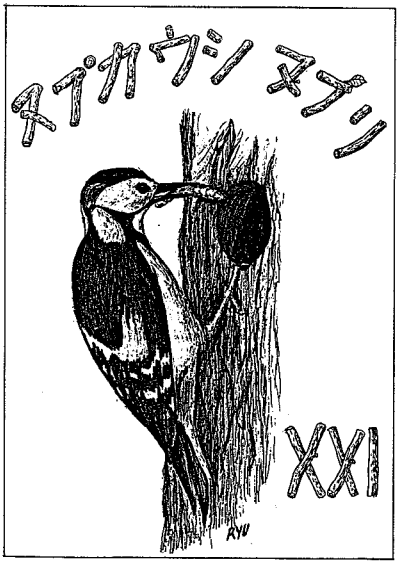


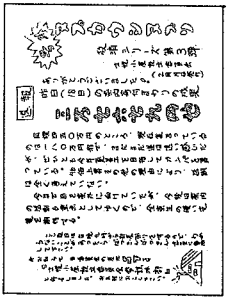


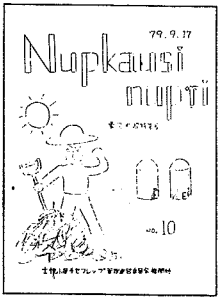


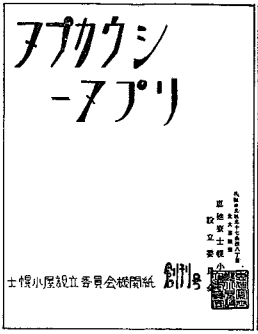
〈機関紙「ヌプカウシヌプリ」〉

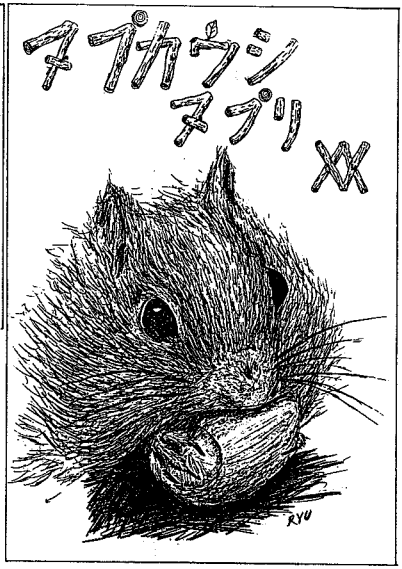
ヌプカウシヌプリという名称は、チセ・フレップをふもとに抱く東ヌプカウシヌプリという山の名から取ったものである。設立委員会、運営委員会を通じて委員達に「ヌプカ」という名で呼ばれて来た。創刊から数え、号外を除いても、'83年2月現在22号まで発行されている。設立委員会時代には、恵迪寮生への設立趣意説明や建設資金の集まり具合、建設工事の経過等の活動報告の役割をしていた。運営委員会時代になると、農業実習等の活動報告の他に、ツアー参加者募集等のチセ・フレップの宣伝という要素が加わって、恵迪寮生ばかりでなく、寮祭、教養祭のおりには、学生や一般市民にも配布された。



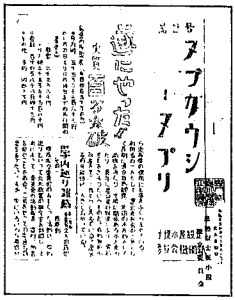




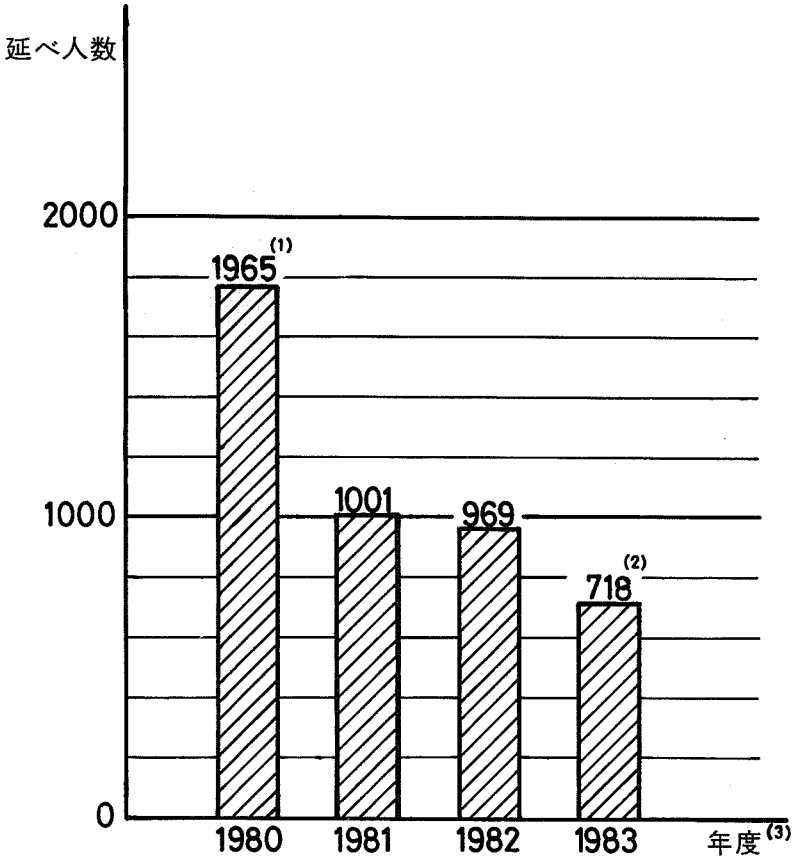




運営委員にとって「ヌプカ」はこれまでに掲げた事以上の役割を果して来た。運営委員会時代に発行された回数は現在までに16回だが、別に定期的に発行していたわけではない。部屋で飼っていた猫の死亡記事や自分の入っているサークルの宣伝等、運営委員会の活動とはまるで関係のない文章も載っている。不思議な事に活動が低迷している時程ひんぱんに発行されている。一時期などは「ヌプカ」を発行する事によって運営委員の関係がつなぎ止められている事もあった。(その逆もあったが) このようにして作られて来た「ヌプカ」を読めば、時代時代の運営委員達の感情が伝わって来る。「ヌプカ」は設立時代、運営時代を通して委員に愛されて来たと言えるだろう。



年度別チセ・フレップ利用者延べ人数



(1) 1980年度の人数は、1979年度(11月～3月)分438人を含む
(2) 1983年度は、4月～1月分までの延べ人数
(3) 年度は前年4月からその年の3月までの期間を表す

（特別寄稿）

士幌文化の新しい息吹きを

宮部　　功（＊）

士幌の山奥に赤い三角屋根の小舎が建てられて4年、チセ・フレップ（赤い屋根の家、又高山植物の俗名）と名づけられ、利用者に親しまれている。北大恵迪寮の附属施設として恵迪寮にゆかりのある人々の浄財を源に、当時の寮生が労力を奉仕した汗の結晶として誕生したもので士幌町も建築費の一部を分担し完成後は町に寄附されたが、運営管理については北大寮生と士幌町内青年代表を主体とした運営委員会に委託し、本来の設置目的を失なわないよう配慮されている。この施設は近代建築物から較べると極めて質素なもので、内装も北大生の手造りによるものもあり、周辺の自然に調和する配慮がなされ、至便、合理主義の現代生活から逃避するかの様にテレビや電話もなく灯具は手づくりで、はだか電球を使用し、生活用具も最低限度のものにしているあたりに青年の逞しさと清々しさを覚え、純粋さを求める気持ちに共感するものである。町営バス終点から約5粁、士幌市街地から約20粁離れた辺地に所在するこの施設を管理する私共の立場からみると、緊急時の連絡方法に一抹の不安を感じ、又一般青少年の利用も考えると公衆衛生面から入浴施設位は何とかしなければと考えている。

この施設の所在する周辺は町民から士幌高原の名称で親しまれている処で、大雪山国立公園をバックにその裾野一帯が大きな牧場（約1千ヘクタール、放牧乳牛等1500頭）となって雄大な北海道らしさを象徴している処で、大自然のふところに抱かれた別天地として俗化されていない事が魅力となっているが、現在然別湖へ通ずる道々工事（広域的な産業開発道路として町民多年の夢である）が進められているので今後人工的な手が加えられる事は予測されるが、土地利用や施設計画等その方向づけを誤らない様にしなければならないのは勿論である。町としては生産牧場と自然景観を調和させた健全な研修レクリェーションの場として、キャンプ場、スキー場、子供の村建設又はユネスコ村等の構想も考えている処で将来多様な階層の人々が交流する場となるものと思われるので、その場合の先達的役割りを山小舎を拠点に寮生やＯＢ関係者に期待し、この真に香り高い新しい士幌文化の息吹きをもたらす様念じているものです。その素地を今からチセフレップの伝統として培い後代に受けつがれる様希うものであります。

最後になりましたが、チセ・フレップ建設を企画し実現させた関係者の方々に心から敬意を表します。

（＊）宮部さんは80年から82年まで士幌町町民企画課長を勤めた。

3. 小屋の管理・運営

「より良いチセ・フレップの管理運営を」ということが小屋の開所以後から現在、そして未来においても考えられなければならない問題である。ここでは、今までの管理運営方法を少し具体的に述べ、これからの姿勢についてつけ加えようと思う。

小屋には管理人が常駐していないので、利用者がいる場合にはその全てが利用者自身のモラルにかかってくる。小屋を利用する者の目的は人それぞれ違ってくるが、それを互いに認めた上で、後に使う者のための配慮を怠らない様にしてもらいたい。そのためには、最低限利用者には設立趣意を理解してもらう様努力しなければならない。営利を目的とせず、ギリギリの格安で利用できる手前、単なる安価別荘の様なつもりで小屋を訪れてくる者もいないわけではない。しかしそういった人々を我々は拒否出来るはずもないし、そういう事をする事自体趣意に反し、趣意の意味を狭くしてしまう。小屋に行って実際に利用してみて趣意を理解してもらう事も必要である。だから我々が利用者に対してなすべき事は、利用手続きの受付と、その際に設立趣意を読んでもらう様に言う事ぐらいである。

小屋の管理運営方針や予算等の具体的な事柄については、士幌町役場で定期的に行なわれる管理運営委員会議の場で話し合う事になっている。この会議には、北大生側の運営委員会の代表6名、士幌町の代表6名が出席し、議事に関しては全員同等な権限を持って発言する事ができる。北大生側のチセ・フレップ運営委員会('83年3月までは恵迪寮内）では、二週間に一回以上の割合で定例及び臨時会議を持っており、委員会内部の意志統一をする事は容易である。しかし、士幌町と北大生側とは月に一度の電話連絡で殆んど事を済ませてしまうので、こちらの意見が手に取る様に士幌町に伝わっているというわけではない。したがって年に一、二回のこの管理運営委員会議の場が大きな役割を持っている。

数少ない士幌側との公式な接触の場という事で、管理運営委員会議の日が近づくと、北大生側の運営委員会の定例会議にも緊張感が高まり、管理運営委員会議に初めて出席する様な者は必要以上に町に対して構えの姿勢をとってしまうようである。しかし、そういった肩の力も、実際に士幌町に行き、役場に何度となく顔を出し色々な話をしているうちに、徐々に抜けて行くのである。

一介の大学生と一地方自治体からの代表者が、一つの事に関して対等に話し合えるという異例の状況がここにはある。このような体験は我々学生にとっては貴重なものである。これも我々の柱となる設立趣意、またそれを創った人々の力がそれ程の結果を導く様なものであったからである。また、こういった学生の夢見事を受け入れてくれるような寛容さが、士幌町にはあったと言える。

今まで四年間以上、北大生側運営委員会と士幌町の共同管理運営という事でやって来たわけであるが、それを振り返ってみるとどうであったろうか。

小屋を利用する者にとっては、その意義や目的は様々であるので、全てを総合して一言で言い表わす事はできない。しかしそれを、北大生側と士幌町という立場をふまえた状況での、小屋への、あるいは士幌町への関わり方という事を考えた場合、多少の説明がつくのではないだろうか。北大生にとっては、士幌の持つすばらしい風土と自然――これには札幌の自然の限界に対する不満の意識もあるのだろうが――に気軽に接し、さらには先に述べた様な士幌町の気質に触れて何かを得る事が、目的なり意義なりになるだろう。また、士幌町にとっては、北大生を主とした外部の人間との交流を盛んにし、それを何らかの形で町の発展に寄与させる事がそうなのだと思う。これら両側からの意義や目的は決して対峙するものではなかったので、今まで農業実習や林間学校等の形で現実化されて来ているわけである。この様に、北大生と士幌町の意義や目的が互いに包括し合える状況にあったという事が、管理運営内容等を北大生対士幌町の妥協というものではなく、互いの信頼関係において進めてくる事ができた要因とも考えられる。

北大生と士幌町との信頼関係、これは協定書において前もって明示されているわけだが、ともすればこういった類の文書というものは、名目上のものになりがちである。しかし、我々は管理運営委員会議の場や、その他の個人的な士幌町民との接触の中から、協定書に示されている信頼関係の原則が、文章だけでなく現実的にも常に心の中に存在し得るものだという事を身をもって実感させられている。

'82年1月頃、町から小屋に関する出費の件について会計検査員からの指摘があり、それまで置き去りにされていた条例化の問題が明確化してきた。その時、町側から出された条例案を見て、まず我々が心配に思ったのは、小屋の所有が公的に士幌町＝士幌町長となる事によって、小屋の管理運営が、我々北大生の意識とはまったく別に進められてしまわないかという事である。その不安は、本格的に条例化の話し合いを持つ3月の管理運営委員会議の日まで続いた。しかしその不安も我々の取り越し苦労だったと気がついた。長年この小屋の管理運営に関わって下さっている神戸さんより、「とにかく北大生の方々にしっかりしてもらわなければ、この小屋は良くなって行かない。」という様な事を言われ、かえって尻をたたかれる感じであった。それまで町に対する必要以上の心配をしていた自分達に気がつき、恥ずかしい思いをした。

士幌町の我々に対する信頼は、我々の先人、設立時代の人々から現在に到るまでにできてきたものであり、その活動実績の証しだと思う。この心理的なつながりを、今後小屋の管理運営に携わる人々にも絶える事なく伝えて行きたい。そのためにももっと、現在直接に管理運営に関わっている我々が欲を出して、士幌町と、そして士幌町民と接して行かなければならない。これからは、農業実習、林間学校等の今までの物に加え、士幌町青年団との交流等を考えた新しい活動を創造し、士幌町の信頼に応えて行きたい。

（市村　猛樹）

（特別寄稿）

チセ・フレップに想う

神戸　　昇（＊）

「恵迪の名を永遠に」のテレビ放映を見た。75年の長い歴史の中に、青春の一時をここに過した寮生は、1万名に達すると言う。この北大の伝統を育てた青春の館が廃絶されるのは、如何にも惜しい。「草木すら時に悲歌を嘆ず、永却の時の流れの尽きざるに、人の世の凡ての何ぞはかなき」と、歴史の流れは否定すべくもない。今日まで保ち得たのが不思議なほどだ。

俳優なる先輩と同期の現役教授との対談が、新学生寮の工事現場を背景に行なわれた。私は、この教授の発言に共感する。「時の流れは、数名の共同生活の寮室を、コンクリートに隔絶された個室に変換させた。しかも、寮生の伝統破壊に怒りさえ覚える、現生活形態維持の切なる希望を無視するかの如く。新学生寮で伝統が生かされ、北大の新しい創造への堅実な営みが行なわれないとすれば、その中の学生は北大生にならず」と。

恵迪寮士幌小屋チセ・フレップ管理運営委員会の現メンバーの諸君は、学内に新サークルを結成、「自由大学」の仮称のもとに、新出発の端緒を求めている。創設僅かに四年にしての変換である。しかし、私はチセ・フレップの真の創造活動に向う胎動として歓迎し、同時に学生諸君の頼もしい力と、この小屋の永遠性を感ずる。

今、私の脳裡には、あのヌプカ山麓にキャンプして、山小屋建設に働く寮生の姿と、落成式の日、小柏の樹を山刀一閃して倒し、その先にチセ・フレップの旗をしばりつけ、小屋前面の大地につきさした、先輩寮生の姿とが浮んでくる。

「チセ・フレップの歴史」の編集発刊は、短い、恵迪寮生とともにあった4年の、単に記録に留まってはならない。其の設立趣意を強調し確認して、広く学力に理解を求めるものであり、新しい出発点となるものだ。

士幌町のチセ・フレップ維持管理体制は、町条例として確立した。あとは、北大生の活動を俟つのみである。

この山小屋は、3～6年前の恵迪寮生の創意と努力と、その奥に流れる北大の伝統と、さらに友情に依って建設されたものだ。（今や過去に埋もれんとする、「恵迪寮生」の独自の施設として、唯一のものとなろう。）この精神の生きる限り、「チセ・フレップ」は、インメルグリューンなのだ。

（＊）神戸氏は昭和15年北大農学部卒、現在士幌チセ・フレップ管理運営委員会委員である。

4. 趣意の実践

現在までの活動

‖農業実習‖

1. なぜ農業実習だったか

私が自由大学に於いて農業実習のチームを組んだのはいくつかの理由があった。

第一に、私は農業というものを全くやったことがなかったから、純粋に、農作業を体験したいと思った事である。これが最も強い理由であったが、私は他の理由をこれに肉づけた。つまり、今の社会はどう考えても工業優先の社会である。政治的にそうであるし、一般都会人の頭の中に農業というものは殆んど居場所がない。かつて天候のあいさつは作物の出来不出来を慮るものであったが今は違う。スーパーに行くと食べものは季節を問わず何でも手に入るし、あるものはパックされて、工業製品と見まちがう。そうして気がついてみると食糧自給率は40%を下回り、トマト一個を作るのに、石油が200ccも必要な社会になってしまった。これは、どこかがおかしい、異常だと考える訳である。人間はやはり食うことからはじまる。だから『国の基本は農にあり』という言葉は、すごく健全な言葉じゃあるまいか。さて、学生という種族はこの農と最も遠い種族ではなかろうか。一方は働いており一方はそうでない。一方は食物の生産活動だが、一方はその生産物に支えられ情報の〝消費〟(知識の醸成)にいそしむのだ。殊に私は工学を目指していたし、一生農業に従事することはないと考えていた。工業というものは、現代で最も支配力が大きい。数ある国々も工業化＝近代化と信じ、やっきになっている。こんな中で「農」や「漁」を考えた事のない工学部生（工学部生とはかぎらないが。）が世に出るとどうなるか。極端に言えば、「原子力とコンピュータで世の中バラ色」なんぞの不毛で不健康でそして有害な考えが増長するばかりだ。一週間ばかりの農作業の手伝いで農業が理解できるとも思わないが、体を動かすこと、農家の人と触れ合うことは、理解を助けるし、更に考える「キッカケ」や「はげみ」を生むと考えたのである。(故に、自分は、農業とかけ離れた所に生きていく人達にむしろ多く参加してほしいと考えていた。)

幸い町は一週間程度の農業実習を受け入れてくれた。その頃自分はかなり形式主義的な所があったから、色々迷惑もかけたし、失敗もあった。それでも農家の人々は我々の活動につきあってもらえた。このことに今は非常に感謝しています。

（大村　　卓）

2．農業実習の変遷

農業実習の歴史を遡ると、小屋設立のきっかけとなった〝士幌自由大学〟まで行きつくことになるが、ここでは設立以降のものについて振り返ってみたい。

'79年は小屋設立以後初めての夏ということもあり、寮生を中心に7名の参加があった。期間は7月21日から28日まで、人によって多少のばらつきはあったが大体一週間酪農家に入った。この年は実習のあとに実習生と受け入れ農家の方々が小屋に集う交歓会を企画したため、実習期間の統一をはかった。交歓会は実習生どうしのつながりという点でメリットはあったが、農家にとっては忙しい時期であり、出てくるのが大変、実習生の日程を揃えなければならない等マイナス面の方が大きいように思われ、この年限りとなった。また、実習日数が一週間前後と短く、「仕事に慣れた頃終ってしまう」という声が実習生、農家双方から出た。この点についても後年への教訓を残すこととなった。

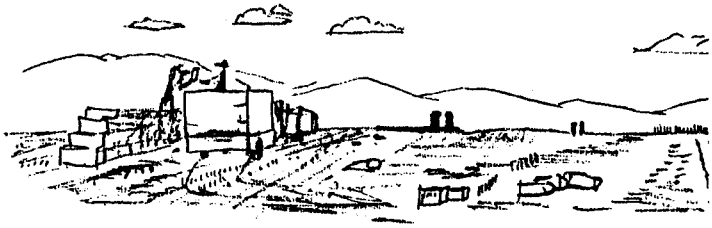
翌'80年は5名の参加をみた。前年の反省を踏まえ、実習期間は各実習生と受け入れ農家の都合をあわせて決め、概ね二週間とした。前年同様参加者一人一人が貴重な体験をしたと意義を認めている。しかし、それをとりまとめ、或いは参加できなかった人間にも伝えるというようなことがもう少しなされるべきだとの反省が出ている。実習期間を揃えなかったので、都合のいい時に入れたという点では良かったが、実習生同志体験を元に話しあい、それをまとめることができなかった。

'81年は「士幌小屋チセ・フレップ運営委員会」の弱体期であり、また第一回の林間学校に取り組んだこともあって農業実習は委員会としては取り組めなかった。

'82年は力強い一年生の加入もあり実習を復活する。形態は'80年とほとんど変らない。委員会として「農業実習」は北大と士幌町のパイプ役になればいいと位置付けた。委員会内から参加者が出るかどうかはともかくとして、最低限町との連絡にあたる窓口として機能する必要がある。この年は夏場を前にしての小屋利用宣伝活動がほとんどなされず、その事と合わせて「もっとアピールしなければいけない」との反省が出た。

農業実習は参加した人にとって貴重な体験となることは間違いない。今後はより多くの参加を得られるよう宣伝活動を行うと共に実習後の総括もしっかりとやっていくべきである。

（鹿島　哲）

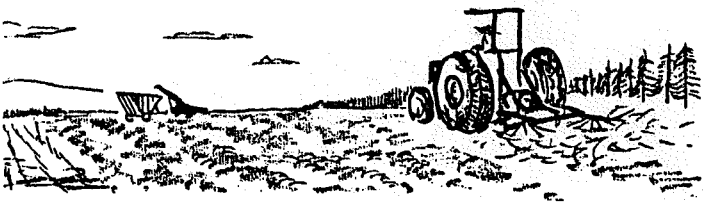


3．農業を体験して

農業実習の意義は、農作業を実体験してみるという事の他にもう一つ、士幌町の町民の方々との交流の場という大きな目的があった。我々学生と違って、日常農作業に忙しい農家の方々とそのような場をつくって行くには、やはり実習が一番良い機会であった。そこから実習生一人一人が、自らの体験をもとに毎日の食生活から日本の農政に至るまで様々な考え方を持つことができたなら、その意義は大きいと思う。

僕が参加したのは、第二回実習（'80 年度）で、やはり酪農実習だった。早朝から日暮れまで一日中、牛の世話と牧草の運搬を手伝った。汗とワラにまみれながら、酪農家には相手が生き物ゆえに、日曜日は勿論、盆も正月もないんだなとつくづく思った。都会のサラリーマンの家庭とは全く別の生活があった。一週間もすると、搾乳にも慣れてきて一頭一頭の牛の個性もわかってくる。実習中、仔牛が一頭生まれたが、分娩の時の農家の人達の真剣な表情。或る日獣医さんがやって来て、牛に種付けをやっていた。「あーあ、俺今まで何も知らなかったんだなあ。」と、その時つくづく思った。種付けとお産の繰り返しで、牛はいつも乳が出るということを。そして同時に、乳首がつぶれやせ衰えた年老いた牛を見て、牛も本当に人間の食生活の為の機械に過ぎないのだなあと段々と家畜というものが哀れに思えてきた。短期間ではあったが、酪農という仕事を自らの日常生活として体験できた事は、非常に貴重であった。

将来的には、現在は酪農実習が主体であるが、その他にも畑作物の収穫や、農協関係の施設（デンプン工場など）の見学などもスケジュールに盛り込むことができるなら、実習の内容にも幅が出てより良いものになるであろう。何かと言えば工業優先の世の中だからこそ、あえて食糧の生産活動に自ら従事し、自分達の食生活を省みる事が今、重要なのではないだろうか。　　（内林　克行）



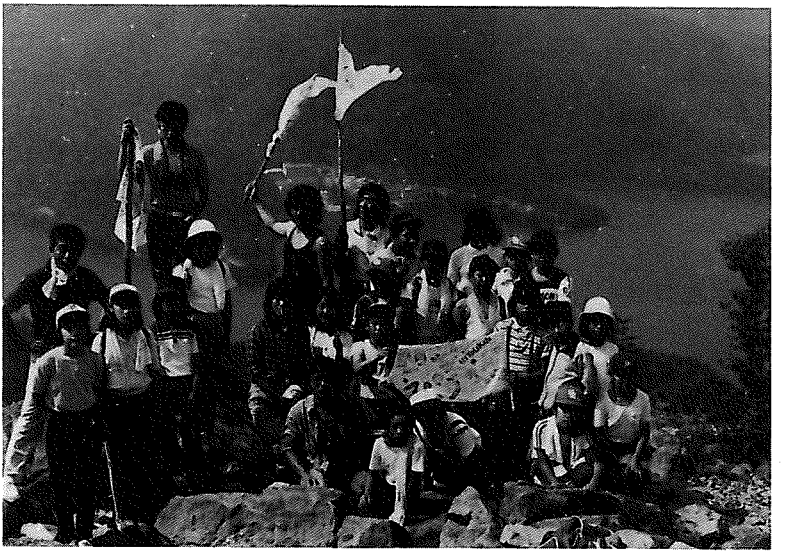
‖ 林間学校 ‖

1．プロローグ

'80年の秋頃から我々数人の運営委員の間で「チセ・フレップを使って士幌町の中学生をでも対象に林間学校をやってみたらいいのではないか。」という事が話題にのぼるようになった。「これから少なくとも18年間は町と付き合って行くのだから、もっとたくさんの人に我々を知ってもらおう」という理由からだ。（実際当時話をする町の人といえば役場の町民企画課の係長さんぐらいのものだった。）その時にはまさか翌年実現しようとは思わなかった。

'81年5月5日の士幌町役場における管理運営委員会の席上、「夏休みの活動に林間学校なんかやってみては。」という意見が我々の側から出、町の側からも「それもいい考えだ。」という意見が返ってきた。そして我々は6月に入って本格的に林間学校に取り組む事になった。

この時、運営委員会は一つの転機を迎えた。当時我々は、「チセ・フレップをどのように使って行くか？」という事に頭を痛めていた。設立委員会時代のように「自分達の山小屋を建てる」という確固たる目的があるわけでなく、下手をすれば無味乾燥な事務作業をやるだけの団体になってしまいそうだった。（実際惰性で委員をやっているような人間もかなり目についた。）林間学校を機に我々は、「士幌町民との交流によってチセ・フレップをより理解して行く事になる。」という事に気づいたと言えよう。正に、暗闇に一条の光が差し込んで来たのである。



2．第一回林間学校

6月中に、以下のような骨格が、内林君を中心とするプロジェクトチームにより作成された。

◎なぜ、林間学校をやるのか？

○　チセ・フレップを「地に足のついた生き方と学問の在り方を模索する場」と位置づけるならば、夏休み中の活動として、一昨年（'79年）から続けてきた農業実習の他に、何かやれないだろうか？つまりチセ・フレップを実践の場として考えてゆくならば、もっと利用の仕方があるはずだ。

○　農業実習以外に、士幌町民との交流の場を持っていない。

○　もし、教員志望の仲間がいるなら、自ら計画したプランで教育実習をすることが、できないか？

○　各自が「教育」ということについて、自分なりに考え、それを実践してゆく場にする事ができるのではないか？

◎対象

一回目という事もあり、勝手も解らない事が多いので、いろいろ意見もあったのだが、小学校高学年を対象とする事になった。

◎活動内容

○　チセ・フレップの存在を知ってもらう。

○　周囲の自然を見直させる。

○　野外活動（自炊・テント生活・キャンプファイアー、スケッチ）

○　ボランティア活動（自雲山清掃登山）

○　期間中は、毎晩その日の活動についてミーティングを行ない、反省を翌日の糧としてゆく。

◎メンバー

小学生の中には女の子もいるのだから、我々の側にも女の子が必要という事で2名北大女子寮の方に手伝ってもらう事になり、参加者は、運営委員の4名と合わせて計6名が参加する事になった。

（以上、内林君のまとめより）

士幌町では、小学生対象という事なので、小学校、ＰＴＡ、教育委員会、それに役場の町民企画課と我々の間で数回話し合いが行なわれた。さすがに初回という事もあり、かなり慎重な意見が交換された。特に安全面について校長先生から耳にタコができる程聞かされた憶えがある。

そして士幌小学校6年生25人（男9人･女16人）学生6人で、8月10日～12日に林間学校が行なわれた。（日程は表1の通り）なんといっても初めての事だし、10日に小学生達がチセ・フレップに着く前の数分間我々は、とてつもない不安感におそわれみんなで逃げようなどと考えた程だった。以下の文章は、林間学校リーダーの内林君による総括である。

第一回林間学校総括

期間中、天候が悪く、特に第二日目の夜には雨が降り出し、折角のテント生活もキャンプファイヤーも出来ず、子供達にはかわいそうであった。

子供25人、学生6人計31人は、備品の面で、小屋の収容限度精一杯であった。また白雲山登山なども小学校の先生方や役場の方の応援なしでは、不可能であったと思うし、何らかの事故も起きていたと思う。

また緊急の際に対応するため小屋に消防署まで届く無線器とジープ1台を常駐させておいた。

何しろ、初めてのことであったので、充分な事は子供達にしてやれなかったと思う。

なお、小屋日記には、当時の彼らの意見、感想が綴られているし、アルバムもつくっておいた。

今夏の第二回目の成功を、昨年以上の成果を祈り、期待している。

('82. 7. 6　内林記)

(表1) 第1回林間学校日程

時　間	10日 (月)	11日 (火)	12日 (水)
午前 6		起床、洗面、体操	起床、洗面、体操
7		朝食の準備	朝食の準備
		朝食	朝食
8		後片づけ	後片づけ
9		おにぎり作り	ミーティング
		地図の読み方…etc	掃除
10		小屋出発	
11		(白雲山登山)	閉校式、小屋出発
午後 12			
1		べんとう	小学校到着
11：30	小学校集合	花の観察(スケッチ)	
2	小屋到着	頂上の清掃	
	水源地探勝		
3	入室、開校式		
4	オリエンテーション	小屋到着、テント設営	
5	夕食の準備	飯盒炊さん	
6	夕食	夕食	
7	後片づけ	後片づけ	
8	ミーティング	ミーティング	
9	就寝	就寝	

3．第二回林間学校

'82年に入って運営委員会の雰囲気が、それ迄よりは活気づいて来た。委員も20人強に増え、前向きに自分達の活動に取り組もうという人もかなり目についた。もっとも、閉寮も間近かであり、そうでなければこれからの時期を乗りきれないのだろうけれど。

そんな中で、第二回林間学校が企画された。この年は、参加するメンバーも早く多く集まり、メンバー内での話し合いや士幌側との交渉もてきぱきと消化されていった。計画や技術面については、前回の経験が生き、かなりなものができた。しかし、二回目という事で幾分気を許したのだろうか、重大な事項を忘れてしまっていた。「なぜ、林間学校をやるのか？」「どういう態度で臨むべきか？」等の方針についての事があまり話されなかったのだ。このような事項は、少なくとも各自の頭の中にイメージできる位話し合うべきだった。そうする事で、この貴重な経験を一層自分のものにできるのだから。

こうして第二回林間学校が行なわれた。対象は、士幌小学校5・6年生。期間は、5年生が7月27～29日、6年生が8月5～7日となった。（日程は、5年も6年も表2の通り）

（表2）第2回林間学校日程

時　間	1日　目	2日　目	3日　目
午前 6		起床	起床
7		朝食	朝食
8			
9		昼食準備	掃除、ミーティング
10	小学校集合、開校式	小屋出発	小屋出発
11	ミーティング、買い出し	(白雲山登山)	水源地見学(バス)
午後 12			
1	小学校出発(バス) （途中徒歩）	頂上到着 昼食、ゴミ拾い	小学校到着、閉校式
2	小屋到着、昼食	下山	
3	小屋周辺散策		
4	飯盒炊さん	小屋到着	
5	夕食	夕食	
6			
7			
8	班活動		
9			
10	就寝	就寝	

＊7月27日～29日（5年生）、8月5日～7日（6年生）

我々のメンバーは、7月と8月では別々の人間でチームを組んでいたのだが（もちろん両方共女の子も加わっていた。）両方に参加するはめになった人間が二人いた。そのうちの一人、7月のチームのリーダーでもある石川君は次のように報告している。

報告（'82年林間学校）

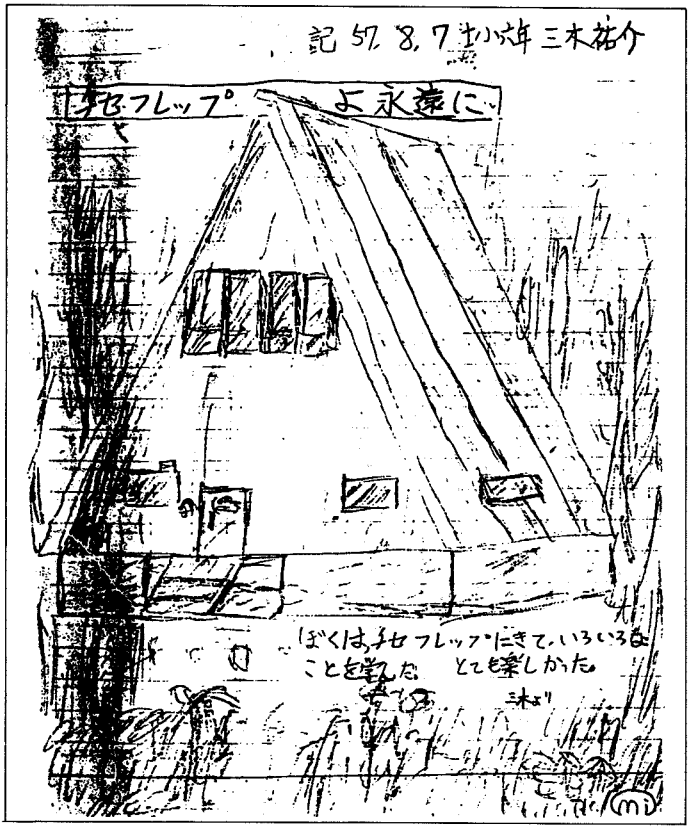
5年生、7月27～29日、6年生8月5～7日に、北大側に多少のトラブルがあったにもかかわらず、天候にもめぐまれすぎ？）すべての予定されていた行事が行なわれました。

子供達は、白雲からの景色に感動し、登山は一番印象に残ったようでした。

反面キャンプファイアーは計画性に問題を残しました。

指のケガ、ねんざ、各一件づつありましたが、まあ成功、といえるのではないでしょうか。

（'82. 9. 1　石川）



4．エピローグ

計画や技術的な面では多くの問題があるのだろうが、第一回・第二回林間学校は成功だったと言えるだろう。そして、それぞれの林間学校は、全く別のものと扱うべきであり、両者を比較することなどできないと思う。

残念ながら両者には、重大な欠点が一つある。どちらも終った後で反省会を行っていない。これはどんな活動にも言える事なのだろうが、その活動がどんなものであり、なぜそうだったのかという事を理解するためには、終った後でもう一度振り返って考えてみなければならないと思う。今後この点については、絶対に欠かす事のないようにして、参加者それぞれにとってより有意義な林間学校にして行かなければならない。

ところで私は、'81年8月、'82年7月、8月の林間学校に参加してみて、士幌町内の知人がうんと増えた。個人的には非常に喜ばしい事である。

最後に一言。林間学校は、難しい理屈を並べる事よりも、「子供と一緒になって思いきり遊ぶ」、これしかない!!

（山口　　彰）

5. 今後に向けて

小屋の建ったいきさつ、設立以後の経過についてはこれまでに述べてきた通りである。この小屋に関わる活動がそれに携わった人間の主体性を基に、士幌町関係者をはじめ多くの人々の協力によって成り立ってきたことはいまさら繰り返す必要はないと思う。

ここでは士幌小屋管理運営委員会の現状を踏まえ、今後の展望について触れてみたい。

現在の活動情況は前章に述べたので詳述を避けるが、概ね設立直後の虚脱状態を抜け出し、着実な活動がつくられていると言える。それは反面活動のマンネリ化につながらないとも限らないので、今後常に新鮮な発想を持って取り組んでいきたい。

具体的には昨年82年秋からの「自由大学」再構築の動きがある。83年春には小屋に関する活動の母胎となった恵迪寮が閉寮となる。それを前にして「小屋が出来たようないい意味での恵迪の伝統(主体性、創造性)、その精神を寮がなくなっても次の世代に引き継ぎたい」「そのような活動は寮内で小さくまとまってやるべきではない、広く全学からメンバーを募るべきである」といった声が出た。それを基にして検討の結果、学内サークル(但し83年3月1日現在未公認)として「自由大学」を結成するに至った。カリキュラム改悪、寮再編など学内においてより強力な管理体制を造ろうという動きの中で、主体的、創造的な活動のできる集団として活発に動いていきたい。具体的には特に活動内容を限定せず、様々な企画に取り組む中で相互に刺激しあって多様な物の考え方を知り、自分の生き方を学んでいけるものとする。

士幌小屋チセ・フレップ運営委員会は、自由大学の一機関として位置付けられている。今後は運営委員会としての管理運営業務と同時にそれを包含する形で「自由大学」がその活動の一つの拠点として小屋を使い、また士幌町との交流活動を行っていく、これからは単に学生として士幌に出かけて何かを学ぶというだけではなく、自分達のできる形で士幌町に新風を吹き込めるような、そのような視点を持って活動していきたい。

(鹿島　哲)

補　　遺

1．略年表
2．資料(1)第一次趣意書
3．資料(2)第二次趣意書
4．資料(3)山小屋に関する協定書
5．士幌高原の山をめぐって
6．士幌高原の植生

略　年　譜 (1) 〈士幌小屋設立委員会小史〉

- 1975・10　恵迪寮祭に、元早大助教授　結城清吾氏をまねく。氏は「独創的町づくり村づくり」を提唱、発想の転換を求める。
- 1976・3　士幌町において結城氏『自由大学』を開講し、寮生多数参加する。この時はじめて、士幌町に小屋をという話が出る。
- 1976・10　士幌小屋設立委員会が結成される。山元周行、美土路達雄両先生に顧問をお願いする。
- 1977・1　設計図、見積書が出来る。三角屋根・二階建ての基本はこのとき確立される。見積は、〆450万円也。
- 1977・2　設立趣意書（一次）作成。教官・寮ＯＢに、助言と資金カンパを求める活動を開始する。そこで、計画のあいまいさ組織の信頼性のなさが指摘される。
- 1977・5　着工の一年延期を決定する。以後、指摘された弱点を克服すべく、基礎づくりに重点をおいた活動を行なう。一次趣意書はとりさげる。
- 1977・6～9　士幌町と集中的に討議を進め、相互の立場を確認する。完成後は小屋を町へ譲渡する事、学生主体の運営を行う、の基本線を確立する。
- 1977・9　新しく趣意書を作る。(二次趣意書)
- 1977・11　教官・ＯＢ・寮生を対象に、寄付金あつめを開始する。
- 1978・5　着工の目度がつき、設計図の再検討、管理運営面のつめ等を町と討議を重ねる。見積もりが650万となった事に驚く。
- 1978・7　町側と寮側で小屋建設期成会を結成し建設から、当面の運営までをこの会を通じて行なうことにする。
- 1978・8・20　小屋に関する協定書調印
- 1978・8・21　小屋起工式とり行なわれる。小屋名称「チセ・フレップ」となる。
- 1978・8・21～10・23　現地にテントを設け、建設作業に委員・寮生多数従事する。
- 1978・10・23　小屋竣工を見る。
- 1978・11・18　本格的に機能を始める。「士幌小屋設立委員会」は「士幌小屋チセ・フレップ運営委員会」に発展的解消をとげる。

略　年　譜 (2)〈士幌小屋チセ・フレップ運営委員会小史〉

- 1978・12・5　〈運営委員会発足〉チセ・フレップ完成の勢いに乗り、やる気に満ちていた。
- 1978・1・27　〈第一回管利運営委員会〉予算等経理のテクニックを見せつけられ学生側唖然とする。農業実習の話が出る。
- 1979・3・4　〈自由大学（旧）発足〉チセ・フレップ設立の趣意を基盤とし、チセ・フレップにおいて各自がそれぞれのテーマを研究する。生態・農・工・芸術等の学部に分かれ、チセ・フレップ付近の植生・風力発電等のテーマがあった。
- 1979・7　〈農業実習開始（士幌町にて）〉参加したK君は、「これが北海道の農業かと実感した。」と語った。
- 1979・11・18　〈一周年記念パーティ〉恵迪寮食堂にて、酒類がビール60本だけという恵迪寮にしては珍しいパーティだった。
- 1980・2　〈自由大学（旧）解散〉それぞれのテーマで活動がいきづまり、各自のやる気も薄れる。「各自にとってやる気の涌く活動とはどんなものか？」という点からやり直して行くために解散した。
- 1980・6～7　〈ＨＢＣのホクレンＣＦ問題〉マスコミの横暴さに全委員激怒する。
- 1980・7・25　〈白雲山空き罐拾いツアー〉山頂に捨てられた空き罐を半分も持って来れなかったのだが、それでも軽トラック1台分はあった。
- 1981・8・5～7　〈第一回林間学校開校〉元気の良い小学生25人と3日間の貴重な体験をする。小学校教師の日頃の努力に脱帽。以後運営委員会も除々に活気づいてゆく。
- 1982・6　〈士幌チセ・フレップ設置条例定められる〉以前と運営方式は、変わらないが、これによって運営委員会は公の団体から認められた事になった。学生の活動がこのように認められたという事は素晴らしい事である。
- 1982・12・17　〈自由大学発足〉学内サークルとなり、新たなる活動が開始された。自由大学の今後の発展に期待する。

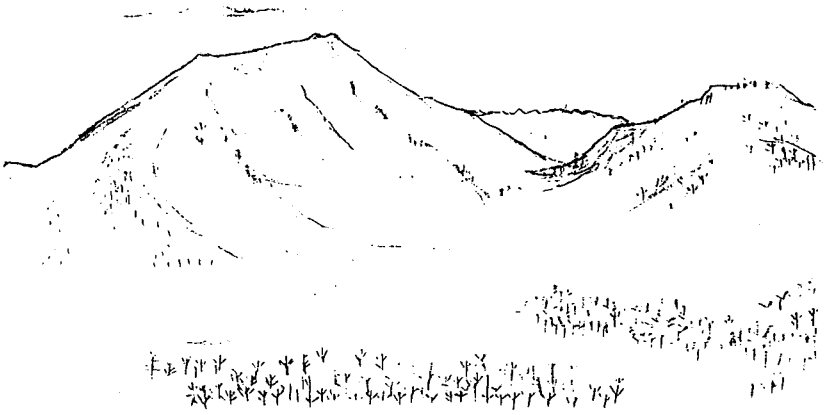
資料(1)　第一次趣意書

恵迪寮　士幌小屋設立計画

私達北大恵迪寮では　一昨年の寮祭がきっかけで道東十勝の士幌町の東大雪山系のふもとに山小屋を建てる計画が起こり，現在その実現めざして計画を進めています。

これまでの活動の結果，町の好意によって土地の提供を受けられることが決まり，また小屋の設計図の作成も完了して，いよいよこれから実際的な準備にとりかかる段階となりました。

そこでこの計画を諸先生先輩方に御理解いただいて，御支援と御助言を仰ぎたいと願っている次第です。

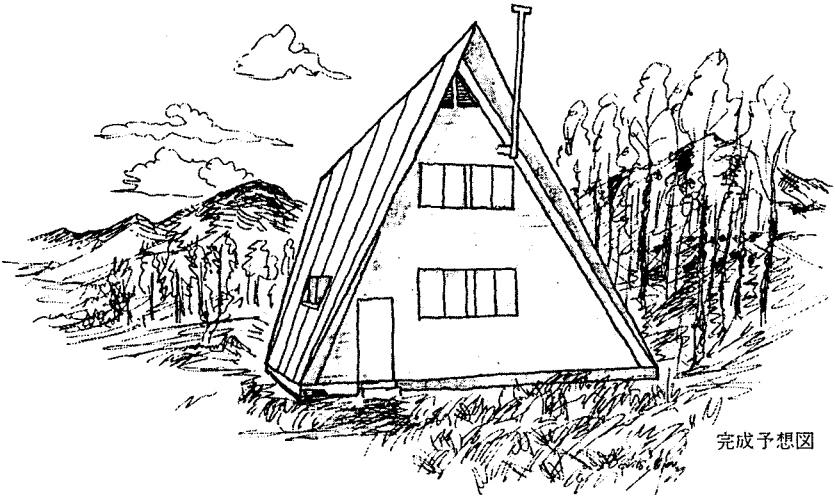


恵迪寮　士幌小屋設立委員会

郵便番号060　札幌市北区北17条西8丁目　北大恵迪寮内
電話：　011（742）7333，7849
振替口座：小樽467番

資料(2)　第二次趣意書

士幌小屋設立趣意書



完成予想図

士幌小屋設立委員会

設立趣意

楡の葉も散り始め忍び寄る冬の気配を感じる今日このごろですが、諸先生、先輩方には御清栄のことと拝察します。

さて私達、北海道大学恵迪寮内の有志間では、50年度の寮祭がきっかけとなって、この度道東十勝の士幌に研修施設（仮称：士幌小屋）を建てることとなり、現在その実現へ向けて計画を進めております。

現在、都市と大学の巨大化の中で学生の無力化や学問の空洞化が進みつつありますが、私たちはこのような学生生活をもう一度見直して、視座を十勝という北海道本来の風土を持つ地に移し、札幌農学校以来の伝統である地に足のついた生き方と学問のあり方を模索する場を主体的に創造してゆこうと思います。そしてこの施設が広く有効に使われることによって、士幌、十勝、ひいては北海道全体の糧になることを切望するものです。

私達、委員会は寮の伝統的行事である開識社の活動が基盤となって生まれたもので、恵迪寮代議員会に於て51年10月に満場一致をもって設立を承認された寮内の公的機関です。

これまでの私たちの活動の結果、士幌町と同町農協の好意によって土地の提供を受けられることが決まり、また設計図も完成して、いよいよこれから実際的な準備にとりかかる段階になりました。現在までに寮生達の出資によって建設総額の約５分の１を集めることができましたが、学生だけではいかんともしがたい状態です。

私達委員も今後できうる限りアルバイトをし、実際の建設作業にも従事して、これまで以上に粉骨砕身の努力を続けてゆく決意です。

ここで是非諸先生、先輩方に御理解いただいて、この計画が現実のものとなるよう御支援と寄付を仰ぎたいと願う次第です。どうか宜しくお願い申し上げます。

尚、当委員会は寮生間の自主的団体であり、大学当局とは公的な関係はありません。

1．使用目的

合宿、自然観察、地元の人々との交流、農業実習、その他趣旨に沿う活動

2．利用対象者

趣旨に賛同する学生、教官、ＯＢ、地元の人々、その他有志

3．小屋の概要

建坪　　：64.8m²（20坪）

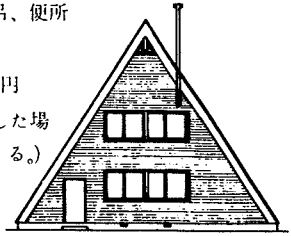
床面積　　：１階　45.4m²（14坪）　　２階　29.2m²（９坪）

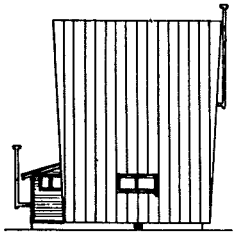
構造　　：木造中２階

宿泊人員　　：20人

設備　　：水道、風呂、便所
　　ストーブ

設計予算金額：4,583,124円
（但し資金が大幅に不足した場合は、計画縮小もありうる。）



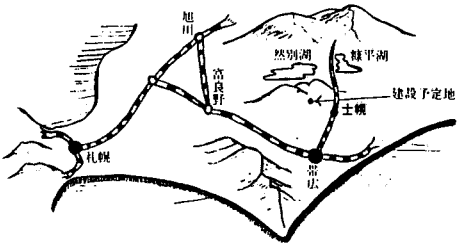


4．工　　期

53年　夏

5．建設場所

河東郡士幌町新田



6．自然環境

帯広の北30kmに位置する士幌町の市街からさらに西へ15kmの大雪山系、東ヌプカウシヌプリ（標高1252m）のふもとである。小屋の建設予定地は、大規模草地と牧場に隣接する海抜約520m の広葉樹林の丘で、背後に雄大な山並を仰ぎ、眼前に十勝平野を一望のもとにのぞむその景観は実に雄大である。また、山ひとつ越えた西側には、然別湖、山田温泉があり、東雲湖（東小沼）も近い。

7．土地

面積：１ha 前後

土地は農協から町が借り、さらに町から私たちが借りうける事が内定している。

8．管理運営

管理運営は町との協力によって行なう。

Ⅰ．管理運営規則は当委員会と町との協議により決定する。

Ⅱ．管理運営委員会を設置し、構成委員を恵迪寮代表、士幌町代表、北大関係者有志とする。

Ⅲ．事務局は恵迪寮内におく。

Ⅳ．利用者からの維持費徴収。

Ⅴ．建物完成後、当委員会はその所有権を町に譲渡することを決定している。これは山火事その他不慮の事故が発生した場合の実質的責任を考慮し、町と協議したものである。

Ⅵ．将来、万一恵迪寮の廃寮及び小屋が使用不能、その他の事態に至った場合は、速やかに町と協議の上、以後の運営について決定する。

9．資金

Ⅰ．小屋設立予算(見積金額)　4,583,124円

Ⅱ．現在の寄付状況　80万円(寮内)

Ⅲ．目標　寮生　200万円　教官　100万円　先輩　150万円

以上のような理念と構想のもとに今後計画を進めていくわけですが、資金も多額の故、私共も誠に心苦しくは思いますが、諸先生、先輩方に是非とも御寄付をお願い申し上げる次第です。なお、その際一口千円としてなるべく三口以上の御寄付をお願い致します。

建設の竣工成り次第、その旨お知らせし、併わせて利用の御案内もさせていただきます。

なお、御意見等ございましたら振替用紙通信欄に御記入下さい。

末筆ながら諸先生、先輩方の益々の御清栄と御健康をお祈り申し上げます。

住所　〒060 札幌市北区北17条西8丁目
恵迪寮内士幌小屋設立委員会
委員長　芹沢　利文
顧　問　山元　周行　美土路　達雄
振替口座番号
郵便　小樽467 恵迪寮士幌小屋設立委員会
銀行　拓銀普通預金　001－0－008－007
代表　山本慎之介

資料(3)　山小屋に関する協定書

士幌小屋設立委員会（以下「甲」という。）と、士幌町（以下「乙」という。）との間に、チセ・フレップ（以下「山小屋」という。）の建設、運営及び維持管理に関し、次のとおり合意したので、後日のために本書2通を作成し、各1通を保有するものとする。

（昭和53年8月20日）

札幌市北区北17条西8丁目　北海道大学恵迪寮内
甲　士幌小屋設立委員会　委員長　大　堀　尚　己　㊞
河東郡士幌町字士幌西2線162番地
乙　河東郡士幌町　　町　長　後　藤　辰　雄　㊞
立会人
札幌市中央区南17条西4丁目2
士幌小屋設立委員会顧問教官
山　本　周　行　㊞
河東郡士幌町東3条2丁目8
神　戸　　昇　㊞

（経緯及び目的）

第1条　北大恵迪寮生は、その自主的活動の一環として士幌町及び同町青年との交流を重ねる中から、山小屋を士幌高原に建設しようとして、甲を組織した。そして「現在、都市と大学の巨大化の中で学生の無力化や学問の空洞化が進みつつあるが、このような学生生活をもう一度見直して、視座を十勝という北海道本来の風土をもつ地に移し、札幌農学校以来の伝統である地に足のついた生き方と、学問のあり方を模索する場を主体的に創造したい。この施設が広く有効に使われることによって、士幌、十勝、ひいては北海道全体の糧になることを切望する。」として山小屋建設の活動を開始した。

一方、「町内外の青少年が、大自然に親しみながら交流し、研修又は会合を重ね身心ともに健全な育成を期するための施設づくり」を目指す乙は、甲の活動を支援して両者でその完成を期することとし、以後は共同で管理運営を行うこととする。

（基本的な合意事項）

第2条　甲と乙の間に確認された合意事項は、次のとおりである。

(1)　甲は、前条の目的にそい、山小屋建設の資金調達を行い、自ら作業に従事し、山小屋建設の主体となる。

(2)　乙は、甲の山小屋建設活動に対し、資金及び工事の便宜供与等の物的支援を行うとともに、建設用地の確保につとめる。

(3)　甲は、完成した山小屋を、本協定に定める条件によって乙に寄附するものとし、乙はその引渡しを受けた後、乙の財産として維持するものとする。

(4) 山小屋の運営管理は、乙の町条例の定めるところによるが、本協定に定める管理運営委員会が実質的な主体となるものとする。

(協定の有効期間)

第3条　本協定は、本日より効力を発し、20年後に失効する。

ただし、用地の貸借契約の更新が得られ、かつ山小屋が使用に耐える状態にあるときは、甲、乙の協議により期間を延長することができる。

(建設用地の確保)

第4条　山小屋の建設用地は、士幌町農業協同組合の所有に係る下記の土地とし、乙が20年間の貸借契約をもって確保し、その維持管理の責任を有することとする。

士幌町字上音更21番地の１１１のうち

山林　１ヘクタール以内

2　前項の期間は、乙と土地所有者との合意により、延長することがあるものとする。

3　甲及び乙は、土地所有者の使用条件を遵守する義務を負う。

(山小屋の建設)

第5条　甲が建設する山小屋に対し、乙は、次により支援を行うものとする。

(1) 建設業者のあっせん、連絡

(2) 甲が行う諸作業に関し、用具のあっせん、宿泊施設の便宜供与

(3) 建設主体工事費に対する資金援助

(4) 建設付帯工事（電気外線及び給水配管とする）に要する費用の負担

(物件の引渡し)

第6条　山小屋の引渡しは、建設工事が竣功し、債務の弁済を終えた後甲から乙に対して寄附の申出をし、乙が受理したときに完了するものとする。

(組織の承継)

第7条　甲は、前条の物件引渡しを行ったときは、仮称「十勝地方研究会」に組織替をするものとし、現在の構成員及び役員はそのまま移行し、本協定その他甲に係る権利、義務のすべてを承継するものとする。

(山小屋の運営管理)

第8条　山小屋の運営管理は、士幌小屋管理運営委員会（以下「管理運営委員会」という。）があたるものとする。

2　管理運営委員会の委員は、甲の代表者6名、乙の関係者6名をもつて組織するものとし、その任期は、2年とし再任を妨げない。

委員に欠員を生じ、補充する場合は、前任者の残任期間とする。

3　管理運営委員会は、次の事項を司さどる。

(1) 年間の管理運営計画の作成

(2) 予算案の検討

(3) 条例、規則、細則等の改廃の検討

(4) 使用料の額

(5) 小屋が滅失した場合及び本協定の有効期限が到来したときの措置
(6) 本協定の定めのない事項又は本協定の解釈上疑義の生じたとき
(7) その他

4 管理運営委員会における決議権は、甲及び乙の関係委員ともに対等とし、協議が成立せず平行線をたどる場合は、町長が、甲の顧問教官及び必要と認める者の意見を聞いた後、最終裁量するものとする。

5 管理運営委員会における運営の基本方針は、次のとおりとする
(1) 趣意にそう形で、山小屋をひろく開放する
(2) 趣意を達成するために、交流、研修その他の諸活動を行う

6 山小屋を利用しようとする者は、管理運営委員会に申請し、許可を受けなければならない。

7 山小屋を利用できる者は、第1条の目的に適合すると認められる北大関係者、士幌町民、その他委員会が適当と認めるものとする。

8 管理運営委員会は、その管理運営上必要があると認められる場合は、利用の制限又は条件を付することができる。

9 山小屋を利用する者は、次の事項を遵守しなければならない。
(1) 利用中は、火災その他事故防止及び施設保全に努めること
(2) 利用中に、施設、器材等にき損、滅失その他の事故が生じたときは速やかに、管理運営委員会に届け、指示をあおぐこと
(3) 自然についての理解を深め、自然環境の保全、動植物の保護につとめること
(4) その他、管理運営委員会の指示に従うこと

10 山小屋の利用にあたって、申込のとりまとめ、許可の仕事は、十勝地方研究会が、管理運営委員会の委託を受けて行う。この場合許可の内容は、乙に連絡をするものとする。

11 甲、乙いずれか一方で止むを得ず委員会の名において事態に対処する場合、委員会の事後承諾を要するものとする。

12 山小屋の利用者は、使用料をあらかじめ町に納付しなければならない。

13 前項の使用料は、毎年度、町の予算を通して管理運営委員会の費用に充当し、なお余裕あるときは、山小屋の維持、補修の経費に充当する。

14 山小屋の維持、管理に要する費用として、乙が負担するものは、およそ次のとおりである。
(1) 電気及び水道の使用料
(2) 建物の火災保険料及び租税公課
(3) 施設の小破、修繕料
(4) 建設用地の貸借に要する経費
(5) 暖房設備及び燃料（但し、利用者負担の残分）
(6) 管理運営委員会の運営費用（通信費、事務費、会議費）
(7) 施設に付帯する備品
(8) し尿汲取料及び定期的見まわり人の委託賃金

15　山小屋の維持管理について甲が負担するものは、およそ次のとおりである。

(1)　什器、備品（前項(7)を除く）、図書

(2)　宣伝に関するもの

(3)　管理運営委員会の出席旅費

16　火災により山小屋が焼失したとき、又は災害により倒壊、大破したときは、乙が保険給付金の範囲内において復旧費を支出するものとする。

17　管理運営委員会は、毎年1月、士幌町において定例会議を開き、必要に応じて臨時の会議を開くものとする。

（建設費と調達）

第9条　山小屋の建設費は、650万円（備品、調度品を含む）を最高限度とする。

2　甲は、上記のうち、450万円の資金調達を目ざすものとする。

3　乙は、上記のうち、200万円を限度として、甲又は、甲を支援する組織に支出するものとする。

（協定の効力）

第10条　この協定は、将来にわたって、乙の条例を支配するものではないが、甲及び乙の基本的な理念にもとずいて合意に達したものであり、今後の運営、維持管理、本協定の解釈、新たな協議事項の基本となるものである。

（相互信頼の原則）

第11条　甲及び乙は、山小屋に関して対等の権利、義務を有するものとし、相互信頼の原則の上に長期間、安定した関係にたって山小屋の管理運営にあたるものとする。

2　乙は、甲の自主的活動を尊重し、士幌町民と北大生との交流をはかり、自然観察又は研修等に対して、便宜をはかるものとする。

3　甲は、乙の町づくり計画その他、長期にわたる乙の町振興計画を理解し、乙の町発展に寄与するものとする。

4　甲及び乙は、この協定の定める期間、いずれか一方に権利及び義務を放棄することがないことを保障する。

（協定の改廃）

第12条　この協定の改廃については、甲及び乙の協議により決定する。

将来道道士幌然別湖線となって然別湖に抜ける計画があるが、個人的には、開通してほしくないものだと思っている。(ある人の報告では、高山植物が、年々目に見えて道の周囲から消えているそうである。)道が、幾度かつづら折れをくり返し、東ヌプカウシヌプリと白雲山を分ける谷間に向かうと、そこからは山道となる。一部足元が危ない所もあるが問題はない。この道は、道道工事のための刈り分けで更に奥へと進むが、白雲への登山道は、途中で分岐することになる。いつしか谷筋が消え、ポコリとあいた陽だまりのところが分岐なのだが、登山道の入口はササでおおい隠されていて分かりにくい。5mも進むとはっきりした道となるから徹底的にさがすのがよい。10mも行くと、道は林間を急に登りだす。高度がどんどん上がると、ガレ場に出る。ここが、白雲山と、通称「ニセ白雲」(「通称」は私にとってのです。ごめんなさい。)のコル(鞍部)である。白雲山へは左側の尾根についた道をとるが、「ニセ白雲」も仲々魅力的で、私にはこちらのほうが静かで好ましく思える。「ニセ白雲」へはガレた石を適当にのぼれば、10分とかからない。

左の尾根をとると、ほどなく、然別湖側からの登山道と合流する。そこから頂上まではわずかの登りである。ナキウサギの機嫌がよければ、かん高く、小鳥と間ちがうような、「チッ．チッ」という鳴き声を聞くことが出来る。時期を選び、更にしんぼう強くまてば、岩の上から毅然として空をにらんで、鳴く姿を目にすることもできる。

冬ーこのあたり一帯は深い雪に閉ざされるが、白雲山頂上だけは、強い風に吹きとばされて雪がつかない。彼らが、冬の間どのように生活しているか、興味深いところだ。頂上をひきかえし、直下の三叉路を右にとると一時間足らずで、然別湖畔温泉に抜けることもできる。又、ひきかえさずに湖面へ下るように進むと、天望山へと続く縦走ルートである。

＊　然別天望山

別名　口唇（くちびる）山。湖畔温泉から見ると湖面にうつる影とあわせて、一組のくちびるのように見えるからだ。縦走路は、白雲山から東の東雲湖まで続いているからこれを利用する。白雲山を下ると、陽あたりのよい鞍部につく。ここから然別湖岸にそって、湖畔温泉に着くこともできる。さて、目の前の尾根を忠実にたどると天望山の頂上は近い。大きく肩を広げたようだった東ヌプカウシヌプリは、ここからは、もっこりした形に見えて愉快だ。天望山には三つのコブがあって、どれがほんとうの頂きかと思う。コブの間に道はのびているのだが、頂き近くとは感じない。下り坂は急につづら折れとなりまもなく足下に東雲湖が樹間から見えるようになる。このあたりは、落ちついた、静かな林で、すっきりした樹幹の間の地面は、びっしりコケ類でおおわれており、雨あがりなど特に美しい。日本の山河が美

士幌高原の山をめぐって

士幌高原は、大雪山系の東南端が、十勝平野につきるところに位置する。比較的知られている山は、東ヌプカウシヌプリ、白雲山、天望山の三座である。特に東ヌプカウシヌプリは、士幌市街からも、その特徴ある山すそが目につく、これら三山には登山道がそなわっており、然別湖側からおとずれる人も多い。天望山の東には、東雲湖という瀟洒な湖がある。

＊　東ヌプカウシヌプリ

別名「ハゲ山」というそうだ。幾度も野火に焼かれ、坊主になったためであると言う。名前にかかわらずこの山に仲々人気があるのはその山容が、どこかしら温かさを感じさせ、ゆるやかに十勝平野とつながる姿と大いに関係があると思う。又、登山道は然別湖畔側であって、小屋の側から、容易に登れることも一役買っている。その東側斜面は急で幾本かきざまれた沢筋には木が見あたらず、冬場のナダレやすさを物語っている。5月上旬、ゴールデンウィークの頃ならば、未だおとなしく身をこごめているブッシュを踏んで小屋から頂上目がけひたすら登ることができる。

又、沢を利用して登る方法もなくはない。登山道で沢に出合ったら渡渉し、対岸の低い尾根を乗越せば頂上直下より派生する沢に出る。始めは白樺林を流れる静かな渓流だが1000 m付近からいきなり急傾斜になる。滝を高巻くと周囲が針葉樹林帯と変わる。暗い沢の登行にあきたころ水流が消えて草付の斜面となり、これを登りきれば頂上は南へすぐである。

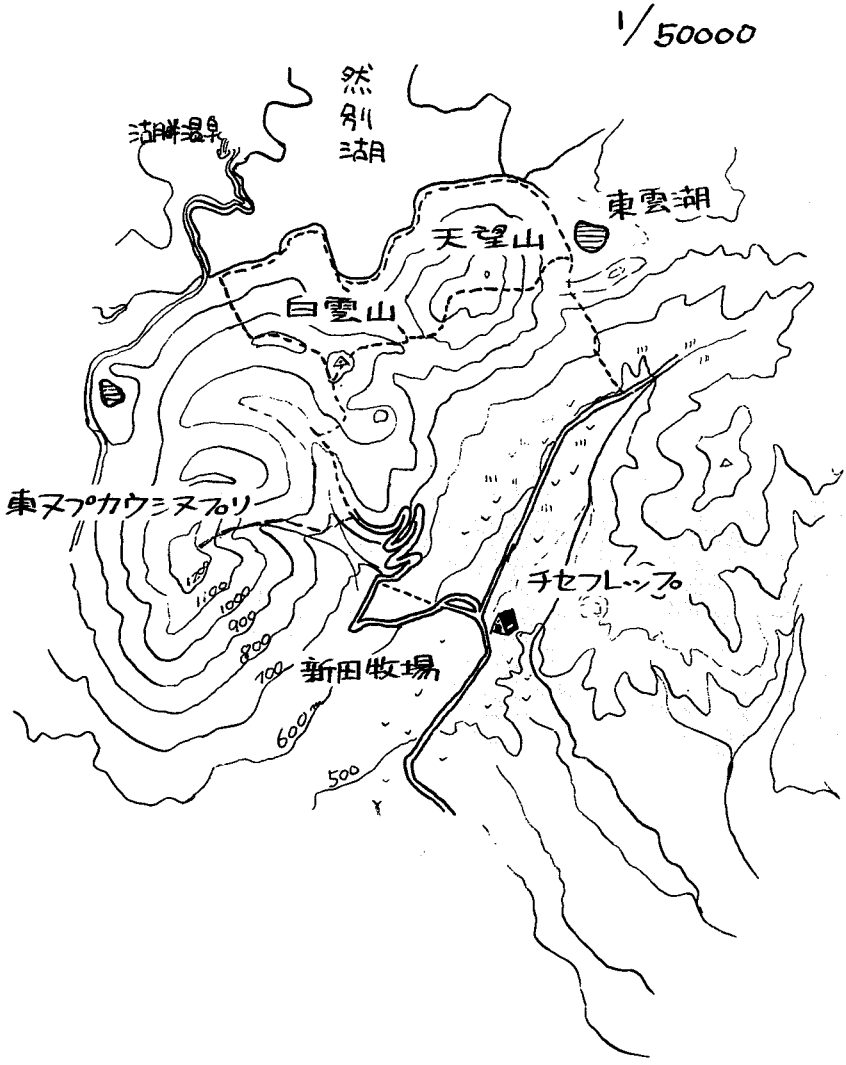
冬の2月ともなれば、雪は充分についているだろうし、雪質も軽いだろうから、高度差500 mほどの東斜面の滑降を楽しめるかもしれない。しかしながら、積雪の安定度と、スキーの快適性は、相反することが多い。雪崩には充分気をつけよう。

＊　白雲山

三座の中で、最もよく登られているのではあるまいか。東ヌプカウシヌプリや天望山の頂きが、ブッシュ帯であるのに比して、ここの頂上は露岩状である。この頂上はナキウサギの生息地として知られている。頂上からは然別湖を見おろし、遠くウペペサンケや、十勝連山をも望むことが出来る。湖水の青さに、針広混交林の独特な緑模様が映えて、美しい。南をむけば、十勝平野を広々と見渡すことができる。一口に平野といっても大小さまざまの起伏や、アクセントをもった平野という事が識れるし、北海道らしい、長く長く連なる防風林も観察することができる。

この山に小屋から登るには、小屋前の道路を終点までたどるとよい。この道路は

小屋周辺の図


1/50000
然別湖
湖畔温泉
東雲湖
天望山
白雲山
東ヌプカウシヌプリ
チセフレップ
新田牧場
1200
1100
1000
900
800
700
600m
500

しいのは水蒸気の所似なりと語ったのは寺田寅彦であったか。

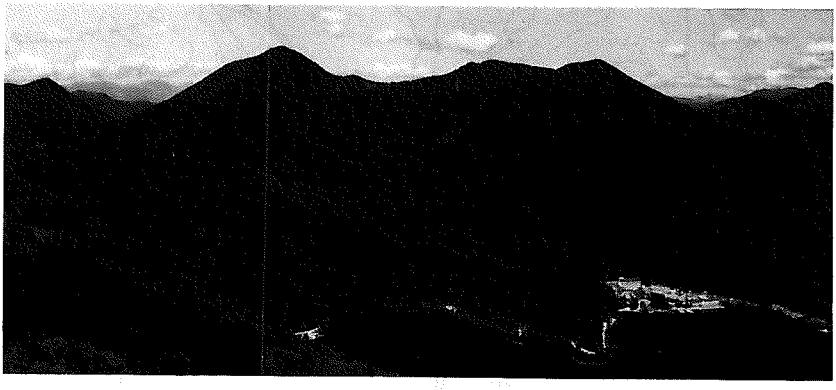
そろそろ下りも終りかという所で、エゾイソツツジの大群落に出くわす。何故こんな所に、高山植物が……と思わせる。つい弁当をひろげたくなるが、ゴミは必ずもちかえろう。

そこを下り降りるともう東雲湖である。ここは士幌におとずれたら是非立ちよりたいところだ。沼草が、真ン丸の形にはえそろっているのがまるで浮いているように見える。

小屋にもどるには、右側へ回りこむ道をとると、道はすぐにササの下となってしまい、失なうが、なに気にすることなし、一番低いあたりめがけて、エイヤッと、南につっきる。少しばかり急斜面をかけおり、ササ・ブッシュ帯を強引につきぬけると、鶴の首の牧野である。ここからは道に出れば小屋まで一本道である。

この他、小屋周辺には、鶴の首水源池や、南東の湿地など訪ずれるに価値の多いところが多い。動物と、植物のあまり迷惑にならぬ範囲で歩きまわると面白いと思う。

（大村　　卓）



士幌高原の植生

士幌高原植物リスト作成は1981年9月から本格的に取りかかり、82年10月の段階で一応の整理をすると、双子葉類159種、単子葉類34種、裸子植物5種、羊歯類12種を確認した。しかし、現在10数種が未同定であり、又、8月に調査が不完全であったため、その補充後にリストの提出を行いたい。

生態的には80年度までの調査が大堀尚己君によって行われている。今回はそれに基づき高原周辺を人工草地・湿地・礫地・森林に大別したものを掲載しておく（図)。又、垂直分布に関しては高所から順に高山植物相・ダケカンバ相・針葉樹林相・落葉広葉樹林相と分けられているが、今後の調査を要する。次に、各々の群落を見ていく。

湿地は、3つの湖の周辺が主たるもので、いわゆるマント群落も観察される。東雲湖は実際は沼であり周辺は湿原となっている。又、沢沿いのかなりの幅に渡ってヤナギ属・カエデ等の観察される所もあり、湿性地として含めても良いと思われる。

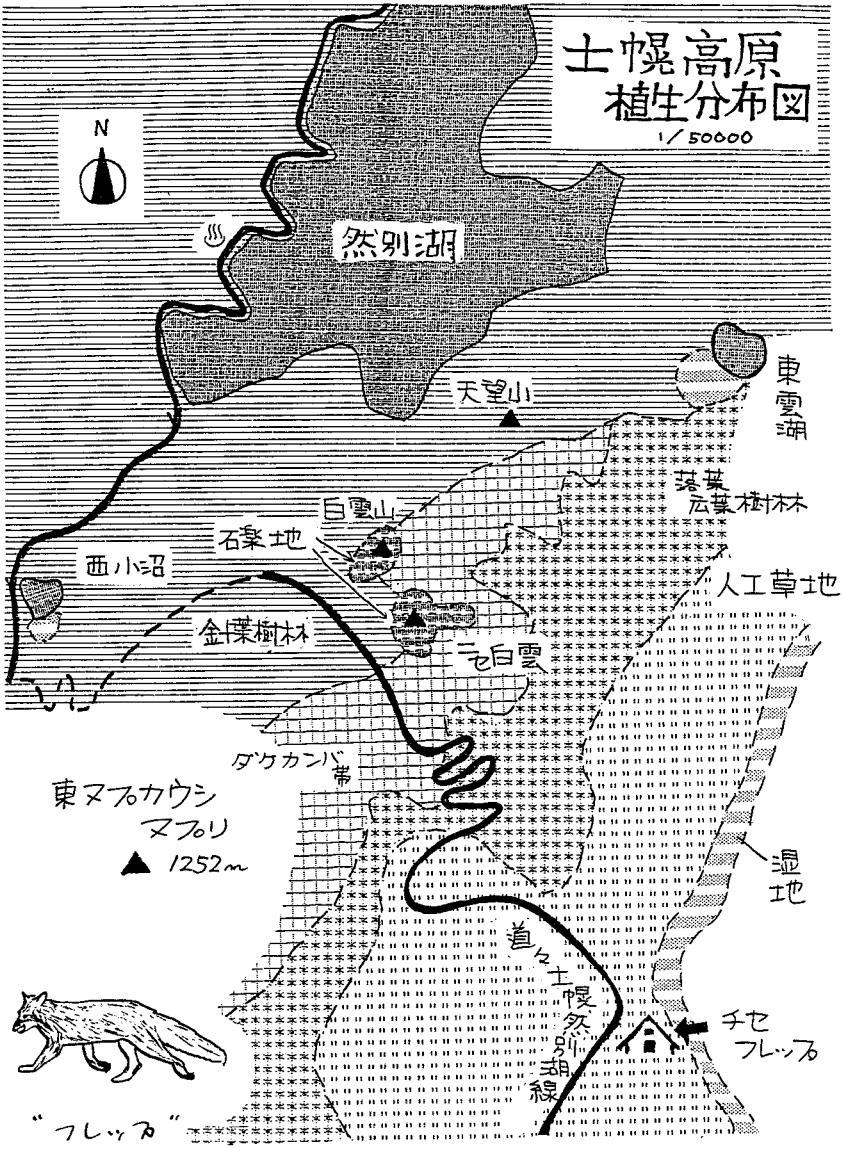
礫地は主に白雲及びニセ白雲（通称）山頂一帯を指し、標高としては1000 mを越す。この辺にはエゾイソツツジ・イワブクロ・コケモモなどの高山植物が比較的多く観察され、士幌高原の財産とも言える。数年前にヌプカウシヌプリで『高山植物の女王』と呼ばれるコマクサが見つかって間も無く見物人が増えた途端に絶滅した、という事実がある。この様なことが二度とない様に、この両山頂一帯には、登山路を一本化するなどの措置をとる必要も出てくるであろう。ここにはハイマツが散生しているが、低所の植物が頂上付近まで良く生育しており、ハイマツ帯及び高山植物帯は共に認め難い。

森林相がこの区分では大半を占めるわけだが、更にダケカンバ群・針葉樹林群・落葉広葉樹林群に分けられる。ダケカンバ群は亜高山帯の指標とされているものの一つで士幌高原においては800 m～1200 mの間で出現している。針葉樹林群はエゾマツ・トドマツが代表的なものである。士幌高原では、北側斜面には針葉樹林群が観察されるが、南側斜面では消失するという特徴を持つ。原因としては、両斜面の雪どけの時期の差や雪崩の発生の差などを考えられるが今後の調査を待って判断したい。針葉樹林林床には多くの蘚類を伴い、手の入らない原始林相を示す所もある。落葉広葉樹林群はミズナラ・シラカンバを代表としているが林床にササ群落を有することも多く、単独のササ群落をこの群に入れても差し仕えないと思う。これらは遷移の途上相に位置することも共通している。この要因としては十勝に多い山火事

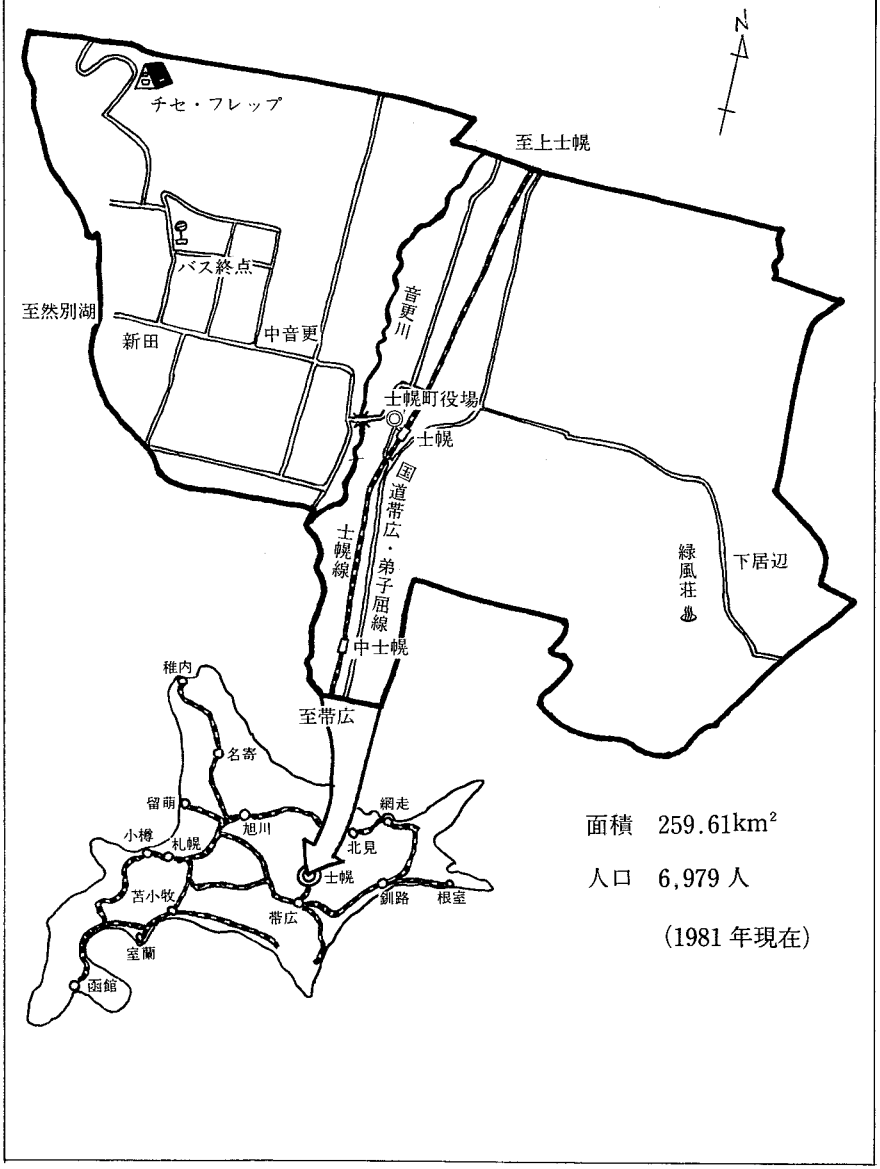
というものが考えられる。山火事の後でもササ・シラカンバはすぐに育つからである。

以上、不完全ながら士幌高原植生の概要を示したが詳細な点に関して機会を改めて報告をしていきたい。

（露崎　史郎）



士幌町地図


N
チセ・フレップ
至上士幌
バス終点
至然別湖
新田
中音更
音更川
士幌町役場
士幌
国道帯広・弟子屈線
士幌線
中士幌
緑風荘
下居辺
稚内
至帯広
名寄
留萌
旭川
網走
小樽
札幌
北見
士幌
苫小牧
釧路
根室
帯広
室蘭
函館
面積　259.61km²
人口　6,979 人
(1981 年現在)

■ あとがき ■

昨年夏前に発案されたこの本を作る計画も当初の予想通り（？）遅々として進まず、随分予定から遅れてしまいました。一時は一体どうなることやらと途方にくれかけましたが、なんとか完成にこぎつけほっと一息といったところです。随所に編集の稚拙が目立ち恥しい限りですが、この活動のきっかけ、基本となる精神はいくらかでも伝わるのではないかと思っています。

小屋の建設にあたっては、士幌町・士幌町農業協同組合・同青年部・同商工会青年部・北斗産業・小野設計事務所・寺田技建・士幌ライオンズクラブ・鷲見さん始め共同畜舎の皆さん・士幌高校・くぼた商店・加藤家具店（帯広）・十勝エルム会その他、多くの人々のお世話になりました。又、我々の資金カンパのお願いを心よくひきうけて下さった方々、数々の助言・激励をお寄せ下さった方々ほんとうにありがとうございました。これからも我々の活動を見守っていただけるよう勝手ながらお願いいたします。

この本を出版するにあたっては、既に社会に出て様々な方面で活躍している諸先輩に色々な面に於て御協力をいただきました。そして、北大の山元周行先生、士幌町の浪内一洋さん、神戸昇さん、宮部功さん、この活動の産みの親とも言える結城清吾先生には忙しい中、原稿を心よくひき受けて下さいました。この場を借りて改めてお礼申しあげます。

また、高速印刷センターの皆様には、多くの助言をいただき、我々の無理な注文を快よく引き受けていただくなど、ひとかたならずお世話になりました。

各章の執筆者は以下のとおりです。

士幌小屋初期の頃 ―――― 鹿田幸年
小屋の概要決まるまで ―――― 山本　牧
一次趣意書・二次趣意書 ―――― 矢野洋明・芹沢利文
小屋設立の現実化に向けて ―――― 大堀尚己
どんな小屋が建ったのか ―――― 小寺　収
小屋設立以後の活動概説 ―――― 鹿島　哲
チセ・フレップがより広く使われるためには ―――― 山口　彰
小屋の管理運営 ―――― 市村猛樹
趣意の実践 ―――― 山口　彰・鹿島　哲・内林克行・大村　卓
今後に向けて ―――― 鹿島　哲
士幌高原の山をめぐって ―――― 大村　卓
士幌高原の植生 ―――― 露崎史郎

北大恵迪寮
士幌小屋活動の記録
－ チセ・フレップよ永遠に －

発　行　昭和58年４月

編　集　小屋史編集委員会

発行者　恵迪寮士幌小屋チセ・フレップ
運営委員会

印刷所　協業組合
高速印刷センター
札幌市西区手稲稲穂472
TEL　(011)683－2231